

あの日のナポレオンを覚えているか

岸若まみず

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

前作もシンデレラガールズの二次創作をやりましたが、やり残した事が色々あるのでちょっとやり直します。

男の少ない世界で転生オリ主がアイドル達と頑張る話です、タグもほぼ前回と同じです。

今回は正統派にプロデューススタートです。

別のもやつてるんで不定期更新、月イチぐらいはなんとかしたいです。

目 次

第1話	
第2話	
第3話	
第4話	
第5話	
第6話	
第7話	
第8話	
第9話	
第10話	美城、クローネやめるつてよ
第11話	ミニアニ大作戦 前編
第12話	ミニアニ大作戦 中編
第13話	ミニアニ大作戦 後編
第14話	
第15話	ライヴ・イン・ジャパン
第16話	
第17話	劇場版 SUPER BIRD
第18話	
第19話	
第20話	

206 195 186 171 158 146 133 120 110 97 88 80 71 61 51 41 32 24 11 1

# 第1話

異世界転生だろうが魔界転生だろうが、俺のやることは変わらない。

音楽、音楽、音楽だ。

この妙に男の少ない世界に生まれ落ちてから、俺は前世と同じように音楽に身を捧げてきた。

3歳にしてピアノを習い、1ヶ月で破門。

その後なんとか独学で学ぼうとしたが、なぜか怒り狂つた親におもちゃやのピアノを破壊されて金輪際鍵盤に触ることを禁止された。なぜだ。

4歳にして声楽を学び、一週間で破門。

親には家で歌う事を禁じられ、歌つて学ぶ系の教育テレビは完全にロツクアウトされた。

なぜだ。

5歳にしてヴァイオリンを学び、3日で破門。

親は俺に頑なにヴァイオリンを買い与えなかつたので、そもそも家では練習できなかつた。

なぜなのだ。

幼稚園でもお遊戯の時間は俺だけ年少の子供と積み木で遊ばされ、何もさせてもらえなかつた。

教育の敗北だろうそれは！

ただリスニングは許されていたので、親のCDやレコードを何でも聴いた。

うちの母親はプロの作曲家で、家には様々な本や音源がしこたまあつた。

貪るようにそれらを聴き込み、本からは理論を学び、テレビでやっているアニメも見ず、ライブやコンサートの映像を見続けた。

親はことあるごとに俺の事を『かわいそうな子』扱いしたが、こんな最高の環境を用意してもらつて『かわいそうな子』なんてことはあり得ない。

俺は最高に充実していた。

だが実践の方はなかなかに厳しい。

家で楽器に触らせてもらえないのは序の口で。

小学校の音楽の時間では毎回観客役を任され。

中学では俺だけ自習の時間だ。

小遣い貯めて習いに行つたギター教室は1時間で叩き出され。一念発起して向かつたピアノ教室では塩をまいて追い返された。なぜなのだ！

しかし、そんな俺でも迎え入れてくれる場所が1つだけあつた。ライブハウスだ。

頭に『場末の』とつくその店『ワニの酒場』は歴史だけは古く。あとは小汚く、ヤニ臭く、品性下劣な人間の集う場所だった。しかし、誰が来ても受け止める懐の深い場所でもあつたのだ。

俺は15歳の夏のその日、アコースティックギターを持ってそのステージに立つた。

イントロのCのアルペジオが始まつた瞬間『いいぞー兄ちゃん！』

『脱げー！』とか盛り上がつていた客席がざわつき。

出口へと向かう人の列が5秒とかからず出来上がつたが……バカめ！出口は塞いでおいたぜ！！

2曲目の途中でヤンキー女が耳を塞いでステージへと特攻してきたが、俺の空手3段キックで客席へと逆戻りだ。

しつかり30分演奏して、倒れ伏す雑魚どもにファルセットでどどめを入れて楽屋へと戻る。

出禁にはならなかつた。  
こここの店長は神だ。

「兄ちゃん人気なくてブツキング組めないよ」

と最近めつきり耳が遠くなつたと噂の初老の店長に言われてしまつたが、ブツキングが組めないなら組める相手を連れてくればいいのだ。

普段から出席日数削つてバイトしてまで各所のライブハウスに入り浸りな俺は、様々なバンドに声をかけまくつた。

腕なんか気にしない、人を集めて俺が演奏できるなら相手はこだわらなかつた。

方向性のブレてるバンドにはCDを貸しまくつたり人を紹介したりして恩を売り。

初心者にはいい楽器屋からスタジオから色々連れてつて面倒を見てやつた。

いまいちブレイクしないバンドにはプロモーターやレーベル、ライブハウスを紹介して手助けしてやる。

俺は対バン相手を集め続けることができ、各所には人材が回り、バンドは選択肢が増え、ライブハウスは何もせずにブツキングが組めた。

Win—Winだ。

ただ俺の定期イベントの名前を『天領鍍金の暗黒歌謡祭』<sup>めつき</sup>つて名前にするのはやめてくれ。

暗黒歌謡は俺に効く。

そのうちバンドは勝手に集まるようになつた。

というか初心者だと、方向性に迷つたバンドだと、メンバーが抜けちやつたバンドだとそういうのがわんさかやってきて俺に相談してくれるようになつたのだ。

『暗黒歌謡祭』からメジャーに行つたバンドや、インディーながらブレ

イクしたバンドも結構いて、その人達の紹介で出向いて来る奴らもいた。

いつのまにか、暗黒歌謡祭は地域のバンドの登竜門的イベントで出世していたのだ。

俺は音楽の話がてきて嬉しい、彼らは悩みが解消できたりして嬉しい。

Win—Winだ。

ただ俺の事を鍍金プロデューサーとか言つて、ステージから引きずり下ろそうとするのはやめてほしい。

俺はアーティストなんだ！

演奏がしたいから対バンを集めてるだけなんだ！  
外圧で演奏時間を10分にまで縮められたんだから、それぐらい我慢してくれ！

そんなある日。

暗黒歌謡祭の仲間の1人が作つたライブハウスで開店前から店長と駄弁つていたら、背が高くてキツい顔の美人がスースにヒールでやってきた。

「私はこういうものだが」

と差し出した名刺には『346プロダクション アイドル事業部課長 美城美舟』とあつた。

「バンド系のアイドルを探してるって事？ちょうど今日ここでいいのが演るよ」

「いや違う、私がほしいのは君だ」

この世界に生まれ落ちて、初めて人から音楽的に求められた瞬間

だつた。

後で聞いたが、このときの俺は非常にだらしのない顔をして馬鹿みたいな早口で喋っていたらしい。

「えつ？俺……？まいったな！俺かく、わかっちゃうよねやっぱ、才能だからな！俺もなく。あつ、なんか飲む？奢るよ」

「結構」

「いや～即答はできないんだけどね～俺も仕事（コンビニバイト）あるからね～。でもせつかく来てもらつたんだから一曲ぐらい聴いてもらおうかな？店長！後でステージ使わしてよ」

「マイク持つたあんたは一生出禁」

「そこをなんとか！頼む!!」

「だめだめ、裏の墓地で歌つてきなさいよ。死体も蘇るわよ」

「いいじやねえか一曲ぐらい！」

「うちはカラオケじやないの」

「カラオケも出禁なんだよ！」

俺が店長と掴み合いの言い合いをしていたら、ステージでリハしていたバンドから「あのー」と声がかかった。

「うちらもうりハいいんで、その時間で歌わせてあげてくださいよ。せつかくの镀金さん<sup>めつき</sup>のチャンスなんですから」

「こいつを甘やかすな！」

「いいつて言つてんだからいいだろ！」

「知らないからね！5分したら戻つてくるから。全員外に出な!!」

その場にいた人間がバタバタと店外へと出ていき、残つたのは俺と美城さんだけだ。

「別に歌を聴きにきたわけではないが、そこまで言うなら聴かせてもらおうか」

と腕組みをする美城さんに向かつて、俺の魂からの熱唱は響き渡つ

たのだつた。

俺はアイドルじやなくてプロデューサーとしてリクルートされていたらしい。

後日呼びつけられた超巨大な美城芸能の中のアイドル事務所で、俺は自分の恥ずかしい勘違いを詫びた。

しかし美城課長は「いや、こちらにも非があつたこと」と真顔で言ってくれて一安心。

ただ、用意されている契約書に赤文字で『業務の上で絶対に歌唱及び演奏を行わないこと、鼻歌も禁ずる』とでつかく書いてあるのに、少しだけ恨み節を感じた。

少しだよな？

美城課長の話をよくよく聞いてみると、俺の事を推薦してくれたのはこれまで暗黒歌謡祭に出てくれたバンドの子たちだつた。

俺がコンビニバイトのフリータードということを心配してくれていたらしい。

最近は親からも「働かないなら婿にでもいけ」と言われていたしな。この就職氷河期の時代に、職の紹介自体は大助かりだ。

「君の音楽以外の能力、人格、人脈の全てを買いたい、一緒にやつてくれるか？」

と美城課長に言われたので。

俺は「喜んで！」と書類に判をついた。

アイドルに対するビジョンは何もなかつた。だが当面の問題はなかつた。

事務所にアイドルなんていなかつたからだ。

2012年の春、俺はスーツを着て街へと出ていた。

この春発足した美城芸能アイドル事業部は3人のプロデューサーでそれぞれ1つづつ、計3つのプロジェクトを開始することになったのだ。

まず1つは今西部長による、バラエティ向けのアイドルを緩く育成する『スリースマイルプロジェクト』。

これは裏方とアイドルとファンの、3つのスマイルを大事にしようという意味だそうだ。

今西部長は各地の養成所に向かつて足でアイドルを集めること。

次に美城課長による、歌つて踊れるハイエンドアイドルを育成する『プロジェクト・クローネ』。

色々言つてたけどよくわかんない。

基本は書類選考と紹介でアイドルを集めること。

最後に俺の『プロジェクト・オブ・シークレット』。

何も考えてない。

ただ期限が来てしまったから「敵に奇襲をかけんとするならば、まづ身内に秘さねばなりません……」とかぶつこいただけだ。

美城課長は「ふむ……『プロジェクト・オブ・シーケレット』か……」と呟き、許可を出した。

あの人は高二病だから通ると踏んでたぜ。

今西部長は小声で「天領くん、何も思いつかなかつたらいつでも相談してね」と言つてくれた。

やさしい。

そんな俺が今からアイドルを見出すのは、街だ。

まずはファイーリングの合うメンバーを揃えてからやる事を決める、そういうバンドは意外と長持ちするからな。

窮屈なネクタイをちょっとだけ緩めて、俺はMADなCITYへと潜るのだつた。

一人目はあつさり見つかつた。

「あれ？ 鍍金さん就職したんですか？」

とびつくりしたような顔で声をかけてきたのは、地下アイドルのウサミンちゃん（17）だ。

ティッシュユ配りのバイトをしていた彼女を喫茶店に連れ込み、事務所付きになりたくないかと聞いたら「なりたい」と即決だ。

俺は手帳に「ウサミン（17）→4年目」と書き込んだ。

二人目もあつさり決まつた。

その後飲みに行つた先で、ウサミンが呼び出した地下アイドルその2だ。

「ワニの酒場の牢名主が就職つてマジかおいゝ☆あそこはバンドの登竜門だけど、頭のお前だけは世に出ていけないので有名だつたじやん。婆さん店長の跡継ぐんだと思つてたわー」

「知らねえよ。それより佐藤お前アイドルやらねえか？」

「やるやるー☆

即決だ。

俺は手帳に「しゅがーはあと（23）→ウサミンの後輩」と書き込  
んだ。

三人目もさつさと決まつた。

「ねぎ焼きです」

「こつちじやないぞ☆」

「あ、それわらし、わらしのれす」

佐藤の隣で飲んでいた、結婚式帰りっぽいお姉さんが赤ら顔で手を上げていた。

赤ら顔でもわかる、美人だつた。

「お姉さん……」

「なあにい？」

「すつごい美人ですね、アイドルやりません?」

「かーしまあみじゅきいはあ……アイドルにい……なりたあい……あと結婚もじだい……」

俺は手帳に「婚活系アイドル↑クール系」と書き込んで、横にお姉さんから聞きだした電話番号を書き加えた。

「じゃあ私達みんなアイドルですね」

「俺はプロデューサー」

「スウイーティーに、固めの盃いつとくか☆」

「おおく店員さんくいいいちこを瓶で頂戴く」

「よし!このいいいちこをナポレオンにできるようにこれから頑張るか」

「そうねく頑張りましょく」

「いいいちこは下町のナポレオンですからね」

「このM A D C I T Yで飲めばこいつも立派なナポレオンっしょ

☆

「松戸でM A D……ふふ、面白いですね」

どこからか知らぬ声が聞こえた気がしたが、気のせいだろう。

互いのグラスに溢れるほどいいいちこを注くと、俺とウサミン(17)は立ち上がり、四人で杯を合わせる。

「我ら四人、生まれた場所は違えども……」

と言つたところでバカ笑いした佐藤に頭をどつかれた。

「鍍金<sup>めつき</sup>さあ、なんだよそれえーあははははは

「鍍金さんちよいちよい誰にもわかんないネタりますよね」

「四人の出会いにいくかんばあくい」

「「かんばーい！」」

そうか、この世界に三国志はなかつたな。

痛飲して翌日。

2日酔いで会社に行つた俺は、アイドル事業部の実質的な頭である美城課長に呼び止められた。

「どうだ、進捗は?」

「決まりました」

「ほう……? 早いな、どういう人材だ?」

俺は手帳をめくつてみる。

『ウサミン（17）→4年目』

『しゅがーはあと（23）→ウサミンの後輩』

『婚活系アイドル→クール系』

とだけ書かれていた。

俺は手帳を厳かに胸元へと仕舞い 「電話して確認します」とだけ言つて一礼して部屋を出た。

残された美城課長は、なんとも言えない困惑した顔をしていたそ  
だ。

## 第2話

約一週間後、あの日の3人が美城芸能の会議室に集まっていた。  
ウサミン（17）はバイトを休んで、ややフォーマルな服装でやつてきた。

佐藤は元々バイトが休みだつたらしく、カジュアルな服装でそそくさと現れ。

川島瑞樹さんはフリーランスらしいのだが、仕事がなく暇だつたと言つてビジネスウェアで来てくれた。

「まさかこんな大きな会社とは思いませんでしたよ」

「ていうかまず鍍金めつきが会社員つてのを信じてなかつたつーの☆就活だと思つてたわ」

「あたしあの日のことあんまり覚えてないんだけど、なんとなくアイドルとかなんとか言つてお酒を酌み交わしたような記憶はあるわ……」

「さて、よろしいですか」

俺はイモいジャージ姿で『POS』と書かれたホワイトボードの前に立つて言つた。

「今日から皆さんに、ちょっとアイドルをしてもらいます」「いえーい☆」

「頑張りますっ！」

「あの、あたし本業があるから……」

「川島さんの本業はもちろん考慮します。とりあえず今後の展開の話だけでも聞いてみてくださいよ」

川島さんに片手を上げてウインクし、俺はしばらく寝ずに考えた企画をホワイトボードに書き込んだ。

子供の頃習字で段を取つたので字は綺麗なのだ。

我ながらビツとした楷書体で。

### 『配信で稼ぐ』

と書いてあるのを見て、三人の頭の上にハテナマークが浮かんだのがなんとなくわかつた。

「先日、動画配信サイトU tubeにおいて、動画の広告収入が得られることが発表されました」

ホワイトボードに『U tube→収益化』と書く。

「U tubeってなんですか？」

「つておい☆ナナ先輩、さすがにそれは知ってるでしょ？」

「はあどちらんは知ってるの？」

「ウサミン星には地デジ対応テレビすらないから、知らないてもおかしくないか……U tubeっていうのはインターネットで動画が見れるサービスなんだよ」

「へえ～インターネットで……」

多分インターネットもよくわかつてないな。

「それで、その配信でどう稼ぐの？」

川島さんが質問をして話を進めてくれる。

「視聴回数1回につき0・1円ぐらい貰えるそうです。1万回再生されて1000円の儲けになります」

ホワイトボードに『1再生→0・1円』と書き込んだ。

「それって……儲かるの？」

額に手を当てながら川島瑞樹は聞く。

「私の考えでは、必ず儲かります！」

「どういう計算？」

「インターネット人口は増え続けています。1つの動画で百万再生されれば十万円、これを毎日続けらればとんでもないことになりますよ」「ちょっと想像もつかないわねその数字は」

「大ボラこいちゃつてまあ☆」

「百万人動員のライブをするのは難しい、それは限られた才能の持ち主にしか許されない事でしょう。しかし、スマートフォンを、パソコンを、テレビを持つていてるすべての人が無料でアクセスできる動画が百万人に見られるのは……それよりもよほど簡単です」

ホワイトボードに『一攫千金』と書き込んだ。

「もちろん運もいる、努力もいる、普通にアイドル活動するよりも大変な事も沢山あると思う。でもその先には、世界がある！今まで誰も見たことがないような数の観客が俺たちを待ってるんだ。何よりも一番大きいのは……それを今まで誰もやったことがないってことだ」

「それって保証もないってことよね」

「保証が欲しいなら会社員になつてください。フロンティアがあるから行く、これはそういう話です」

「うーん……」

「期限は切られてますけど基本的に給料は会社から出ますし。川島さんは本業でも稼いで、こっちがいけそななら本腰入れるつてのはどうですか？」

川島さんは澄んだブラウンの目で、俺の瞳を見つめた。

「まあ、仕事が忙しくない間なら……いいか」「よくわかんないけどあたしはいいよ☆」

「私も！よくわからないけどこんな大きな事務所に入れるなんてこと、これからないと私はますから！」

ウサミンはフンスと両手を握つてやる気満々だ。

「よし！じゃあ上役に紹介するから、みんなついてきて」

俺は意氣揚々と美城課長の部屋へと向かつた。

今日紹介することは朝に伝えてある。

さつきはみんなにフロンティアだのなんだのとゴチャゴチャ言つたが、俺の本当の目的は別の所にあつた。

俺が唯一歌うことを許される場所である暗黒歌謡祭、その先に進むことだ。

これまでの人生でいい加減に諦めがついてきた。

俺自身が演奏する音楽がそのまま誰かに受け入れられることは、多分ない。

だが、それで終われない。

俺はエゴイズムの塊だ。

死んで生まれ変わつてまで音楽に魅せられ、音楽に呪われた男だ。ふと思いついたのだ。

演奏できないならば、演奏させればいい。

音楽に手が届かないのならば、俺はアイドルという梯子を使って音楽をもぎ取つてやればいい。

俺がこの手で育てたならば、俺のプロデュースするアイドルが歌つたつて俺の音楽だ。

俺は執念深いぞ、俺を遠ざけられると思うなよ。

他人を巻き込んで悪いと思うが、同時に微塵も悪いと思っちゃいな自分もいる。

人だつて巻き込んでやる、命だつて掛けてやる。

いくらだつてやつてやる。

くそつたれのミューズめ。

俺だけの音楽を鳴らしてやる。

ここからがラウンド2だ。

「失礼します」

部屋をノックすると「入れ」と冷たい声が帰ってきた。

「課長、うちのプロジェクトのメンバーを……」

「服装！」

「へ？」

美城課長は俺のコスプレジャージを指差して言つた。

「平素はスーツを着用したまえ、就業規則にあるでしよう  
「すいません！すいません！以後気をつけます」

もう平謝りだ。

「もうよろしい、紹介してくれたまえ」

「はい、この3人がうちのプロジェクトのメンバーです」

「君の言つていた、動画配信で活動するというやつか……」

「そうです。こちら安部菜々さん」

ウサミンがペコつとお辞儀をした。

「いらっしゃる佐藤心さん」

佐藤もペコつとお辞儀。

「こちら川島瑞樹さん」

川島さんは会釈したあと、「お久しぶりです」と美城課長に声をかけた。

「こちらこそお久しぶりです、まさかあなたに参加していただけた  
は光栄です」

「えつ、課長、川島さんとお知り合いなんですか？」

「彼女は元【compliance】テレビのアナウンサーだろ！ 知ら  
んでスカウトしたのか!?」

「ええっ!?」

全く知らなかつた。

「今はフリーですけど」

「普通に飲み屋で知り合つたので、綺麗なお姉さんだと思つて……」

「……飲み屋か」

美城課長はため息をついた。

「それでですね、川島さんに関しては他のお仕事もあるので不定期に  
参加して頂こうと……つていたたた！」

課長に耳を引っ張られた。

「就業規則……！ 我が社は基本的に副業禁止だ……！」

小声でひとしきり怒られたあと、大きなため息をついて「彼女に関  
しては特例とする……」と許可をもらつた。

本当にご迷惑をおかけしてすいません……

結局美城芸能アイドル事業部の3つのプロジェクトの中で、うちのプロジェクトが1番はじめに動き出すことになった。

スタッフを集めるとこから始めている今西部長、美城課長のプロジェクトと違い、うちのプロジェクトは基本的に俺とアイドルだけで動ける。

圧倒的に身軽なのだつた。

事務所と契約したその日のうちにポンバシカメラでハンディカムを買い、各自の自己紹介動画を撮つてU t u b eに上げる超スピード展開だ。

撮影編集はバンドのM Vを何本か作つた経験がある俺がちやちやつと作った。

川島さんの仕事がある日は休みにしようという話になつていたのだが、なんと川島さんは今月アナウンサーのお仕事ゼロ。

「早まつちやつたのかしらね……独立」

とお酒が入つてポロツとこぼれた独白もきちんと撮影してある、プライベートを切り売りしていくスタイルだ。

とはいえ「暇なうちにどんどん動画を撮り溜めて行こう!」とメンバー達は毎日集まり、精力的に活動を始めたのだつた。

俺のプロジェクトが本格的に始動したこの時点で、俺も事務所もお互いにわかつていなかつた事がある。

事務所は俺が本気でアイドルについて1ミリもわかつてない事がわかつてなかつたし。

俺は俺でアイドルの事をよくバラエティとかに出ていて楽器を演奏しない、ヴィジュアル系とかグラムロック的なにかだと理解していた。

アイドルという文脈を、そもそもよく知らなかつたのだ。

これは悲しいすれ違いだつたが、色々とわけもあつた。

まず俺が『ワニの酒場』時代にとあるトップアイドルの躍進に関わっていた事。

そしてゼロ年代から十年代後半までずっと続く、後に大アイドル時代とも言われる1連のムーブメントがあつたためだ。

一般常識として、アイドルについては知つていて当然だと思われたわけだ。

事務所は俺が全部わかつてやつてているのだと判断して、止める事をしなかつたのだ。

そうして俺は根本的なズレを抱えたまま、アイドル系（笑）UTuberのプロデュースを重ねていくことになるのだった。

とある日のことである。

ウサミンが運転免許を持つていらないという話から、彼女の原付免許取得が決まり。

本当は原付免許には実技試験などないのだが、ウサミンを「原付の実技試験は難しい」と騙してみんなで会社の駐車場で原付きの練習をするという企画が始まつた。

バイクはヤフオクで三万で買ったスクーターを俺が修理した。

パイロンを並べてのS字では全身にプロテクターをつけたウサミンがゆっくり走りすぎて「ふぎやつ！」と転び。

スポーツ万能の佐藤はパイロンの間をなんちやつてリーンインで機敏に駆け抜け。

川島さんは無難に走りすぎて普通に買い物帰りの原付きお姉さんみたいになつていた。

ウサミンはその後も坂道発進ではきちんと後ろにずれ下がつて転び。

バイクには全く関係のない、バックでの縦列駐車では後ろを見すぎて転び。

急制動では前につんのめりすぎて軽くジャックナイフをしてくれ

たりと、しつかりと撮れ高に貢献してくれ。

そして最後の波状路では「ミ、ミ、ミ、ミ、イーン、」と謎の叫び声を上げ、俺たち全員を抱腹絶倒の呼吸困難に陥れた。

「これで原付免許取れますよね？」とキラキラした目で言う彼女に、原付免許対策試験は修了だと言つて試験問題集を渡して動画は終了した。

後日試験を受けに行つたウサミンは試験官に「実技試験は何時からですか？」と聞いて初めて騙された事に気づいたらしい。

次の日は居酒屋でそのことにプリプリ怒りながら俺の焼き鳥を横取りしてきた。

この時点で自己紹介の動画を上げてから一週間ほどで、お気に入り登録者は70だか80ぐらいだったと思う。

コメントもほとんどなかつた。

またある日は俺の家の納戸から臼と杵が見つかったので餅つきをしてみようという企画をやつた。

俺たちは5月の若干汗ばむような気候の中を、またまた美城芸能の駐車場を占拠していた。

4人でかわりばんこに「あづい／＼おもい／＼」と文句を言いながらひたすら餅つきをする。

俺は「よいしょお、よいしょお」と餅をひっくり返すウサミンに癪やさせていたが、彼女は途中で腰の持病が出てアスファルトに倒れ込んでいた。

「化粧が取れるわー」と川島さんは度々いなくなり、俺と佐藤が執念で餅をつき続けた。

佐藤とウサミンは最初からほぼノーメイクだ、川島さんは気苦労の分だけ肌の調子がアレなんだろう……と思いたい。

なんとか完成した餅をリサイクルショップで買つてきた火鉢で焼いて食べると、今日一日の苦労が報われる気がした。

とはいえた5月の昼間だ、汗だくのまま暑い餅をいつまでも食べてい

たい気温じやない。

そこで俺たちは駐車場の入口を見張り、やつてくる社員を捕まえて餅を食わせることにした。

「ここは会社ですよ!何焼いてんですか」

「まあまあ餅を食えよ☆」

と騒ぐ女子社員に餅を食わせ。

「暑い中お疲れ様、これ差し入れ……ってなんだいなんだい?お餅かい?」

「おたべよし今西部長!☆」

ジュースの差し入れを持つてきてくれた今西部長にも餅を食わせ。

「新鮮な胃袋だー!!」

「ヒヤツハー☆」

「キヤツ!何!?

「お餅持つてる!!」

「イヤー!なんでなんでなんで!?」

「今ダイエット中なんですけど!!」

ランチ帰りのOL軍団も捕まえてきて餅を食わせた。

そうしてあらかた獲物を狩り尽くした後。

駐車場の入り口で車で帰ってくる社員を狙っていた俺達の視界に、見慣れた黒いクラウンがチラツと入った。

「やべつ!課長だつ!」

「えつ!?鍍金君許可取つてないの!?!」

「出るわけないでしょ!!」

「ならすんなよこんなこと!」

「まつてください、こし、腰が……」

急いで走り去る3人組を追うカットで動画は終了。

これはそこそこウケて、お気に入り登録者が一気に1000人を超えた。

そして俺は美城課長に呼び出された。

「動画の内容についてはとりあえず置いておこうか……」

額を揉みながら課長は言つた。

「ずいぶんと元気に遊んでいるようだが、曲の準備は済んでいるのか？」

「もちろんです」

曲はすでに燃るべき相手に発注済みだ。

「最初にも言つたが、1年間で成果が出なければプロジェクトは終了だからな。動画もいいが、曲もリリースしなければなんのために名を売っているのかもわからんぞ」

美城課長は囁んで含めるように言つた。

中学の先生に説教された時のこと思い出したが、実際やっていることはあまり変わっていないのだろう。

「なにか困つたら私が今西部長に言い給えよ」

心底疲れた様子の課長に手で退室を促された。

次は美城ビルの中でサバイバルゲームをしようと思つていたが、申し訳ないのでそれは先送りにしよう。

関西出身の赤白歌合戦にも出場したヴィジュアル系バンド、そのプライベートスタジオに4人でお邪魔した。  
もちろんカメラは回しつぱなしだ。

3人はビッグネームに会つたことで緊張してるようだが、俺にとつては昔から一緒にライブやつてきた姉ちゃん達だ。

今回は彼女達にうちのプロジェクトへ楽曲を提供してもらうことになったのである。

P A卓に座つた真緑のトサカを天高く突き上げた女性が、鳴つていた音楽を止めた。

「こういう曲になつたんやけど」

「いいじやん、俺も歌いたいよ」

「アホ、あんたが歌うなら絶対作らんよ」

「3人はどう?」

「凄い、なんかプロみたいですね」

ウサミン（17）がズレたことを言う。

「一応赤白出したことあるんやけど」

「あつ！いやつ！そういうことじゃなくてっ！私達が……ですね」

「ナナ先輩テンパリすぎだぞ☆」

「私は気に入つたわ。あんまり普段口ツクつて聴かないんだけれど、歌いやすそう

「そら仮歌もろてあんたらの歌いやすいように作つたんやがな」

「プロの人つてすごすぎなのでは？？」

見た目は豪快でも、意外と纖細で職人肌な彼女なのだつた。

俺がM V用の舞台装置をD I Yで作つてゐる間に、メンバー達は懸

命にダンスの練習をしていた。

友達のコレオグラファーに振り付けてもらつたそれは優美にして可憐、ミニマルなのに発展的、とてもキャッチャーないダンスだ。

時々レッスンの様子を見に行くが、一日やそこらで上手くなるわけもない。

毎日ヘトヘトになりながらも練習をこなす3人を見つめながら、俺も見様見真似でステップを踏んでみる。

意外と簡単にできてしまった。

後で動画を撮つてもらつたが、U t u b eでも『プロデューサーが一番上手い』とツッコまれていた。

### 第3話

去年よりも間違いなく暑い、2012年の6月。

今西部長のプロジェクトは準備万端で発進し。

美城課長のプロジェクトは欠員2名でとりあえずのスタートを切ることとなつた。

うちのプロジェクトの川島瑞樹さんのアナウンスの仕事は、単発で1件入つてきただけだつた。

だつてフリーなのに彼女どこにも営業していないんだもの。

動画はなんだかんだと毎日上げ続け、英語字幕をつけているおかげか海外からのアクセスもかなりある。

持つてよかつた英検一級だ。

お気に入りは五千人に達したが、これは有名ヴィジュアル系バンドのプライベートスタジオに行つたときの動画で伸びたのがほとんどだろう。

コネも身の内だな。

ダンスのトレーナーさんはなんでもすぐ覚える俺を面白がつて、古今東西の様々なダンスを教えてくれた。

社交ダンスの分野からブレイクダンス、シャツフルダンスにアニメーションまで。

一回見ただけで模倣する俺の動画は結構好評で、外人からのコメントも沢山ついていたのだが。

内容がタップダンスになつた瞬間トレーナーさんが体調不良で3日休む事態となり、あえなく中止になつた。

やつぱり駄目だつたか。

トレーナーさんがいない間は俺がメンバーにダンスを教える事ができたりもしたので、身になつた分良しとしよう。

俺の活躍の影響かどうかは知らないが、お気に入り登録者は一万人を超えた。

デビュー曲のレッスンの合間の時間を使って、三人娘はボロつちい車の洗車を行つていた。

俺が今日レッカー込み5万で買つてきた、うちのプロジェクトの営業車だ。

うちのプロジェクトは社内で嫌われているようで「何されるかわからないので社用車は貸せません」と言わてしまつたから自分で用意することにしたのだ。

これからデビュー曲のMV完成まではこの車のレストア動画で凌ぐつもりだ。

作業場は会社の駐車場の片隅、周りに配慮してちゃんと四方に防音シートを立てたぞ。

もらつてきた廃棄品だけど。

「なんでこんなことしなきやいけないのー!!」

「知らないつすよー!!」

「車に乗るなら車の免許も取らなきやいけませんよねー!!」

川島さんが死んだ魚のような目で車にサンダーをかけ、佐藤は錆びて外れないネジの頭を電動ドリルで飛ばしている。  
ウサミンはカメラマンだ。

「だいたいこんなあちこち穴の空いてる車が走るのー!!」

「エンジンとミッショーンは程度のいいのを載せ替えたつてプロデューサーが言つてましたよー!!」

「程度つて、この車より程度の悪いのがあるわけー!!」

「ジャンク屋に運転席部分が吹つ飛んで真つ二つになつたのがあつたらしいでーす!! 中身は美品らしいですよー!!」

「事故車じやない!!」

「このバカが、幽霊が取り付くべき運転席は吹つ飛んでもうないつて自信満々で言つてましたよー!!」

佐藤に小突かれた。

誰がバカだ。

今もこうやつてハーネス引き回したりして、電装系を一手に引受け  
てるインテリだろうが。

「だいたいなんで車の修理なんかできるのさー!!」

「サービスマニュアルを読んだんだよー!!」

ひたすら文句を言われながらも作業は会社の定時まで続き、そこで  
一旦お開きとなつた。

「じゃあ次は夜中1時に集合で」

「ええっ!?」

「なんでだよ☆」

「明日にしましようよ♪」

「溶接やるから、警備さんとビル管さんにはもう申請出してるから心  
配ないぞ」

「いいからプロに任せろよ！そんなこと！」

「ていうか肌も荒れるし、絶対やらないわ」

「課長には言つてあるんですか？」

「課長は関係ありません」

「関係大ありだろ！がく！また廊下でイヤミ言われんぞ！」

「文句言つてるかい？」

「文句言つてるねえ」

「じゃあこのさい、腹を割つて話そうじゃないか！」

「やめろ！帰してくれ！」

「家で一人でやつたら？」

「家じゃ200V電源が使えないでしょ！」

俺は3人を会社近くの居酒屋に連れ込み、たらふく飲ませてからスーパー銭湯に連れて行き。

いい塩梅にベロベロになつたところを会社の仮眠室に連れ込む事に成功したのだつた。

こんなことをいい年の男が妙齡の女相手にやつてたら大変な事になりそうなもんだが。

男が極端に少ないこの世界では、ほぼ問題なしだ。

女から男へのセクハラやパワハラには滅法厳しいのだが。まあ男から女へのあれやそれなら、大抵のことは可愛げのあるイタズラぐらいで許されてしまう。

もちろん世の中にはセクハラをやりすぎて捕まる男や、性犯罪に巻き込まれる男や、借金のカタに風呂に沈められる男もいる。正直男と女がひっくり返っただけであんまり変わつてないな。

だが、2012年に本気のアイドル寝起き映像が許されるのもこの世界ならではのことだ、活用していこう。

「おはようござります！」

俺が仮眠室の電気を付けると、寝袋にくるまつっていた3人がモゾモゾと動きだした。

足でちよいちよいと寝袋をつつくと、全くスワイーティーじゃないくぐもつた声が聞こえてくる。

「ふざけんな……」

アイドルにあるまじき低い声で俺を睨みつけながら川島さんが言う。

「ふざけてなどございません。今から皆さんには……私が溶接をする！その勇姿をご覧いただきたいと思います！」  
「一人でやれえ……」

「ふにゃ……なになにい？はあとちやんなにがあつたのぉ？」

「おい起きろおウサミン！行くぞ！」

「ふにゃ～」

「すっぴんなの……カメラ回さないでえ……」

しつかり講習を受けてきた俺の華麗なアーク溶接の光と音だけを防音シートの外から見せつけられた3人は、ゾンビみたいな足取りで始発に乗って帰つていった。

俺はこれから動画編集だ！やるぞー！！

クーラーと加湿の効いたレッスンスタジオの中、3人娘はストレッチをしながらボーカルレッスンの講師を待つていた。

「あれだけ何を言われようがカメラを回し続けてた男が。ボーカルレッスンの間はレッスン場に絶対に寄り付かないの、不思議なものね」

「ああ～」

「それは……ねえ？」

川島瑞樹のつぶやきに、安部菜々と佐藤心は苦笑いで顔を見合せた。

「二人は何か理由を知ってるの？」

「いや川島さん、鍍金<sup>めっき</sup>はねえ……何でもできるんですけど音楽だけはできないんですよ」

「そうなんですね、それでいて本人が誰よりも音楽好きなものですから……ナナは気の毒で……」

言いながら、安部菜々は寂しそうな目を遠くへ向けた。

「音痴ってこと?」

「いや、なんか聴いてると胸がザワザワするつていうか」

佐藤心が胸に手を当てながら若干青ざめたような顔で言うのに、安部菜々が深く頷いた。

「悪い意味で正気度を……吸い取られるっていうんですかね……あれって逆才能なんですかねえ……」

「えっ!? でも彼はバンドをやつてたのよね?」

「超不人気の、ですけどね☆」

「なんていうか……プロモーターやプロデューサーとしてはそれはもう物凄い才能を持っていたと言いますか……彼のイベント自体は大人気でしたよ」

「最後の方は自分のイベントなのに出番もどんどん削られちゃって、ちょっとと痛々しかったというか……」

「うーん、神様ってのは残酷なことするものなのね……」

狂人としか思つていなかつた自分のプロデューサーの、意外な一面を知つてしまつた川島瑞樹なのであつた。

## 『スーパーバード』

俺のプロデュースしているユニットの名前だ。

由来は四人が集つた居酒屋『スーパーバード貴族』から。

この2012年の7月、めでたくそのスーパーバードのデビューカン曲及びミュージックビデオが完成したわけだが。

それまでにU tubeに投稿された動画をダイジェスト、いやタイトルとコメントだけで紹介しよう。

毎日のように投稿してゐるから、いちいち説明してるとバカみたいに長くなるからな。

『5万円で車買つてきた』

俺がメンバーに車を見せるだけの動画だ。

『【悲報】 5万の車の錆落としてみた【穴だらけ】』

怒鳴り合いながら車にサンダーをかけまくった動画。

『【アイドル】 会社の駐車場で夜中に溶接してみた【寝起きドツキリ】』  
夜中に起こしたアイドルを防音シートの外で完全放置、動画の8割  
はアイドル達の愚痴だ。

『【極悪】 浅草のパフォーマーから芸を盗んでみた【プロデューサー】』  
酒飲みながら芸を見ていたら、いつの間にかパントマイムを習得し  
ていた。

『【アイドルがサンドブラストをかけるだけ】』

読んで字のごとく、かなりマニアックな動画になった。

『【タイヤ交換してみた】』

友達の働いてるガソリンスタンドの店長が全面協力してくれたの  
だが、内容は地味そのもの。

『【罰ゲーム】 スイカ割り大会【いかチヨコ】』

アイドル事業部に配属されてきた事務員さんを歓迎会ということ  
で連れ出し、公園でスイカ割りをやつてマズいつまみでワンカッ普を  
飲んだ。

『【アイドルが】 車に色塗つてみた【リペイント】』

3人娘はあの車に「ジーコ」って名前をつけていたことが判明した、  
俺は「ゴーマン号」がいいと言つたが数の暴力に負けた。

『【完全】竜宮小町とダンス勝負【勝利】』

コネクションがあつた秋月律子に勝負を挑んだら、うつかりトップアイドル相手に完封勝ちしてしまつた。

『会社の駐車場に単管パイプでカーポート作つた』

野ざらしはかわいそだもんね。

『【悲報】カーポート撤去命令』

ビル管理からめちゃくちや怒られた。

『車動かないから会社の駐車場でバーべキュー』

例のごとく社員を捕まえては肉を食わせる準テロ行為を行つた。

『本当に申し訳ありませんでした』

思い出したくない。

『【5万車】仮ナンバーで検査場へ【完成?】』

毎日コツコツ直したかいがあつた。

『お気に入り登録者数5万人突破記念 飲み会直後に体力測定』

竜宮小町の動画で物凄く登録者数が増えた、俺以外全員リバース。

『【5万車】ナンバーがついたのでドライブする【完成】』

レインボーブリッジを渡つた時、なぜか全員がウルつときていた。

ここ一ヶ月の間でなんとか車が完成したのがわかると思う。

車だけじやなくCDやMVも作つていたわけだが、そちらの練習や撮影風景の動画はCDの初回限定版に収録することになつた。

そして順風満帆なはずの『スーパーバード』の活動。

その活躍っぷりがこの後どんでもない事態を引き起こす事になるとは、誰にも予想がついていなかつたのである……

## 第4話

いつそ清々しいぐらい暑い2012年8月のことである。

デビュー曲のMVに友情出演してくれた、暗黒歌謡祭出身のバンド姉ちゃん達のおかげかどうかはわからないが。

色々と話題になつてTwitterでバズり、朝のニュースでも紹介されてお気に入り登録者10万人を突破した我がプロジェクト。まさに順風満帆なのである。

しかしたつた今。

今期4回目の部署会議のその場で、我々はプロジェクトごとの部署異動を提案させていた。

「部署異動ですか？」

「ああ、ただ勘違いしないでくれよね。これは君のプロジェクトに問題があるというわけではないんだ。君は本当によくやつてくれている」

机に肘をついた美城課長が、組んだ拳に口を隠して心苦しそうに言う。

「ありがとうございます、それで……」

「单刀直入に言おう、君のプロデュースしてるユニット。あれはアイドルか? という声が出ていてる」

「それはもちろん、アイドルですとも」

「いや勘違いしないでくれよね。決して悪い意味じゃないんだ、ただ、役員の間でも君達は話題になつていてね。なにもアイドルという形に、無理にはめる必要はないんじやないかという話になつてだね」

こんなに早口の美城課長は初めてだった。

「つまり……どういった形になりますでしょうか？」

「君達のためにハイパー・メディアクリエイター事業部というものが設立されね、今後はそちらで思う存分に腕を振るつてもらいたいと思つてゐる」

「ハイパー……メディア、クリエイターですか？となると今後は……」

「いやいや、実際のところ、今と状況はなんら変わらないと思つてもらつていい。そちらの部の管理職は私が兼任する形になるから、本当に書類上の手続きだけだよ」

「そ、そうですか……それでは、よしなに……お願ひします」

「そうか！受けてくれるか！」

心底ホツとしたという顔で、美城課長は薄く笑つた。

いまいちピンと来ていなかつた俺だが、会議の後に今西部長から飲みに誘われ、今回の件のからくりを聞かされることになつた。

「美舟ちゃんに会議では全部自分がやるからって言われちゃつて、口を挟めなくてごめんね？」

と前置きをされてから聞いた話は、なかなか俺の心をえぐる話だった。

要するに、俺達はやりすぎたのだ。

まだ何も成果の上がつていないアイドル事業部で、外様の俺達がいの一番に成果を上げ。

しかもその成果が今西部長の推すバラドル路線とモロ被り。

更に言えば、アイドル事業部の実質的な頭である美城課長の美意識に全く沿わない我々の動画の内容。

役員のお孫さんが我々の動画の大ファンになつていたらしく、よその会社に自社コンテンツとして自慢したくみたいな上の方の組織力学上の問題もあつたらしい。

そして極めつけは。

「天領君、予算ぜんぜん使わないよね？そりゃあ会社にとつてはいいことなんだけど……予算使わないでああいうコンテンツが作れるのつて天領君だけだと思うんだ」

そう、俺はなんでもかんでも省エネでこなしそうだったのだ。

小道具どころか営業車まで自分で作るし、スタッフも使わないし、交際費も交通費もほとんどゼロ。

会社のお金というのは普段から使つてないと、翌年から貰える額が減ってしまうものなのだ。

要するに周りが見えてなかつた、圧倒的にコミュニケーション不足だったのだ。

この件で深く深く反省した俺は、メンバーと共に営業車のジーコくんに乗つて北海道は札幌にいた。

温泉に入り、深酒をし、たらふく美味しい魚食つて、時計台見に行つて馬鹿笑いした。

時計台ラーメン食つて元祖時計台ラーメン食つて、どつちがどつちだかわかんねーよつて笑つていた。

そして港に行つて、バカみたいに毛ガニを買い込んだのだつた。

「こちらお土産でござります」

「いつもお世話になつてる会社の課長や部長、その他スタッフの皆さん、事務員のちつひーの分だぞ☆」

「そんなん言つてもわかんねえよ」

「あつ、そつか☆プロデューサー、ここはカットねカット」

「私も個人的に買って帰りたいわね」

「あたしはさつきウサミン星のお母さんにクール便で郵送しました

」

「おいプロデューサー、早く事務所のみんなの分クール便で発送しな

いと。夏なんだから溶けちゃうぞ☆

「お姉さんこれ車に積んでください。どれぐらい保つの？4日？5日は大丈夫？じゃあ追加でもう3箱……これで多分後部座席埋まるかな」

「つておい☆後部座席埋まるかなじゃないよ！埋めるなよ！」

「えつ？どうするんですか？乗れない人は電車ですか？」

ジーコくんに詰め込まれていく毛ガニを見て、不穏な空気を感じたらしいアイドルたちが詰め寄ってきた。

こいつらもなかなか勘が鋭くなつてきたな。

「いやいや、ご心配なく」

「ご心配事しかないのだけれど……」

「夏とくれば北海道、北海道といえば……？」

「はあ？」

「カニですか？」

「牧場」

俺はチツチツチとカメラの前に出した人差し指を振った。

「……君達何もわかつてないね。昨日からここ来るまでも周りをブンブンブンブン走り回つてたでしよう？シーズンなんだから」

「蚊ですか～？」

「あつ……」

「ちょっと鍍金君、あなたまさか変な事言わないでしようね？」

「ちょっとお姉さん、そのトロ箱の山どけてもらつてもいいですか？」

？

「あいよつ！」

市場の屈強なお姉さん達が山と積まれた空のトロ箱をどかすと、そこにはピカピカのスーパークーラーが2台鎮座していた。

「今からあなた達には、東京までこのカブでラリーをやつてもらいます」

「はっ!? ふざつ、ふざけんなー!!」

「絶! 対! やらないから!」

「えつ? なに? カブ?」

「お姉さん車にカニのせないでのせないで☆おいこのカブ返してこいよつ!」

「ただでさえバイクは肌に悪いのに、夏なのよ!? 私の纖細なお肌は夏の日差しに耐えれるようにはできてないの!」

「鍍金さん、原付きでどうやって海を渡るんですか?」

「大丈夫、行きと一緒で本州まではフェリーだから」

「おい! 北海道全然関係ねえだろ!!」

怒れる佐藤の回し蹴りは俺の尻にクリーンヒットし、スパーんといい音を鳴らしたのだつた。

その日のうちに北海道を脱した我々は、フェリーの中で車座になって作戦会議をしていた。

「それでどうするのよ、バイクは2台よね? どうせ運転するなら私はジーコくんの方に乗りたいんだけど」

船の中だというのに銀のアビエイターサングラスをかけた川島瑞樹が、一人必死にスーパークブから逃げを打とうとしている。

ちなみにジーコくんの由来は、検査場に持っていく前に一晩中かけてジーコジーコとトルクレンチでネジを締め直していたときの音かららしい。

「あのおー私まだ車は運転できないんですけど」

ちようどいま車校に通つてゐるウサミンは、顔を伏せ氣味にしながらそろそろと右手を上げた。

「はあとも乗りたくないんだけど」

腕を組んでそっぽを向いた佐藤はご機嫌斜めのご様子だ。

「でもしようがないだろカニ載せちゃつたんだから」

「だから今からでもクール便で送れよ！」

「だいたい東京まで原付きで走つて何が面白いのよ！」

「あのゝ皆さんゝ落ち着いて！ね！」

「グダグダ言うな。やるしかないの。もうカブ乗らないと帰れないんだから」

どつしり構えた俺に対して、深くため息をついた川島さんが嫌味を吐いた。

「こんなことばくかりしてゐるから、歌番組の1つからもお呼びがかからないのよ」

痛いところをつかれてしまった。

たしかに『スーパーバード』は歌の仕事が全然ない。

「こないだ実家帰つたら親戚のおばさんに『心ちゃんこれからもトリオ漫才頑張つてね』って言われたんだぞ」

佐藤のその言葉に、ウサミンが1番ダメージを受けた顔していた。彼女もウサミン星の実家で何か言われたのだろうか……

「そ、それよりも結局誰がバイクに乗るんですか？」

「それを決めるのに、これを用意しました」

俺は鞄からマルセイバターサンドを2箱取り出した。

「旅といえば、何?」

「え?」

「はあ?」

「えーっと……」

「旅といえば……グルメでしょ! これから我々は、各地で車の座席をかけて名物早食い対決をやつていきます」

俺の発表に、3人はなんとも言えない顔になつた。

「ええ……」

「なんで早食いなんだよ!」

「た、楽しそうです!」

「まず第一回戦は北海道土産のこれ、マルセイバターサンドを3本です」

「マルセイバターサンドはいいけど……」

「太っちゃうだろ!」

「これって美味しいですよね!」

俺はさつさと箱を開けてカメラを3脚につけ、準備万端でバターサンドを手に持つた。

「ビリ2名には、次のチェックポイントまで原付きに乗つていただきます」

全員が無言でバターサンドを手に持つた。

「それでは……よーい、スタート!!」

全員無心でバターサンドを口に詰め込んでいくが、佐藤だけは俺の食いつぶりを見て驚愕の表情のままバターサンドを取り落していた。

「…………あ！」

と俺が最初に口の中を空にし。

しばらくしてから川島さんが「やつた！」と2着でゴール。

この時点では佐藤とウサミンはバイク決定なので「う、も、お、お、お、お、お、お、お、お、!!」とスワイーテイーじやない叫びをあげていた。

「いやいやいや！ 鍍金<sup>めっき</sup>の食べる速度おかしいでしょ!!」「えつ？ 見てなかつた」

「私も必死で食べてたから見てなかつたわ」

「いやいやいや、尋常じやないって」

「えくそんなんですか？」

「ちよつと食べてみてくれないかしら？」

「いやこれは視聴者のみんなにも見てほしいぞ☆」

「そんな大したもんじやないだろ」

プロデューサーの早食いなんか視聴者も見たくないだろ。

「大したもんだつて☆やつてみやつてみ」

「ええ……じゃあ川島さんカウントして」

「いいわよ、3……2……1……ゴツ！」

川島さんのちょい古なゴーサインと同時に、俺はマルセイバターサンドをシユバつと食べた。

「…………え？」

「…………今食べました？」

「マジック使った? 口の中にバターサンドがスツと消えていったんだけど」

「噛んでないだろお前、固形物を飲んでるだろ」

水じやねえんだ、重たいマルセイバターサンドを飲めるわけねえだろ。

「ちゃんと噛んで飲み込んでるよ」

「鍍金さん、また変な特技を開拓したんですね……」

失礼な。

そりやちょっとは早食い番組見て研究したが、やっぱ誰でも俺と同じ場所に行き着くはずだ。

「はあー……もうバイクとかどうでもよくなつたわ☆はあとは到着まで寝かしてもらいうから」

「そうね、体力を温存しましそう」

「なんか凄いもの見ちゃいました……」

「ナナちゃん、早食い企画をやる限りこれからずつと見せられるのよ。慣れないと……」

ほんとに失礼な奴らだな。

フェリーが青森に着くまで、俺は3人からちょっと余所余所しくされてしまったのだった

## 第5話

暑すぎて車の中のゴム部品が溶けてきた2012年8月。  
我々は国道4号線をひた走っていた。

「地味な絵ねえ」

『いま地味つつた奴は誰だ!? もう一回言つてみろ? 殺すぞ』

ハンドルを握つてぽつりと言つた川島さんに、信号待ちの佐藤が振り向いて噛み付いた。

「はい前青ですよ~進んでください」

『次はその席絶対にもぎ取つてやるからな!!』

『でもプロデューサー、ずっとこの構図でどう派手にしたらいんですか〜?』

「大丈夫、そのうちテコ入れしますので」

『だいたい今はいいけどはあとと瑞樹ちゃんが並んだら視聴者はどつちがどつちかもわかんないぞ☆』

「心配ご無用! なんとかしますので」

『頼むから背中に刺繡だけはやめてくれよ~お金なくて親のカブ乗つてるヤンキーみたくなつちやうからさあ』

「…………」

『黙らないでくださいよ~』

翌日の事である。

俺が夜なべして用意した装備によつて、全ての問題は解決していく。

ウサミンの白いヘルメットには白いウサギの耳がつき、佐藤の黒いヘルメットにはハートの落雁が貼り付けられていた。

「わあ~うさ耳ですね~」

「これお盆用のやつだろ! ふざけんなよ☆」

「鍍金君あたしのは？」

「川島さんはいいのが見つからなかつたので、旅の中で探してつけていきますんで」

俺の言葉にムツともくれて見せる川島さん。  
バイクには絶対乗らないんじやなかつたのか。

「じゃあ青森抜ける前に青森大会ということで……」「よっしゃ！」

「朝ご飯抜いてきましたから、今日は勝ちますよ～！」

「私は早起きしてランニングしてから朝風呂まで済ませてきただから、準備は万端よ！」

宿からほど近い公園のテーブルに、ドドンとお菓子の箱を四つ出した。

「今日はこちら！ 青森名物りんごのお菓子、気になるリンゴでござります」

「おおつ☆……でつけええ……」

「これ中にりんごが丸々入ってるんですよね」

「東京駅で見たことあるわ」

俺は手早く準備をして、4人の前に気になるリンゴの乗つた皿とフォークを置く。

「言い忘れてましたが、この早食い対決で一番負けの多かつた人には罰ゲームがありますので」

「は？」

「そういう後出しはやめてよね」

「カブに乗る以上の罰ゲームですか……」

ウサミンは虚ろな目で、昨日1日中乗つていた黄色いカブを眺めている。

なかなか参つて いるようだが、まだ旅は始まつたばかりだぞ。

元気出していくこう!!

「それでは、皆さんよろしいですか？」

「「…………」「」

「よい……スタートツ！」

俺はフォークに突き刺した気になるリンゴを、大口を開けて一気に飲み込んだ。

「うわあ……」

「ほんとホラーだろ……」

「それちゃんと味わつてるの……？」

「ちゃんと味わつてますよ。シロップに、あのリンゴが、ちゃんと、浸かつてて、リングの、のどしが……リンゴが大変おいしいです」

「食レポ下手くそか☆」

「……これ、仕切り直しにしませんか？」

「もう鍍金君<sup>めっき</sup>とは勝負にもならないから特別枠にしましょう」

「一人だけびっくり人間ショードからな～☆」

「デモンストレーション枠ということで……ちょっと……これは

……」

「じゃあ僕がカブに乗ることはないってことですか？」

「勝手に乗つてもいいわよ」

「あんたにや誰も勝てないつつてんの！ナナ先輩なんか見てみなさいよ、びっくりしすぎて足が震えちゃってんだから。怯えてんだよ」

「いや、その、人間があのサイズのものを丸呑みにするのは初めて見たので……」

「芸名はスネーク天領ね」

結局仕切り直しになつた勝負はグダグダのまま進み、レベルの低い接戦を制した佐藤が勝利した。

王者の玉座はいつも孤独なのだ。

あいも変わらず特に言うこともないような道をひた走るカブ。

白いメットに揺れるうさ耳、青いメットに揺れる茶色いポニーテール。

上から下から照つてくる夏の日差しが、オレンジと白のツナギを蒸し焼きにしていた。

『あづいです～』

『サウナみたいねほんと』

「そうですか？こちらは車内空調を18度に設定しております」

「いや～こうして改めて車内から見てみるとマヌケな絵ですね～☆

『殺すわよ』

『はあとちゃんとひどい～』

「岩手にも入りましたし、飯時にもう一回勝負がありますので。お二人それまで頑張ってください」

「次も勝つぞ～☆はあとはこの席に骨を埋めつからなく～☆」

『次は絶対にそつちに座るわよ！』

「おおつと、みじゅき選手中腰になつて、モトクロスライダーのようにカブを操つているぞ☆これで少しでもカロリー消費を増やそうと言うのでしょうか、涙ぐましい努力であります☆」

『ナナはまだまだ元気いっぱいですよつ！17歳ですから！』

「ナナ選手の露骨な17歳アピールが入りました。果たして彼女は何歳まで17歳と言い張るのでしようか☆少なくとも高校には通つております～ん」

『あ、あ～はあとちゃんとひどい～』

調子こきまくりの佐藤のトークは弾めど絵的には特に盛り上がる  
こともなく、順調に岩手に入つた我々一堂。

昼飯の予定を早々に決め、岩手県の県庁所在地、盛岡へとカブを進  
めたのだつた。

「川島さんしばらく行つたらお蕎麦屋さんありますんで、そこ入つて  
ください」

『盛岡でそばといえればわんこそばね、わかるわ』

『ナナ、わんこそばはやつたことありません』

「はあともないぞ☆」

『実は私も』

「ご心配なく、量は少なめで20杯勝負に致しますので」

「多いのか少ないのかもわかんねーよ☆」

『鍍金君はやつたことあるの?』

「私も、経験ございません」

「おやおや〜?こりやわんこそばはみんなでやつたほうがいいのかな  
?鍍金もそろそろカブに乗りたいっしょ☆」

「別にやつてもいいけど……負けるわけねえだろそんなもん」

『自信満々ね』

『ハンデくださいよ!』

『じゃあ鍍金は3人分の60杯で☆』

「別にいいけど、俺が勝つたらお前は80杯食えよ」

「なんでだよ!」

「まあまあまあ、万が一勝てばいいわけだから」

「万が一つて言つてんじやんかよ!」

『入りますよ!』

『わんこそばつてちょっとワクワクするわね』

「はあとは絶対やらないかんな!」

結局猛烈な早食いを見せた川島さんをなんとか2位に抑えた俺

だつたが、勝負に勝つて試合に負けた形となつた。

「ほらほら食え！佐藤！」

「う～……キツい～……もう入らないって……」

「頑張つてはあとちやん！あと3杯だよ！」

「ライダーがこれじや旅を続けるのは無理じやない？」

「川島さん……車の運転お願いします……」

緑のツナギを着てカブにまたがつた俺を見て、助手席の佐藤はゞ満悦だつた。

「怪我の功名☆」

負けた馬鹿はふんぞり返つて▽サインだ。

『でもお前次の勝負で確実に負けるよな』

「ここに座つたものがルールなので、本日は勝負なし☆」

「異議なし！」

『異議ありまくりですよ～ナナもそつち乗りたい～』

やいやいやい言いながらも一行はズンズン国道を進み。

結局本当に一度も勝負する事なく、宮城県に入つたところで一泊となつたのだった。

「いよお～☆温泉～☆」

「はあ～……染み渡ります」

「ねえ！プロデューサーも入つたら？」

「混浴じゃないんで」

「混浴ならいいのかよ☆」

佐藤が温泉の中でなんとなく景気のいい感じで腕を上げ、ウサミンと川島さんはその脇を固めている。

もちろんタオルはつけているが、3人が温泉に入っているこういうカットもセクハラと言われず普通に撮ることができる。

こつちは風呂で覗きといえば女が男湯を覗く世界だからな。

このカットも視聴者達には意味不明なお風呂シーンで、お色気シーンとは思われていなかもしれない。

うちのチャンネルでは、こういうなんとなく俺の前世からのノースタルジーで撮っている謎シーンも結構多いのだった。

明けて翌日！とはいかず、俺達は風呂の後に地元の飲み屋に繰り出していた。

宿に入つたのが遅く素泊まりになつた事もあり。

どうせ明日はずんだ餅で勝負なのだからと、牛タンで一杯やりに来たのだ。

しかし3人娘が牛タンでワイワイやつてる中、俺はスカウト活動に精を出していた。

カウンターに座つていたお姉さんに、プロデューサーとしてのセンターがティン！ときたのだ。

東北美人らしい抜けるように白くむつちりとした肌がダメージジーンズの隙間から覗き、規格外の豊満な果実は肘をついた机の上に完全に乗つかつてしまつていて。

清楚な黒髪ロングストレートなのに、ちょっと垂れた目つきはどこまでも挑戦的、ルックスは申し分なしだ。

子供の頃からずっとダンスをやつていての事だが、肉感的でりながらも引き締まつた身体がその言葉が嘘でないことを雄弁に示している。

俺の考へている新しい役に、まさにピッタリの人材だ。

地元のタレント事務所に所属しているが鳴かず飛ばずだという彼女に、俺は移籍交渉を持ちかけていた。

「なあ、東京来いよ。俺が面倒見てやるつて」

「うーん……」

「今の事務所じや仕事もほとんど回してもらつてないんだろ？東京ならいくらでもその身体で稼げるようになるつて」

「いや、でも……」

俺はお姉さんの細くて冷たい指に指を絡ませて引き寄せた。

「お前のダンスは世界レベルなんだろ？ようやく宮城から飛び出す時が来たんだよ。な、住むとこも飯も面倒見てやるから。楽しいところでも連れてつてやる」

「そう……？」

「そうだよ、それに東京だけじゃないぜ。いずれ俺達は世界にまで出ていくつもりなんだから」

「世界、ね……その、それで、ビデオにはあなたも出てるのかしら？」  
「基本的には俺と女性が3人……つて痛えつ！」

誰かに背中を思いつきり蹴られた。

「百歩譲つて女口説くのはいいとして、その様子をビデオに撮るなよ！子供も見るんだぞ！」

赤ら顔で串焼きと焼酎のコップを持った佐藤だつた。

「口説いてるわけじゃねえよ！」

「えつ……？」

スカウトしていた子は驚いた顔をしているが、最初からプロデュー  
サーとしての名刺渡してるでしょ。

「なんかちよいちよいそういう軽いとこありますよね～鍍金さんは  
「竿軽なんでしょ、バンドマンなんだから」

「お姉さん騙されちゃだめだぞ☆こいつヤバい女ばつか引っ掛けるブ  
ラックホールって言われてたんだから、絶対にトラブルになるつて」

お姉さんは俺の顔を見てから、3人娘の顔を順番に見た。

「うーん……あなた達もビデオに出てる人なの？」

「え？ そうだけど……？」

「ふうーん……さすが綺麗なのねえ」

お姉さんはなんだか意味ありげに、女性陣の身体のラインに目をは  
せた。

「ん？ あ、あー……お姉さん、もしかして勘違いしてるかもしません  
けど、私達はいかがわしいビデオを撮ってるわけじゃないですよ」

黒霧島のボトルを小脇に抱えたウサミンが何かに気づいた様子で  
慌ててそう言うと、お姉さんは冷水を浴びせられたような顔になつ  
た。

「あらいやだごめんなさい、私てつきり……」

「ぶーっ！！……ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！！」

「ヒー→!!ブヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!」

川島さんがお酒を吹き出し、腹を抱えてひーひー大笑いし始め。  
佐藤もそれに続いてゲラゲラ笑いだした。

「鍍金<sup>めっき</sup>のバカ！ ヒーッ→！ AVのプロデューサーと思われてやんの  
！」

「しょ、しょうがないでしょ！ ウヒッ！ この人元から雰囲気が怪しい

んだもん！」

ウサミンだけは頬をヒクヒクさせながらも、私達美城芸能のUtu berなんですよとお姉さんに説明していた。

「あらそりうだつたの、これ名刺に『ハイパー・メディアクリエイター』なんて書いてあつたから、私てつきり……」

「たしかに……は、ハイパー・メディアクリエイターは怪しすぎるわね！プツ！」

「ハイパーつて！ヒーツヒツヒツヒ！」

その後俺達はその女性、田野辺蓮とすっかり意氣投合して朝まで飲み明かし。

結局せつかく取ったホテルの部屋では、少しも眠ることはなかつたのだった。

## 第6話

夜更けに降った雨が明け方には全て乾いてしまう8月の半ば。

昨晩地元の飲み屋で飲み明かした俺達は近くの温泉で昼までゆっくり過ごし、この日はかなり遅れての出発となつた。

「こちら川島さんのヘルメットにも飾り物が付きました。わんこそばのお椀でござります」

「ちよつと」

川島さんのヘルメットの後頭部には真っ赤な小さいお椀が貼り付けてある。

「カブの荷台にはねぶたの花笠を積んでみました」

「ねえ」

「もう一台のカブには福島でなにか積めたらな、と思ひます」

「ねえ」

「なんですか川島さん」

「なんでうさ耳ハートときて、私のヘルメットにはそばのお椀なわけ？」

「あつ！ いてつ！ いや、わんこそば早食い女王の川島さんにぴつたりだと……」

「80杯食べた大食い女王の心ちゃんもいるでしょ！」

川島さんは思いつきり俺の耳を引っ張っている、古典的だがやられると痛い。

「そのうちいいもの見つけてくれたら貼り替えますんで……」

「それってあたしが見つけなきやいけないわけ？」

「ていうか鍍金い！ 今日ドライアイス足してやろうとしたら車のトロ箱に力二入つてなかつたじゃねえか！ どうなつてんだよ！」

引っ張られた耳に向かつて佐藤ががなり立ててきた。

「バカおめえ夏にカニが暑い車内で何日も持つわけないだろ。最初から中身なんかねえよ」

「バカとはなんだバカとは！ナナ先輩なんかびっくりしすぎて『お土産のカニが逃げちゃった！』って課長に電話して謝っちゃったんだぞ」

「ええっ！マジで！？」

「すいません動搖してしまつて……」

ウサミンは気持ちが落ち込んだのか、カブにもたれかかって頃垂れてしまつていた。

「そんでお前ここまた無編集で動画流す気だろ、ナナ先輩みたいにピュアな子供が見てるかもしれないんだからちゃんとカットしろよ！」

「お前でもな、このチャンネル見てる視聴者がだ。『おおっ！カニが溶けるまでに東京にたどり着けるのか!? 夏は暑いぞお～』なんてワクワクドキドキしながら見てるか？」

「見てる子もいるかもしねないっしょ！」

「じゃあその子達用に制限時間つけてワクワクドキドキ要素追加するか？」

「それとこれとは話が別でしょ☆

「はいはい……」

「何だその態度は！」

おこられた。

「そんじやまあ、やりますか」

「何がだよ」

「十分喋りの尺取れましたんで、本日のライダーを決めますか」

「だから尺とかそういう夢を壊すような事を言うなって言つてんの！カットカットカット！ちゃんとカットしろよ！はあの妹や親戚の子も見てんだからな☆」

「じゃあ佐藤の家族に向けて、本日の早食い対決のデモンストレー ションです。ほらほら、お餅が消えるイリュージョンだよ～」

言いながら、俺は宮城名物ずんだ餅を次から次へと吸い込んでいく。

緑の餅が掃除機に吸い込まれるようにして消えていく様をしかと見るがいい。

「うわっ……」

「ええ……マジでどうなつてんの？」

「完全にホラーシーンよね」

体を張つて頑張ったのに酷い言われようだ。

「まあまあ、納涼ということで、多少ホラーでもいいじゃないですか」「多少じやないんだけれど……」

「はい今日の勝負はこちら！ずんだ餅でございます」

俺は3個1パックのずんだ餅を、人数分取り出して配つた。

「これってなんでしたつけ？豆のあんこがかかつてるんですよね」

「枝豆だぞ☆」

「初めて食べるわけだけど。もう完全に緑色なのね」

いつもどおり川島さんと佐藤の接戦になるかと思われた宮城大会

だつたが、予想に反してウサミンが非常に頑張つた。

ずんだ3つを口に頬張り、拳を握りしめて必死に飲み込もうとして

いる。

「ウサミン頑張りすぎじゃないか!? 大丈夫かそれ?」

ウサミンは若干青い顔でコクコクと頷きながら、体中を使って餅を飲み込んでいく。

他の二人も頑張ったが、ウサミンの捨て身アタックには勝てず勝者は安部菜々となつた。

「ああ、うつ！死ぬかと思いました！」

「無理しそうだぞ！」

「やばい顔色してたわよ」

「ナナ先輩なんで急に本気出したう☆」

「いやつ、あのつ、全国の子供達につ、いいところを見せたくて……」

「いやあのシーンこそカットでしょ」

「教育に良くないわよ」

「子供引いちゃうつて☆」

「えーつ!？」

ウサミンがショックでへたり込んでいるところを撮りながら、疑問に思っていた事を川島さんに聞いてみた。

「なんかこないだから子供子供つて言つてますけど、何かありました？」

「鍛金くん、聞いてないの？」

「Y a h ○ ○ ニュースになつてただろ☆」

「え？ なにが？」

「先月のY a h ○ ○ K i d s の検索ランキングで、スーパーバードが3位になつてたのよ」

「えつ、なにそれ、知らないいつす。お気に入り30万人になつたな」とは思つてたけど

「情報集めとけよ！お前プロデューサーだろ☆」

「8chまとめしか見てないから知らなかつた」

「もうちょっとアンテナ張りなさいよ……」

「でもまあもともと子供向けの番組つてわけでもないですから、問題ないのでは？」

「それでも無視できない数、子供のファンがいるんじゃないですか？」

復活したウサミンが話に混ざってきた。

「でもそれを考慮して企画を作るとお酒飲めませんよ。これから行く福島はいい地酒がいっぱいあるんですから」

「うつ……」

「お酒は飲みたい☆」

「飲んでるところだけカツトとか……」

「ていうかそもそも子供向けに舵を切るなら、ウサミンは17歳だから断酒ですんで」

「はぐつ……!!」

ウサミンはくぐもった声と共に胸を抑え虚空を見つめた。

「ナナちゃんが見たことない顔になつてるわよ」

「これこそカツトだろ☆」

結局かなり遅い時間に出発した我々は、まつたりと仙台を目指していた。

「今日はもう時間あまりありませんので、仙台にて一泊します。明日から遅れを取り戻しますので」

『どうせ力二もないんだから一泊でも二泊でもしたらいいじゃない。バカバカしいんだよ、こうやってカブ乗つてるとさ☆』

佐藤の背中がブツブツと文句を飛ばしてきた。

「お、文句言つてるかい？」

『こつちは文句しかないんだよー！』

「お前んちの母ちゃんにここからいたずら電話してやろうか？【もしもしお母さん、私も、事故つちやつてさー☆お金送つてくんない？】つて」

佐藤の声帯模写を披露すると、佐藤だけでなく川島さんのバイクもビクンと縦に揺れた。

「うわっ！今のなんですか？声マネ!?」

『何だ今の大騒ぎ！』

『今の心ちやんが喋つてたようにしか聞こえなかつたんだけど？』

俺の華麗な新技に車内と無線は大騒ぎだ。

『まーた変な特技身につけたのか、人間びっくり箱だな☆』

『もうユーティリティプレイヤーを通り越して奇人変人の域ですよ』

『そんなのを身につける努力を営業に回してくれればね……』

「ひどい言われようですね。川島さんの実家のおつかさんに電話して【今度会わせたい人がいるの……】って言つてあげましょか？ボロボロのディオで大阪からすつ飛んできますよ

『やめろ!!』

「鍍金さん鍍金さん、あたしのモノマネはないんですか？」

ウサミンは俺の袖をちょいちょいと引っ張つて、自分のことを指差している。

「【ナナでーす！あなたの名前を教えてね♪】」

「わっ！凄い！もつとないですか？」

「【ナナでーす！あなたの名前を教えてね♪】」

「【すゞーい！他のはないんですか？】」

「【ナナでーす！あなたのお名前を教えてね♪】」

「なんでナナだけ壊れたり力ちゃん電話風なんですか！」

『だいたいなんでそんなワザ修めようと思つたんだよ！』

「俺は○○7に憧れてるから」

『安っぽい○○7もあつたもんだな☆バカじやねえのか』

「……次の信号でボンドカー尻にぶつけてやつからな！」

『やめろー！洒落にならんぞ☆』

その後は特に面白いこともなく無事仙台に到着し、焼肉を食べて早めに眠つた我々なのであつた。

――――――――――

おまけ

とある動画のコメント欄。

――――――――――

f u k u s u k e 1時間前

スーパー札幌口ケマヂで!?探しに行くわww

返信 b5 q36

なつみママ 1時間前

+ f u k u s u k e 邪魔しにいくなアホ

返信 b12 q

――――――――――

れんちょん 2時間前

うちの友達は札幌港で青と白のデリカ見たつて言つてた

返信 b25 q

くまちやん 2時間前

昨日時計台ラーメンでサインもらつたやつがいるんだつて

返信 b66 q2

佐藤こころ 3時間前

北海道で食い倒れ企画とかかな、さすがにネタ切れか

返信 b q258

かかし 5時間前

メツキファンはやつぱ頭おかしいな

返信 b245 q

ユリウス・カエサル 5時間前

+かかし 触れるな

返信 b51 q

ナイトクローラー 4時間前

+かかし 鎌金四重士（暗黒微笑）

返信 b99 q

Maple 6時間前

渋谷の八拳伝で飲んださつま白波は美味しかったですね。

でもあの店、お刺身はイマイチね。

渋谷の店で渋い顔……うふふ。

早めに言つてくだされば北海道にもついて行けたので残念です。

サーモン好きの鎌金さんと北海道の新巻鮭でおしゃけをさーもん  
いっぱい。

詳細

返信 b q334

|-|-|-|-|-|-|-|-  
♡ M I Y U ♡ 6 時間前

流しそうめん、見つめるあなたの瞳にドキドキです。

夏はああいう料理も涼しくていいですね、でも私だけだとちょっと大変かも。

今回もあのビツチ3人が纏わりついてきて大変でしたね。  
あんなに雌の匂いを鍍金君になすりつけて。

慎みも恥じらいもないあの女達許せない許せない許せ  
詳細

返信 b q582

|-|-|-|-|-|-|-|-

猫ちゃん♡大好き 6 時間前

心は決めてくれたかしら?

母も私達になら店を譲つてもいいって言つてくれるわ。

鍍金君と私ならきっと可愛い赤ちゃんも、幸せな家庭も作れると思  
う。

一緒に地に足をつけて生きていきましょう。

鍍金君がどうしても今の仕事を続けたいって言うなら、私がア

詳細

返信 b q253

|-|-|-|-|-|-|-|-

ひとみ 6 時間前

流しそうめんキター? (・ω・)?

流れる汗、流れるそうめんw

めちゃめちゃセクシーでした(\*`?)、(\*)

まさに眼福、鍍金さんLOVE♡(△▽)：ハウ

ここ2日ぐらい部屋に帰つてないみたいだけど大丈夫?心配し  
詳細

返信 b q485

|-|-|-|-|-|-|-|-

カナリア 7 時間前

ウサミン流しそうめんで溺れかけてて草

返信  
b 4 8 q

## 第7話

あれから3日、俺達はまだ国道4号線を爆走していた。

「今日18時までに宇都宮に着かないと大変なことになりますよ」「カブに乗る以上に大変なことつてなんだよ！」

『また思いつきで罰ゲームを増やすわけ？』

『鍍金さんもうみんなヘトヘトなんですからやめましょうよ』

「俺の知っている餃子のめちゃくちや美味しい飲み屋さん、予約が19時からしか取れませんでした」

『それやベージyan☆』

『急ぐわよ』

「川島さん、前傾姿勢になつて風の抵抗をなくすのはいいですけど。30キロ厳守でお願いしますよ」

「ふたりともがんばつて〜」

川島さんのヘルメットには伊達政宗風の三日月の前立てが装着され、佐藤のカブの荷台には米が積みこまれた。

ジーコくんの至るところにステッカーが貼られ、車内には道の駅で買った地名提灯や龍が巻き付いた剣のキー ホルダーが吊るされている。

後部座席には各地で買ったお土産の地酒やおつまみ類が山と積まれていて、もう完全に旅サークルのお気楽旅行だ。

そして俺たちが国道4号線を上つているという情報はいつの間にかSNSで共有された。

少なくない数の人が、昨日ぐらいからちよくちよく国道脇で手を降つてくれていた。

『ありがとおう!!スーパーバード!!』

今も佐藤がよくわからない掛け声と共に左腕を振り上げて挨拶し

ている。

長年ファンのいない地下アイドルだったからだろうか、彼女はファンサービスにとても厚い。

川島さんは人差し指と中指をピッと振つてウインクだ、なんか古くせえなと思つても言わないぞ。

こないだ言つて怒られたんだ。

『おおっ☆横断幕持つてる奴らがいるぞお！ありがとう！スーパー  
バード!!』

この道端応援団の出現により、我々の旅の後半は退屈のない楽しいものとなつたのだつた。

やつぱりファンつていいな。

ちなみに、早食い勝負の最下位は安部菜々だつた。

そうして東京に帰つた翌日、俺は美城部長に呼び出されていた。  
アイドル事業部の課長から、ハイパー・メディアクリエイター事業部の事業部長に正式に昇進されたのだ。

「入りたまえ」

「失礼します」

「かけてくれ、楽にして」

「ウス」

「まずはU t u b e の……お気に入り登録者数だつたか？50万人突破おめでとう。インターネットとはいえ、君達が独自のチャンネルで視聴率1%並の数字を持つてゐるというのは……もう私には想像もつかんよ」

「何をおつしやいますやら、これもひとえに美城部長のお力添えが

あつてこそ

「おいおい、そういうのはいいよ」

美城部長はニヒルな笑みを浮かべ、机からキャビンを取り出した。

「おつと、良かつたかな？」

「お気になさらず」

「最近は芸能界も煙刈りが進んでいてね、特に男性の前では気をつけないとな」

「大変ですね」

「それで、話なんだが。今西部長のスリースマイルプロジェクトのアイドルをそちらのチャンネルに出してもらいたい。どうも少々苦戦しているようでね、君達の力を借りたい」

「それはもう、もちろんです。うちのやり方でよければですけども」

「ああ、それでいい。スリースマイルはバラドル指向だから路線も合っているだろう。それと、君にオファーが来てる」

「歌番組ですか？」

「バカを言え、バラエティ番組だよ。アイドル達も出してくれるそういうから、行つてきなさい」

「かしこまりました。そういうえば部長……かなりお疲れのようです  
が、良かつたらマッサージでもしましようか？ 実は、あんま鍼灸師の  
専門学校に行つてた友達から伝授された、秘伝のテクニックが……」  
「専門学校ね……」

美城部長は天井を見上げ、大きく煙を吸い込んだ。

「一般常識の専門学校はないものかな」

「ははっ、そんなの誰が通うんすか？」

「君だよ」

深いため息と共に吐き出される煙に押し出されるようにして、俺は

すぐすゞと美城部長の部屋を去ったのだつた。

道のど真ん中で干からびた蛙を見つけた9月。  
この間のカブの旅の途中でスカウトした田野辺蓮たのべれんが東京に越してきた。

下宿は俺の紹介した、バンド仲間のお婆ちゃんがやつてるとこだ。  
飲み屋街のど真ん中のアパートで、電車がクソうるさくて、夏暑く  
冬寒い、おまけに近いうち物理的に潰れそうなぐらいボロい。  
でも都内で家賃三万円の神物件なのだ。

俺は越してきた彼女と早速飲みに行き、今後の仕事の事を話し合つた。

「私つてキャラが弱いと思うの、ちょっと押しに弱いところもあるし」「いつそ外タレって事にするか？蓮つてちょっとエキゾチックな顔つきしてゐるしさ」

彼女は「それもいいかもね」と呟いてコンクラーベをかき混ぜる。

「じゃあ番組側である程度キャラ付けをしてもいいかな？」  
「いいわよ、あなたにお任せするわ」

そうして彼女はグラスを開け、この日3杯目のピニャ・コラーダを注文したのだつた。

薄暗く狭い店の中、緑の巨大なモコモコが蠢いていた。

それは俺が夜なべして作った着ぐるみである。

その中に入つた田野辺蓮、今は謎の外人で芸名はヘレンが「ぴにやー！」と吠えた。

「ということで、今日は美城芸能の同僚アイドルグループ『キヤノンボール』に来て頂きました♪☆

「こちらの縁のブサ……ブサ可愛い子は当チャンネルのマスコット『ぴにやこら太』くんです」

「まずはお一人、自己紹介どうぞ♪」

低身長かつメリハリの利いた体の、トランジスタグラマーな女性がしなを作つた。

「キヤノンボールのオットナの方、片桐早苗よん！」

もう一人のポニーテールの女の子はなぜか銀スプーンを握りしめていた。

「キヤノンボールのサイキックな方代表!! エスペアアアアアアアアア!! ユツコです!!」

「堀裕子ちゃんね」

あまりに元気な挨拶に、川島さんが苦笑しながらフォローを入れていた。

「ぴにやー！ぴにやぴにやー！」

「ふんふん、自分はぴにやこら太です、よろしくね☆つて言つてるぞ」

「ぴにやー」

緑のドライもんつぽい着ぐるみに入ったヘレンは、くるつと回つて機敏にステップを踏んだ。

「おおっ！ぴにやはダンスが得意なんだ」

「世界レベルよ」

「いきなり喋んなよ！」

佐藤は着ぐるみに膝蹴りを入れた。

中はコンプレッサーで空気を入れて膨らませてあるから、そうそう痛いことはない。

「ああっ！はあとちゃんとぴにやくんをいじめないで」

「コイツ昨日着ぐるみの合わせ終わつたあと、プロデューサーと恵比寿でイタ飯食つてたんだぞ☆呼べよあたしらもよ！」

佐藤はぴにやをバシバシ叩き、ぴにやの毛皮はグニヤグニヤとうねつた。

「ぴにや～」

「心ちゃん！ゲストも見てるから！」

「なかなかバイオレンスな現場ねー」

「ムムツ！サイキック透視能力！ぴにやの中になにか隠れ潜んでいますねー！」

「人間でしょ」

殴られていたぴにやが「ぴにや～！」と叫びながら器用に動き、佐藤にコブラツイストをかけて右手でコルナを掲げた。

「あいたたたたつ!!ギブツ！ギブツ！」

佐藤はぴにやの体を叩いてタップしているが、ひとまず放つておいて話を進めよう。

「それでは今日の企画の趣旨を」説明しましょう」

「はあとはほつたらかしかい!!」

「ぴにやくんをいじめるからですよ」

「本日はここで皆さんに、ボウリングをやって頂きます」

俺はカメラを回して、間接照明に彩られたオシャレな店内をフレームに収めた。

ここは友人の母親が経営しているダイニングバーで、ボウリングとお酒と焼肉が楽しめるという変な店だ。

「ボウリングね……あたしは腕に覚えがあるわよ」

張った胸を更に揺らして、自信満々に片桐早苗が言う。

「私も学生の頃は結構やつたわ」

川島瑞樹も片桐早苗と意味ありげな視線を交わし、自信アリのようだ。

他の人間はやつたことないとか、そんなもん興味ねーよ☆とか日々に言っている。

「今日はスコアが130を超えた方から順々に抜けていつていただけ。ラストまで残っていた方が、安部菜々さんと一緒に罰ゲームを受けていただきます」

安部菜々が罰ゲーム確定なのは、この前のカブの旅で早食い勝負で最下位だつたからだ。

「ま、130なら楽勝ね」

「私アベレージ180はあつたけど」

川島さんと片桐さんは二人で火花を散らしている。

「130つて何回ストライク取ればいいんですか？？」

「わかんない☆」

「サイキックでストライクを取りますよっ!!」

「この勝負、130以上を出した方には焼肉とお酒を用意してござります」

「おおうつ！」

「イエーイ☆」

「ぴにやー！」

「では、張り切つて参りましょう！」

皆で勢い勇んで乗り込んだ1ゲーム目、速攻で抜けたのは俺と川島さんと片桐さんだつた。

川島さんはスコア186、片桐さんはスコア216、そんで俺がオールパーフェクトで300だ。

「お前なんかやつぱおかしいつて☆」

「プロデューサー君ってプロボウラーか何かなの？」

「いやこの人ほんとになんでもできるのよ」

「四ツ辻で悪魔に魂でも売つたんですか？」

「なんでもいいんですけど、我々は先に焼肉を頂いてますから」

俺達はさつきと席に引っ込み、生ビールとカルビで酒盛りだ。

レーンでは緑の着ぐるみが指の入らない玉を真っ直ぐ投げようと苦心していたり、サイキック少女が「曲がれー!!サイコボール!!」と叫んでいたりする。

一応店員さんがアドバイスしてくれているが、ボウリング初体験の人間もいるから結構時間がかかりそうだ。

そうして1時間が経ち、俺達はすっかりできあがつてしまつていた。

「プロデューサー君はあ……彼女とかいるの？」

「こいつ入れ食いだから☆」

「でもあんまり具体的な相手つてのは聞いたことないわよね」

「バンドやつてた頃はもう常に女侍らしてるような状態でさあ☆」

「いやいや、そんな状態なつたことないでしょ」

「今もある意味そうよね」

「びにや！お前普通に着ぐるみ脱ぐなよ☆」

「あれ着てたら何も食べれないでしょ」

今ヘレンは緑のタイツに頭だけの簡易型びにやを身に纏い、ほぼ生身で酒盛りに参加していた。

結局1時間やつてレーンに残つたのはサイキックとウサミンだけだ。

経験者一人が抜け、スポーツが得意な佐藤とヘレンが抜けで順当といえれば順当だ。

「レーンの皆さん頑張つてください！後1時間でタイムアップですよ～」

「ぬおおおお！サイコボール!!」

「これ私がまた最下位だつたらどうなるんですか～？」

「その場合ウサミンさんは罰ゲーム2倍でござります!!」

「やだあ～」

尻を突き出して崩れ落ちるウサミンのここまで最高スコアは、なんと驚きの60だった。

「こいつバイトしてたコンビニの売上伸ばしまくってさあ。新しく店

持たせてやるから正社員になれって、オーナーの娘と結婚させられそうになつてたんだよね☆」

「えく、プロデューサー君あんまりその子は好みじゃなかつたの？」

「それがすごい美人だつて噂になつててね☆」

「心はなんでそんなに詳しいわけ？」

「はあとが詳しいつていうか、鍍金<sup>ぬっき</sup>の悪名が轟いてたつていうか……」

「あ、時間だ。このゲームで終了っ！」

レーンからは「ええく！」と到底130には届かないスコアのウサミンの悲鳴が上がる。

サイキックの方はじわじわとスコアを上げ、このラストボールでストライクを取れば130クリアだ。

「サイコボオオオオオル!!!」

明らかにサイコではなく、ファジカルなパワーで放たれた豪速球はバツカアン！と景気のいい音を上げ。

見事にすべてのピンをなぎ倒していた。

「これがっ！ エスパーの力です！」

「ああく！！ま、た、負け、た、く！！」

床にめり込まんばかりにうなだれたウサミンは今日も負け。

肉の一切れも食べぬままに、酒の一滴も飲まぬままに、過酷で孤独な一人罰ゲームロケが決定したのであつた。

## 第8話

「幸せつて何なんですかね……」

「あなたにとつては魚でしようね。あと34匹釣らないと帰れませんよ」

俺とウサミンとヘレン、それとテレビ局のクルーは神奈川某所に釣りにやつてきていた。

ウサミンは罰ゲームで魚50匹釣るまで帰れません企画に。

ヘレンはカメラマン兼ウサミンの相手役として。

俺はテレビ局の企画でスケボーの練習、テレビ局のクルーは俺の撮影だ。

「それでは本日も、釣りの方頑張つていきましょう!!」

「おおく……で、鍍金さんはまた別行動ですか……」

「私は自分でテレビの撮影がありますので、ちなみに撮影3日間ですので私は自分が終わったら東京に帰りますよ」

「ええ……」

「撮影のヘレンさんは今日の昼でしゅがーはあとさんと交代ですので」

「ふつ……世界レベルの撮影、見せてあげるわ……」

「ではまた夜の結果発表でお会いしましょう」

俺はなんでもできるプロデューサーとしてテレビに紹介されることになり、今回は3日間でスケートボードの技術を習得するという事になつていた。

ただ1日目でだいたいできるようになつてしまつたため、今日明日は時々苦戦する感じの動画を撮りつつファミレスでだべる仕事だ。テレビマン達にはネット動画とはやはり違う苦労があるらしく、情報交換にも熱が入る。

あつという間に夜になり、ウサミンの様子を見に行く時間になつ

た。

「あ～、薄情者の鍍金さんじやないですかあ……」

ウサミンはお酒を飲んでやさぐれていた。

釣つたばかりの魚をコンロで焼いて、ウサミン、佐藤、川島、ヘレンのフルメンバーで酒盛りをしている。

「で、何匹釣れたんですか？」

「十匹です！」

「鍍金くん、ちょっと厳しすぎるんじやない？」

「そうだぞー☆」

「と言つても、これは2倍の罰ゲームですからね、本来ならもう今日で終わつてますよね」

「なにか救済措置とかないの？ほんとここに置いてつちやう気？」  
「うーん……じやあ皆さん、明日はウサミンさんを手伝つて貰つても  
かまいませんよ」

「魚釣りりかあー……☆」

「バス釣りなら多少は経験あるわよ」

「ダンスなら自信あるんだけどね」

「うう……皆さんにご迷惑をおかけするわけには……」

「何いつてんのナナ先輩☆私はいつでも一丸となつて困難を乗り越  
えてきたじやないの」

佐藤はチューハイを持った反対の手でウサミンの肩をガシーッと抱く。

「はあとちゃん……」

「そうね！だいたい私達だけ東京に残されてもやりようがないのよ、  
昨日もエステに行つてから一人で晩酌してたらなんだか寂しくつて  
ね」

川島さんはワインを持った反対の手でウサミンの背中をポンポン叩いた。

「瑞樹さん……」

「いや……アナウンサーの仕事とか……」

「とにかく！スーパー・バードはいつも一緒よ！」

「じゃあ次誰か罰ゲームが決まつたら、連帯責任つてことにしどきますんで。四国八十八ヶ所とか行きましょうか」

「アホかーつ☆寺なんか行くわけねえだろ！そういうのはナナ先輩にお任せすっから☆」

「え……？ はあとちやん？」

「私無宗教だからちよつとお寺は……モン・サン・ミッシエルとかならいいけど」

「み、瑞樹さん……？」

「夢い友情だね……ドンマイ！」

俺が同情してウサミンの肩を叩くと、ウサミンはモガーッ！と声にならぬ声を発しながら俺の胸をポカポカ殴つた。

「ヘエーイナナ！ 安心して！ 私はどこにでも付いていつてあげるわ」

ウインクしながら言うヘレンだが、お前はマスコットなんだから確定で全行事参加だぞ。

そんなこんなで迎えた3日目。

テレビ局の人達は朝ちよつとだけ撮影してさっさと帰つていった。

釣り場にやつてきてみると、ジャージで釣りをするウサミンと佐藤に加え、なんか本格的な釣り人が混じつっていた。

川島さんだ。

「川島さん、結構やつてたんですか？」

「全然？大会じや準優勝までよ」

やつてんじやねーか。

ヘレンはヘレンで3脚にカメラを据え付けて自分で用意したらしき釣り竿を振るつていた。

「魚釣つたら各自カメラの前でアピールしていいことになつてるから大丈夫よ」

「なら同時に2匹釣つたやつは、更に行進でもしていいことにするか？」

「行進つて、なにそれ？」

「おおーい！魚2<sub>ダブル</sub>匹同時に釣つたやつは行進していいぞお！」

俺が釣り人達にそう告げると、各自いそいそと針を増やし始めた。

「ぜつてえはあとが最初に行進するからな☆」

「こここの潮はナナが一番詳しいですよお！」

「結局こういうのはウデなのよね」

張り切る3人を見て啞然とするヘレンに。

「うちの口ケは色々しんどいから、茶番でも楽しまなきや心が保たないんだよ」

と言ふと、彼女は3人へと心からの同情の視線を向けるのだつた。

最初のダブルを釣り上げたのは佐藤だつた。

「やつたー！ツツタカター！ツツタカター！ツツタカタツタツター！お茶の間の皆さんこんにちわ☆しゅがーはあとでござります♪2匹まとめて釣つちゃつた♪さああとは何匹？もうちよつと♪」

頭のおかしいテンションで行進をする佐藤を見つめながら、俺は小型ホワイトボードに正の字を書き加えた。

その後もウサミンが「よつしやあ！」とキャラをかなぐり捨てながらアジを釣り上げるも一匹。

ヘレンも「ワーオ！」と言いながら竿を上げるも、こちらも魚は一匹。

みんな何も言わないが、虎視眈々とダブルで行進を狙っているのがわかる。

何がそんなに彼女たちを搔き立てるのか、俺にはさっぱりだ。

「みなさん、あと12匹で終わりですからね」

「わかつたー☆

「ぐぬぬ……」

「…………」

「ダンサボー！」

「今日一番釣った方には私の独断で初代『釣りキチ』の称号を差し上げます」

「うおおおお！欲しいつ☆」

「釣りで負けることはないわ」

「ぐぬぬぬつ！」

「私レベルになると、釣りに狂うのではなく、釣りが私に狂うのよ」

「おっ！あつ！ほおつ！ダブル！これダブルじゃないかしら!?」

俺が今日の動画を盛り上げるために勝手にルールを作り。  
無理やり雑な勝負事に仕立て上げたその瞬間、川島さんがイワシを2匹釣り上げた。

そして佐藤が行進をやつたからには、もちろん川島さんも……

「ツツタカター！・ツツタカター！・ツツタカタツタツター！お茶の間の皆さんこんにちわ／＼かわしまみじゅきでござります／＼……」

他の釣り人達からの迷惑そうな視線を全身で受け止めながらも。我々はこの後もう一度の行進を行いつつ、24匹をきちんと釣り上げたのだつた。

初代釣りキチは8匹を釣り上げた川島さん。釣り人の面白躍如なのであつた。

……

おまけ

### 【地上波】テレビ初出演の感想＆裏話【初登場】

743・334 回視聴

――――――――――

M i s h i r o I d o l

2012/09/22 に公開

超人プロデューサー天領鍍金のバーティーとしてテレビに呼ばれたスーパーバード

3日間でスケートボードを修めろという無茶振りに対し見事2回転半ジャンプで応えた鍍金P

TV撮影のその裏側

そして初代釣りキチへのトロフィー授与

のコメント欄

| | | | | | |  
ナライジヤ 1時間前

メツキやつぱ頭おかしいわw

返信 b9 q8

| | | | | | |  
m a v u 1時間前

スケボー3日目で900飛べるなら誰も苦労しないんだけど

返信 b63 q

| | | | | | |  
g a m o u 1時間前

+ m a v u それ

返信 b21 q

| | | | | | |  
横綱 2時間前

放送見たけどスタジオドン引きヒエヒエだったね

返信 b13 q2

| | | | | | |  
N a m b a 2時間前

ついにU tubeの頭おかしいとこがテレビに輸出されちゃった

返信 b9 q58

| | | | | | |  
みゆき 1時間前

+ N a m b a しかも本来裏方の奴っていう

返信 b3 q88

| | | | | | |  
S a y u 2時間前

よくわからなかつたけど、どう凄いの？

返信 b90 q22

かに 1時間前

+ S a y u スノボーで真剣にやればオリンピック出れる

返信 b256 q

—————

ななこ 3時間前

地味にぴにやも地上波初登場だね

返信 b32 q

—————

♡ M I Y U ♡ 4時間前

録画して、見ました。

ハイビジョンのあなたはやっぱり素敵、もっとテレビに出てほしいです。

いつもの四人もそうですけど、後ろに座っていた芸人もあなたに色目を使つていましたね。

気をつけてください、あなたは色氣がありすぎるのですから。今思い出しても許せません、やっぱり私BPOに直接申し立

詳細

返信 b q893

—————

ひとみ 4時間前

やつたー！かつこいいー！（△▽△▽）

声帯模写もサラっと出るのが凄かつたです！（\*■？■＊）。。。

♡

芸人さんもびっくりしてましたね（？ー？）ニヤリ

またぜひぜひテレビに出てください！（\*。▽。）

昨日はゴミ出してませんでしたけど、出し忘れですか？この

詳細

♡

返信 b q 8 9 7

――――――――――――――――

猫ちゃん♡大好き 4時間前

ひな壇にいた高橋礼子さんを3回見たわよね。

やつぱり、着ぐるみの中身といい黒髪ロングが好みなのかしら?  
髪を伸ばしてみるから、また感想を頂戴ね。

それと、最近料理を勉強し始めたの。

男の人だからガツツリしたのがいいかと思って揚げ物から始  
詳細

返信 b q 6 5 3

――――――――――――――――

M a p l e 4時間前

最近板わさにハマってるんですね。

お蕎麦屋さんはあまり入ったことなかつたけど、あなたについて  
入つて私も気に入りました。

かまぼこ食べて、蕎麦湯もぼこぼこ。

神奈川のファミレスでは近くの席になつたんですけど気づきましたか?

お家のおそばのお蕎麦屋さんでも天ぷら食べにぶらぶらと散

詳細

返信 b q 1 2 6 0

――――――――――――――――

カナリア 5時間前

ウサミンキヨドリすぎて実年齢言つてて草

返信 b 1 6 3 q 2

## 第9話

2013年2月の雪の降る日の事だ。

午後22時の収録帰り、俺達はテレビ局の駐車場でとある女性に声をかけられた。

「みなさん、お久しぶりです」

765プロは竜宮小町のプロデューサー、秋月律子だつた。

「律子じやん、久しぶり」

「りつちゃんお久しぶり☆」

「お久しぶりです♪」

「その節はどうも……」

「始めてまして、田野辺と言います」

「どうもどうも、ヘレンさんですよね？動画見てます、よろしくおねがいしますね。最近名前聞かない日ないですよ、凄いじゃないですか

スーパーバード」

「竜宮小町も、こないだのアルバム聴いたよ」

「えへへ、ありがとうございます」

「今年は紅白出れるんじゃない？」

「出れたら嬉しいんですけど、やっぱりあれはジャンルで枠が決まってるの……」

「そつかあ……ああ、そういうえば。うちの動画もまた出てよ」

「あっ、それは是非。反響凄かつたですよ！前の動画」

「いや、うちも竜宮小町のおかげで軌道に乗ったところがあるからさ、また恩返ししたいな」

「恩返しだなんてそんな……あつ、そういうえば……」

「うん？」

「鍍金さん、あの日のナポレオンを覚えてますか？」

「え、なに？」

「あの日、暗黒歌謡祭の打ち上げの時ですよ。みんなで古いお酒を飲んでて、私にも成人したら飲ませてやるって言つたじゃないですか」

律子は元アイドルで、現役時代に俺のやつていた暗黒歌謡祭というイベントに出たことがあったのだ。

俺と律子の縁もそこからだつた。

「……ああ、なんとなく覚えてる」

「私も成人してしばらく経ちますし、また連れてつてくださいね」

「じゃあ……今から行く？」

「今ですか!? 今は……ちょっと……」

「仕事?」

「いや、そういうわけじゃないんですけど……」

ポンと背中を叩かれ、振り向けば佐藤がやれやれといつたふうに首を振つていた。

「お前さあ、りつちゃん困らせるんじゃないよ☆」

「女の子には色々準備もあるんですから……」

「そうよ~」

メンバー達からの抗議の集中砲火を受け、俺は背中を曲げて律子に耳打ちした。

「あー……じゃあ、また誘うわ」「はいっ!」

そう言つてから1週間後の夜、俺と律子はとあるオーセンティックなバーで旧交を温めていた。

律子はグリーンのシックなワンピースで髪をひつづめにしている。

露出した細いうなじが上気して赤く染まり、どことなくセクシーだ。

「そういうえば律子のプロデューサー、独立したあとどうなったの？」  
「その後名前聞きませんねえ……自信満々に『765プロに泣きつかれても仕事は回さないから』なんて後ろ足で砂ひとつかけていきましたからね」

「律子も誘われたんじやないの？ 仮にも2009年のアイドルアカデミー優勝Pとアイドルだったんだしさ」

「いやあ、私はあの時点で自分は日高舞にはなれないなあって薄々わかつてましたから……プロデューサーも勢いだけっていうか、私も含めて運がいいだけでしたからね」

「そんなことないと思うけどな」

「それに私はもともとプロデューサー志望だったんですよ。アイドルアカデミー優勝は、売られる側の研修としては出来すぎでした」

「秋月律子は1年だけ駆け抜けた伝説のアイドルだってみんな言つてるんだし、そう卑下したものじやないだろ」

「そうですかね？」

「俺もCDまだ持つてるよ」

「ありがとうございます……」

「……マスター、俺次へネシーで」

俺が頼むと、無言でオンザロックが出てきた。

律子はもうふにやふにやで、半ば俺に寄つかかるようにして舐めるようにはリテージをやつている。

「ねえ鍍金さん……私がいつか独立したいって言つたらどうします？」

「……律子なら明日でも大丈夫だよ」

「鍍金さん……ついてきてくれませんか？」

「…………」

俺にもたれかかってそっぽを向いたまま、律子は静かにそう言った。

さつきより更に赤くなつたうなじが小さく震えていた。

「お金は私が稼いで不自由させません……」

「…………」

「鍍金さんは共同経営者としてのびのび仕事して貰えたらいいんです……」

「…………」

「それで、その…………できたら、仕事だけじゃなくプライベートでも一緒にやつていけたらなつて……」

「…………」

震えは細い肩にまで広がつていた。

「駄目…………ですか？ 駄目ですよね…………すいません」

俺は律子の肩に手を置いて言つた。

「すげえアルバムを作るんだ」

「アルバム…………ですか？ 音楽の…………？」

「世界中がびつくりするようなのを作る」

「スーパーバードですか？」

「世界中回つてすげえ曲かき集めて、スーパーバードのファンでマジソン・スクエア・ガーデンを満杯にしてやる」

「ふふ…………先に武道館じやないんですか？」

「今の武道館にトロフィーとしての価値なんかねえよ」

「もしマジソン・スクエア・ガーデンが満員になつたら凄いですね」

「ああ、竜宮小町丸ごとニューヨークに招待してやるよ」

「あらつ、前座をやらせなくていいんですか？」

「前座はオーディションに受かつたらかな」

「ふつ……あははっ！ そうですね、オーディションには呼んでくださいね！」

俺達はキザにXYZを飲み干し、固く握手をしてその場で別れた。  
前世みたいに家まで送つていくなんてことはしない、女が襲われる  
ことなんてほとんどないからな。

そして久々に深酒した俺は、風呂で溺れて死にかけた。  
危うくホイットニー・ヒューストンになるところだつたぞ。

翌日、会社に出るといきなり佐藤に絡まれた。

「鍍金い、お前昨日りつちゃんに振られたんだつてえ？」

ジャイアンみたいなニタニタ顔だ。

「なんで知つてんだよ」

「お前のストーカーがバーの前で別れるところ見てたんだつてさ☆」

「鍍金さんほんと身の回りに気をつけてくださいね……」

「やばいわよマジで、一瞬で情報が共有されてたのよ」

「1人じやないのよ、4人だか5人だかいるんだからね」

「俺のストーカー？ ほつとけほつとけ」

佐藤以外の心配そうなメンバーには悪いが、女がピーピー言つてゐるのを氣にしてたら、男はこの世界では生きていけないので。

だいたい女つてのは元々病的に噂が好きなんだから、男女比が偏つたらもう全員軽度のストーカーミたいなもんだ。

所構わず写真は撮られるし、つぶやかれるし、同じ飯屋に入られて同じメニューを頼まれるし、変な話完全にパンダ状態なのに慣れてしまつた。

自分の部屋にでも入つてこない限り、俺はもう他人の目は気にしないことにしたのだ。

.....

東京某所の一般母子家庭にて。

「おかあさんおやすみ〜」

ふにやふにや言いながらベッドに入る我が子を見送り、私は晩酌の用意をして居間のテレビの前に陣取つた。

見るのはU t u b e、スーパーばーどというお笑い芸人のチャンネルだ。

我が家で一番最初に彼女達のファンになつたのは娘だが、今ではすっかり私もハマつていてる。

今履いているスリッパも番組のマスコット、ぴにやこら太のもの。娘ともお揃いで、事務的な会話だけになりがちな母子家庭だつた我が家もいくぶん明るくなつた。

スーパーばーど様々だ。

『おいホスト！はあとにも注げよ☆』

『おめえは手酌でやつてろ、今日の主役は川島☆姫☆瑞樹だぞ。』

『苦しゅうないわあ〜』

『姫！フルーツの盛り合わせでござります』

去年の冬に投稿されたお気に入りのこの動画は、川島瑞樹の誕生日スペシャル回だ。

ホストクラブのキャストのようなコスプレをしたスーパーばーど

のメンバー達が、姫の格好をした川島瑞樹を接待する内容だ。

スリーピースのスーツをビシツと着こなしてキビキビ動くプロデューサーが、かつてよくドキドキしてしまう。

動画のコメントにストーカーが湧くのもちよつとわかつてしまふ気がする。

ただ、昼間に娘の前で見るのはちょっと憚られる。

お酒も飲むし、真似事とはいえ大人のお店の事だし、あんまり子供には見せたくない内容だ。

それにもし娘に「こんな誕生会がしたい」と言われたら困つてしまうだろう。

実際子供達がそうやつて動画の真似をしたりする事で、娘の通う小学校でも問題が起こっているそうなのだ。

中には感化されやすい子供もいるようで「将来の夢はU t u b e rです!」なんて言い出す事もあるらしい。

教員はもちろん、親同士の間でも彼女たちは何かと物議を醸している。

PTAの集まりでも「あんな低俗な番組は視聴禁止にしろ!」なんて真っ赤になつて怒つてるお母さんがいるぐらいだ。

でもスーパーバードだつて毎回毎回悪ふざけをしているだけじゃない。

『東京から九州まで、新幹線で止まる駅全部綺麗にする』なんて動画では鉄道会社から正式に感謝状を貰つていたし。

クリスマスイブと当日には、みんなでぴにやこらサンタの格好で凄い数の孤児院を回つていた。

仕事とはいえ、なかなかできることじやない。

『姫!これがシャンパンタワーです!』

『すごいわあ〜夢みたい』

『ぴにや、下からライティングして』

『ぴにや〜』

『では、シャンパン行きますよ〜1、2、ナナ〜』

『うわあ～シャンパンがキラキラしてほんと綺麗ねえ～』

『口マンチックだな～☆』

『あつ』

『うわっ！』

ガツシャアアアアアン!!

『びにやああああああああああああああああ!!!』

このウサミンが手を滑らせてシャンパンタワーが崩壊する瞬間は、下にいるぴにやには気の毒だけど毎回笑ってしまう。

そうして大笑いしておきながらも、この姿を娘に見られたくないと思ふ。

これはちょっと虫が良すぎるのだろうか？

## 第10話 美城、クローネやめるつてよ

2013年の鼻がムズムズし始める3月。  
俺は美城部長の部屋に呼び出されていた。

「プロジェクトクローネが凍結ですか!?」

「ああ」

「そんなに売れてなかつたんですか……?」「別に売れていなかつたわけじやない。人事上の都合というやつだ」

美城部長は机からキャビンを取り出して火をつけ、ゆっくりと煙を吸い込んだ。

「今度執行役員に上がることになつた」

「おめでとうございます!」

「ありがとう……で、だ。おとぼけは無しにしよう。なんで私が執行役員に上がるか、君もわかつてんんだろう?」

「いや……すいません、見当もつきません」

「君の作つたあの着ぐるみだよ」

「ぴにゃこら太ですか?」

「美城芸能は今期、前期の売上を大きく超える結果を出した」

「はい」

「その4割は君の所の、ぴにゃこら太グッズの売上だ。10月から3月までの売上だけでだぞ」

「えつ? 申し訳ありません、全く知りませんでした」

「それで私は今後ライセンス事業部で指揮を執ることになつた。もちろん君たちのハイパー・ディアクリエイター事業部も兼任だ。わかるか?」

「えつ……う、売上ありがとうございます……?」

「違う、仕事が手一杯で、もう自分のプロジェクトなど持てんという事だ! 以上、下がつてよし!」

若干キレ気味の美城部長に追い立てられるように退出した俺は、年末ぐらいから給料が一桁増えていた理由を今知ったのだつた。

「ぴにやのせいでクローネが凍結かあ☆」

撮影終わりのミーティングの席で、椅子の上にふんぞり返つた佐藤が心配そうに声を上げた。

「たしかにぴにやは凄い人気ですもんね」

「わかるわ、町にも普通にぴにやのキーholder付けてる子がいるもの」

皆さんと見てるもんだな、俺はぴにやの人気なんて気にしたことなかつたよ。

「中の人の人気はどうなのかしら?」

心配そうにヘレンが聞く。

「下手な歌手とかより知名度はあるだろ」

「このメンツの中で私だけWikiにページがないのよね……ぴにやのは個別で立つてんだけど」

「あなたつてそういうの気にしてたのね」

肩を落とすヘレンの肩に、川島さんが優しく手を置いた。  
オンラインムじやないヘレンは纖細なのだ。

「しかし、クローネがなくなつたら蘭子ちゃんと飛鳥ちゃんはどうす  
んだろ☆」

「あの二人はアイドル事業部預かりになるつてさ。あとこれは結果的に話だけど、今西部長のスリースマイルプロジェクトもなくなるんだつて」

「なんですか!?」

「いや、だつて3つあつたプロジェクトのうち、1つは独立、1つは凍結、ならもう残りは全部まとめて美城芸能アイドル事業部つて括りでいいだろつて話になつたんだろ」

結果的にだが、1年経つて名前が残つたのはうちのプロジェクトだけだつたつて事になる。

でもスリースマイルの各ユニットは健在だし、クローネの二人以外のアイドル達からすれば特に何か変わつたつて事もないだろうな。

「三竦みで高め合つていう目論見は崩れ去つたけど、結果はきちんと出でているものね。クローネだつて仕事がないわけじやなかつたわけだし」

「しかし落ち込んでんじやないかなあ、あの2人……よつし、お姉さんがいつもオススメの漫画でも差し入れてやつか☆」

指をパチーンと鳴らした佐藤が椅子と一緒にクルクル回つて、昭和の漫画がお前は。

「あんまり過激なのは駄目だぞ、あの二人まだ今月の卒業式までは小学生なんだからな」

「大丈夫大丈夫！はあとが中学の頃読んでたやつだから☆真似したつて、ちよつと眼帯したくなつたり左手に包帯巻きたくなつたりするぐらいい？」

「中学の頃はそういう子いましたね。隣の席の子も『前世からの運命の戦士が……』とか言つてましたよ」

「さつぱりわからないわ」

「私も漫画はあんまり読んだことないのよね」

「ほどほどにな」

あんまり12歳の子供に変な影響を与えて、また美城執行役員に怒られたらかなわんからな。

「まかしとけつて☆」

「私もウサミン星から小説か何か持つてきます」

「あつ、じやあ次の動画で本棚作ろうか。そしたら本はアイドル事業部に置いといて、ちょこちょこ持つて帰れるしな」

「そうやつてすくぐネタにすんだから☆」

「また木切つたりするわけ?」

肉体労働があんまり好きじゃない川島さんが苦い顔をしているが、気にしない。

「ついでにあの子達の好きなびにやこら太の彫り物とかしようか。U tubeで彫刻のやり方勉強しどくわ」

「ついででやることじやないわよ」

「まあまあまあ、とにかく明日は8時に駐車場集合ということです。ホームセンター行きますから」

ういー☆とかおつかれーとか言いながら、動画編集がある俺を残してメンバー達は三々五々帰つていつた。  
よし!俺は明日までに彫刻を極めるぞ!

今にも飛び出しそうな天使のびにやと悪魔のびにやの彫刻が施された本棚は『禁じられし書架』と名付けられ、アイドル事業部の壁際に設置された。

蘭子と飛鳥もなかなかお気に入りで、レッスンや仕事終わりにはこの本棚の本を読みながら親御さんを待つているらしい。

なんにせよ、子供達の元気が出たならばいい事だ。

しかしそうそういう事ばかりじゃなかつた。

ライセンス事業部に行つた美城執行役員は、憂さ晴らしとばかりに俺へガンガンびにや関係の仕事を回してきたのだ。

『つぶやきサービスではアイドル達が写真を載せたあの本棚の評判がいいそうだ。広告用に図面を書き起<sup>こ</sup>しておいてくれたまえ、1週間ほどで』

美城さん、1週間はキツいです！

と思つたが5分で書けた、一度彫つたことがある図面だからだろうか。

『（）当地<sup>ひ</sup>にやというキー・ホルダーを作る企画<sup>企画</sup>が進んでいる、原型をやつてくれたまえ。47都道府県に東京は23区分、早めに頼むぞ』

造形なんてやつたことないんですけど！

と思つたがBlendOrのチュートリアルを見たら意外とスパツとできてしまつた。

1週間ぐらいで全部作り終えたので、もう2ヶ月ほど引き延ばそうと思つていたのだが……

執行役員は作業が終わつた2日後に『できているのだろう』と言つて成果を取りに来た。

だんだん美城執行役員の俺使いが効率化してきている気がする。

『メッセージニアプリのスタンプ第一弾の作画を頼むぞ』

それぐらいイラストレーターに頼んでくれ。

腹が立つたので経費で一番高い液晶ペンタブレットを買って、動画にもしてやつた。

イラストの描き方もYouTubeで調べたけど、まあ流行ってる感じの絵柄に似せていけばいいんだろう。

「お絵描きしてるの？莉嘉もやるーっ！」

「ねえねえ、あの本棚にあつたこのキャラ描いてよ」

「懐かしいわねー、美嘉ちゃんが持つてるのあたしが高校の頃の漫画よ」

「サイキックツ！十年前です!!」

「ユッコちゃん、後で話そうか……？」

途中で事務所のアイドルたちに乱入されて色々と邪魔されてしまつたが、作業自体は2日で終わった。

『わが社の営業用にもぴにやこら太が必要だ、予備の着ぐるみ2つとバリエーションも欲しい。至急だ』

業者だと時間が間に合わないらしい。

翌々日に完成したのを一着渡すと、さすがに驚いた顔をしていた。でももう持つてこないで……

その後2週間かけてぴにやこら太と黒ぴにや、ピンクぴにやを納品した俺は、これ以上仕事を振られないようにと慌てて海外へ旅立つたのであった。

.....

東京都 高校教師（29）

『ヘレンは黙つてろよ☆皆さんこいつはカメラの外じゃ工業用アルコールだって飲み干しかねない酒キ（ぴにやあ）イなんですかからね

!』

『ガンバリマンは工業用じやないでしょ、頑張る女の晩酌用じやない』  
『稼いでんだからもつといい酒飲みなさいよつて話でしょ☆』

『ヘレンは「私は今もバイトやってます」つてのを売りにしてるんで  
しょ?』

『世界レベルの女はバイトなんてしないわ』

『アルペンでバイトしてたろ☆』

『私はスキージやなくて、冬を売つてたの』

『はいはい』

『でも僕約家でいいじゃないですか、私も家に入れた分からお母さ  
んに貯めてもらつてますよ♪』

『ナナ先輩はいつまでウサミン銀行を活用するつもりなのさ……』

「まあちゃん、それ消して」

「えー? なんで? スーバー嫌いなの?」

「嫌い」

「でもぴにやこら太のスマホケース付けてるじゃん」

「それとこれとは別なの」

ぶーたれながらも別の動画に変えてくれた素直な姪っ子に、少しだ  
け胸がほつこりする。

学校の生徒達もこれぐらい素直だつたらいいのに……

スーパーべードが登場して、その後追いのU t u b e rが巷に溢れ  
かえつてからというもの我々教員は大忙しだ。

これまでの非行行為に比べ、今の学生はやる事が大きい。  
大きすぎる。

隣のクラスの子達が春休みに音信不通になつたかと思えば、原付き  
を買って北海道を目指していたらしい。

もちろんお金なんかほとんどないから毎日ネットカフエ泊まりで、

後半はビニールシートにくるまつて公園で焚き火をしていたらしい。

結局ここ東京から遠く離れた宮城県で補導された。

隣のクラスの担任の先生は、日曜の朝から宮城まで車で迎えに行つたらしい。

その後はなぜか親御さんに詰められ平謝りだ。

恐ろしすぎる。

うちのクラスの生徒達もいつ何をやらかすかわからない、噂では顔を隠してゲームの実況なんかをしている子もいるらしい。

それで何か問題が起きたら私に責任が来るのだ。

青春を楽しむなら部活をやってほしい。

とにかくU t u b eは未成年には影響が大きすぎる。

姪のまあちゃんにもあまり見させないようにしなければ……

「そういういえだけいちやんの部屋にメツキの裸の写真あつたね」

「ぬつ、あれはいやらしい裸じやないのよ！ 寒中水泳の写真でしょ！ 子供は見ちゃダメ！」

「えー、なんでー？ やらしくないんでしょ？」

「子供にはっ！ もつたい……早すぎます！ ろくな大人にならないわよ！」

！』

ああ、悪影響だ。

ユーラシアから黒い風が吹いて、男が生まれにくくなつてからもう100年近い。

子供でも大人でも、女は男の筋肉には抗えない。

11歳のまあちゃんがもう雌の顔をしてる。

あの雑誌は予約即完売で超。プレミアがついてる本なのだ、まあちゃんの目に届く所に置いておいてはいけないものだ。

悪影響だ。

あんな屈託のない笑顔で自慢気に筋肉を晒す見目麗しい男、それもアイドルやA V男優じやない、裏方の男だ。

そんなもの、みんな見たいに決まつてる。

「とにかく、あれはダメ。もう捨てちゃうからね」「えー！なんでー！！もつたいない！」

悪影響だ、子供達にも私達にも。

色んな意味で、スーパー・バードは眩しすぎる。

学校を出た後の世界はあんなに優しくない。

笑いかけてくれる男はない。

きらびやかな仕事ばかりじゃない。

あんな風に何でもできる人なんていない。

でも生徒達には、そういう事を知つて世の中に絶望してほしくもない。

U t u b e、教育者にとつては本当に悩ましい存在だ……。

## 第11話 ミニアニ大作戦 前編

楽しい楽しいインドネシアでの口ケが終わり、我々はまた日本の忙しない日常に呑まれていた。

「はあ？ インドネシアの動画は投稿しないって！？ なんで？ お前300万のビデオカメラまで自腹で買って、やる気満々だつたじゃん☆」「そうですよ～スリと戦つたり、ディスコに警察が踏み込んできたり、街角で密造酒飲んでた人が病院送りになつたり、色々撮れ高あつたじゃないですか」

「ファンキーなんとかで最強のアイドルソングを出す！ つて現地の作曲家と編曲家にリテイク出しまくつてさんざん滞在延長したのにね」  
タ地区発祥の凶悪なダンスマジックなのだ。

「ぴにゃ……」

「みなさん、これはアルバム用の曲ですので。また海外に曲録りに行つて曲数が溜まつてアルバムが出るつて時に、ババーッ！ と一気に動画を出しますんで、楽しみにしててください」

「また海外行くのかよ！」

「今度はもう少し過ごしやすいところにしてね」

「ナナはハワイに行きたいで～す」

のんきに騒ぐメンバー達だが、そうは問屋がおろさない。

「あ、次はインドのゴアに行きますんで」

「えつ！ なんで！？」

「トランスの聖地ですから」

ゴアって場所は、ゴア・トランスっていう音楽のジャンル名にも

なってるからな。

シーヴンになると毎日毎日パーティが開かれているそうだ。

「私、インドには行くなつて親に言われてるから……」

川島さんは腕をクロスさせてバツマークを作つてゐるが、関係ねえ連れてくぞ。

大阪のおつかさんも連れてつてやろうか。

「ハワイでウクレレとかじや駄目なんですか～？」

「インドなんかまた暑いとこじやんか☆やめろよ～」

メンバー達は何やら文句を言つてゐるが、スケジュールを握つてるのは俺だ。

「インドの後にはこれまたトランスで有名なイスラエルに行きますから、楽しみにしててくださいね」

イスラエルにはゴア・トランスが更に進化した、サイケデリック・トランスっていうジャンルが根付いてゐるのだ。  
非常に楽しみだ。

「勘弁してくれよ～マジでさあ……」

佐藤が青い顔で美城プロ駐車場のアスファルトの上にへたり込んでしまつた。

ちよつとスケジュールが厳しすぎたかな?  
しようがないな。

イスラエルの前にどつか温泉地でも挟んでやるか。

4月、入社の季節だ。

俺たちスーパーバードは、なんと美城プロの入社式に呼び出されていた。

壇上に上がった川島さんが無難な言葉でスピーチするのを聞きながら、俺は新入社員たちの顔ぶれを見回していた。

みんな気合と希望に満ちた顔だ。

憧れの芸能界、それも押しに押されぬ大企業。もう人生の絶頂だろうな。

そんな新入社員達の中に、俺は見知った顔を一つ見つけていた。

「佐藤、あれ武内の弟じゃない？」

「え？ どこどこ？ あつ、ほんとだ☆」

「武内さんって、めっき鍍金さんのイベントによく出てた。ピンクの髪の毛のドラムの人ですよね？ 弟さんいたんですか？」

「そうそう、住所不定無職の武内だけど、弟はすぐえ進学校通つてたんだよ」

「高校受験の前日、夜中にバイクで神社連れてつたら弟が風邪引いたって言つてたぞ☆」

「最悪な姉ですね♪」

「あいつ左腕に入れ墨入ってるんだけど、自分で入れたから漢字間違つてんだぜ。毘沙門天の沙が砂になつてんの」

「あつ、それ見たことがあります」

「ぴにや……」

ぴにやに肩を叩かれ、指をさす方向を見ると美城執行役員が凄い形相でこつちを睨んでいる。

「あつ、やべつ、マイク……」

「あつ、ピンマイクだつた☆」

「す、すいません……」

会場中から視線を浴びる俺たちの横では、何も悪くないぴにやが深く深く頭を下げていたのだつた……

早くも桜の散り始めた4月某日。

我々は今期のスーパーバードの方向性を決める大戦略会議を行つていた。

「ぴにやこら太がアニメ化するという話は皆さんご存知ですね」

「おおゝ☆」

「私達がハブられるやつね……」

「ナナは声優アイドルになるのが夢だつたんですけど……」

「ぴにやの中の人すら別人だものね……」

そう、我々のぴにやこら太のアニメの話から、我々は丸々シャツ脱アウトされていたのだ。

理由は『子供が見ても親御さんからクレームが来ないよう』との事だ、すでに映画化も見込んでいるらしい。

「そうー！皆さんも……なかなか不満が溜まつていらっしゃると思うます！」

「そうだー!!」

「ナレーションぐらいやらせてくれてもいいと思わない？」

「そうですよ！」

「世界レベルの声優の誕生を逃したわね」

「ということで、執行役員の方からぴにやこら太アニメの応援動画を作る許可を頂いてきましたので……」

「応援かあ☆複雑だな～」

「まあしようがないんじやない？」

「そうですよ～めでたいことなんですから」

「それで何するのかしら？壁画でも描くの？」

「うちでも独自にぴにやこら太のアニメを作つてしまおうと思います」

俺のモツターは『好きにできないなら、好きにできる場所を作る』だ。

勝手に作つて勝手にネットに上げちゃえば、俺たちだつてアニメ関係者になれる。

「はあ!？」

「なにそれ」

「どういうことですか?」

「また怒られるんじやないかしら」

「始末書ぐらいは覚悟してください」

「嫌な覚悟だなおい☆」

「監督・作画、私。佐藤心役、佐藤。川島瑞樹役、川島さん。ウサミン役、ウサミン。ぴにやこら太役、ヘレン。ヘレン役もヘレンでいきます」

「ていうかお前アニメ作つたことあんのかよ!」

「え? 絵いっぱい描くんでしょ?」

りくつはしっている。

「バカか! そんな簡単じやないんだよ☆」

「そうですよ、アニメってそんな素人がポンと作れるものじやないと 思いますよ」

「アニメの事はよくわからないわ」

「同じく……」

「まあまあまあ、ご心配なく。毎週5分ぐらいのミニアニメですし、なんとかしますので」

アニメなんかあまり見たことないけど、2、3本見ればだいたい

掴めると思うしな。

「これでほんとに今までだいたいなんとかなつてたから怖いんだよなあ……」

「有言実行するバカつてタチ悪いわよね……」

「まま、本家びにやこら太アニメの方は夏に放送ですんで時間ありますから。じっくり腰を据えてやつていきましょう」

「おおく……」

佐藤の気のない同意だけが部屋に響いた。

それから約2週間後。

なぜか第1話の動画は早くも完成し、われわれは台本の読み合わせを行おうとしていた。

「いや、早くね？ おかしいよね☆」

「うわあ……めちゃくちゃヌルヌル、ちゃんとアニメになつてます……これ何枚描いたんですか？」

「1秒30枚、こんなもんじやない？」

メンバーの中で1番サブカル好きなはずのウサミンがなぜかドン引きしているが、アニメって毎週やつてるんだから3日ぐらいでできるもんじやないのか？

「普通アニメって何百人も人が集まつて作るんですよ……」

「絵も？」

「そうです、絵の上手い人が動きの要点を描いて、その間のコマをみんなで埋めるんです」

「そんなの統一性がなくなるじゃん」

「そういう問題じやないとと思うけど」

「知らないって怖いわよね……」

「もうこいつについて真剣に考えるのはやめよう☆頭おかしくなるわ」

目頭を押さえた佐藤が川島さんに向かって手を振る、ひでえ言われようだ。

「それで、このぴにや美とかぴにや兵衛とかつて何？」

「新キャラです、ピンクのぴにやと黒いぴにや」

「声は誰がやるんだよ☆」

「そろそろ18時ですよね、捕まえに行きますか」

「え？ 何？」

「だから、声優捕まえに行きますかつて」

「は？」

「鍍金君、あなたまさか……社員を使うつもり!?」

「まあ素人ばっかりのアニメにプロの声優使つても面白くないでしょ。ヘレン、ぴにや着て」

俺の魂胆に気づいてドン引きしているメンバーを尻目に、ヘレンはいそいそとぴにやを着込んだ。

「また執行役員に怒られますよ……」

「なにが？ もう終業時間ですよね？ 課外活動ですよ」

「いや……もう少し根回しどか」

「根回ししたら駄目つて言われますよね？」

「確信犯じやねえか☆はあともう知らねえかんな」

そうして部屋を飛び出した我らクルーは、まず総務部を襲撃した。

「皆様、お仕事お疲れ様でーす!!」

「新入社員諸君！ 励んどるかつ☆」

「ぴにゃー」

「あのつ、すいません、すいません……」

部署内は我々の乱入でざわついているが、役職クラスはなるべく顔を下げてやり過ごそうとしている。

どうも社内の人たちは我々が常にカメラを回し続けていると思つているらしい、今も回してるけど別に使わないぞ、録画はしてるけど。

「で、誰を連れてくるの？」

「武内弟」

その瞬間部署内の全員の視線が、新入社員の武内君に向いた。

「武内君！仕事の時間は終わりだぞ、こちらに来て親交を深めようじゃないか☆」

「おや、ほんとだあ、もう6時過ぎじやない！まさか入社早々残業なのがしら？」

「うう……働き方改革う……ばんざーい」

奥で課長に呼ばれた武内君が、何やら耳打ちされ、肩をぽんと叩かれてからこちらにやつてきた。

「あの、なんですか？」

「ハイパームディアクリエイター事業部の課外活動に参加してくれないか？」

「我々は若い力を求めている☆」

「すいません……お話だけでも……」

「困るんですけど、これからまだ仕事が……」

課長席を見ると、課長はうつむいたままこちらに力なく手を振つていた。

連れてつてもよさそうだな。

「まあまあ、腹を割つて話そうじゃないか」

「いや、そんな」

「腹を割つて話そう☆」

「いや……」

「お邪魔しました～」

「ぴにやー」

我々は次に、アイドル事業部へと足を進めた。  
目標は事務員の千川ちひろだ。

「お疲れ様です、千川さんいますか？」

「はい？なんですか？」

「ちひろさん、ちょっと動画に協力してもらえません？」

「ははっ、嫌です」

鼻で笑われてしまった。

ハイパー・メディアクリエイター事業部とアイドル事業部は仲は悪くないが、なかなか因縁浅からぬところがあるからな。

「男紹介しますよ」

「はあ？」

俺が小声で言うと、ちつひは眉をひそめて首を傾げた。

「高身長強面イケメンで、バリトンボイスで、今年入社で将来性抜群ですよ」

俺がちよいちよいと入り口を指さすと、そこには首の後ろに手を当てた武内が立っている。

「ツーショットチャンスは？」

「あるある。社会に不慣れな彼を、大人のお姉さんとして優しく導いてあげてくださいよ」

「部長！」

今のは聞いていた今西部長は、うつむいたまま力なく手を振った。

二人を連れたまま部屋に戻り、早速合同ミーティングだ！

「お二人には、声優をやつていただきます」

「せ、声優ですか……」

「そんなの素人にできるんですか？」

怯える武内君と、平気な顔のちつひ、我々に対する経験の差が如実に出てるな。

「全員声優素人なので逆に浮くことはないと私は思います」

「そんなもんですか？」

「そうです、のちのち懇切丁寧に演技指導するのでご心配なく！」

具体的には、俺がしばらく声優学校に通つて指導のノウハウを盗んでくる予定だ。

「それと、これって残業扱いになるんですか？」

「実は美城執行役員の許可がまだ出てないので、とりあえずお二人には私のポケットマネーから寸志を出します」

「え、それっていいんですか？」

「いいのよ、貰つときなさい。この人達めちゃくちゃ稼いでるんだから」

ら

見たことないような菩薩顔のちつひが、不安そうな武内君に先輩風を吹かしている。

もうロツクオン済みなのか、目の奥がギラついてるぜ。

「稼いでんのこいつだけだつて☆」

「ぴにやのロイヤリティで、私達とは年収の桁が違うわよね」

「私もウサミングツズが売れたりしないかなあ……」

「ぴにやあ……」

新入社員の前で生臭い話をするなよ。

とにかくこの日は軽い顔合わせだけということで、早々に皆で会社の近くの超鳥貴族へと繰り出した。

「僕は本当はアイドル事業部に行きたかったんですけど……」

「そ、う、なん、だ、う。武内君、私、アイドル事業部の事務やつてるよ。色々教えてあげようか?」

武内君の隣の席に陣取った千川ちひろは、上手に彼からパーソナルな話を聞き出し、早々に連絡先まで交換していた。

馬に蹴られたくなきや放つておいてやればいいのに、わざわざそこに絡んでいくのがうちのタレントたちだ。

「ハイパー・メディアクリエイター事業部じや駄目なのかよ☆」

「打診すらなかつたわよね」

「隔離施設だからな」

「ほんとに誰も近寄らないものね」

「廊下で他の社員さんに距離取られるんですよ」

ちつひが武内君に見えない位置から殺意の視線を向けてきているが、こいつらは全くお構いなしだ。

「郵便室にインドネシアの土産持つてった時も『これビデオに映りますか?』ってゴミ箱で顔面ガードされたからな☆」「すっぴんだつたんじやない?」

「私達も結構すっぴんで動画撮つてるのにね」

「そ、ういえばナナも最近はあんまり気にならなくなつてきました……」

「あの、皆さん……化粧してなくてもお綺麗ですよね」

ちよつと酔つ払つて顔を赤くした武内君が、照れながらもうちのメンツを褒めた。

「やーだー☆もうこの子つたら!」

「可愛いこと言うわね~もつと飲む?」

「えへ、えへへ……」

佐藤と川島さんははしゃぎ、ウサミンはつま先をくねくねさせながら喜んでいる。

ヘレンは我関せずといった様子だ。

それを横目で見ていたちよは武内君の手に人差し指でちよいと触れ、彼の耳に顔を近づけて話す。

「武内君、あんまりこの人達にそういう事言わないほうがいいわよ」「え?」

「調子に乗るから」

「は、はあ……」

「ほんとよ」

ちよひの言うとおりだ。

調子に乗った佐藤は機嫌よく笑いながら注文ボタンを押して、田酒をカパツと飲み干した。

「はあとはまだまだティーン・エイジャーのハアトだぞ！お姉さん！  
美少年持つてきてつ☆」

「17歳のナナにはモヒカン娘を！」

「あ、私は豚平焼き」

ティーン・エイジャーが酒を飲むなよ。

「飲みすぎるなよ～あんまり会社をドヤ代わりに使うなって総務から  
通達来てるからな」

「……会社は一体私達のことを何だと思ってるのかしら？」

川島さんは少し不機嫌そうに、4杯目の赤ワインを飲み干したの  
だった。

## 第12話 ミニアニ大作戦 中編

4月入社の新社会人たちが胸を踊らせる、大型連休ゴールデンウイーク。

しかし芸能界は、そんなものとは全くの無縁なのであつた。

新入社員達は毎日毎日休日返上で挨拶回りに付き合わされ、タレント達は特番で大忙し。

そして俺は動画編集の合間に縫つて、必死で自主制作アニメの準備をしていた。

「天領さん！どうしてなの!? 養成所を辞めるつて……」

声優養成所のおばさん教師が、ビルから出していく俺に追いすがつてくる。

「だいたいわかつたんで、もういいんです」

「あなたならすぐにでも声優としてデビューできるわよ！ そりや歌は歌えないだろうけど……」

このおばさん、教え方は上手いが、いつも1言多いのだった。

「ここに来たのも社会勉強のためなので、デビューとかは考えてないんです。歌も関係ありません」

「みんなデビューを目指してここへ来るのよ？ ありえないほど音痴なことをそんなに気にしてるの!?」

「いや別に……音痴は関係ありません」

「音痴な声優だつているわ！ そりや誰もあなたほど酷くはないけど……でも自信を持つて!!」

「違いますって、歌は関係ないんです」

「たしかにあなたが歌うと誰かが体調不良になつたり、カラスが集

まつてきたり、急に雷が鳴り出したりするけど、誰もそんな事気にしてないわ！声優に必要なのは顔と声よ！」

「帰らせてもらいます！」

俺は都合3週間で声優養成所を自主卒業した。

声優としてのテクニックというよりは、先生の教える方のテクニックを盗んでいたので結構時間がかかったのだ。

動画の方はもう6話分完成していて、後は本編の残り半分と、オープニングとエンディングを曲に合わせて作るだけだ。

ここまで順風満帆だ。

そしてうち同様に、本家ぴにやこちら太アニメも快調に制作が進んでるらしい。

この間本家アニメのCM撮りの仕事に呼ばれて行つたとき、こそつと台本を見せてもらつた。

なにやら教育番組のような、毒にも薬にもならない内容だつた。これではつまらない。

スーパーバード版のアニメは、もっと過激で、子供も大人も振り落とすぐらいの内容にしよう！

俺はそう決意を固めたのだつた。

「武内くん、6時だよお～」

「迎えに来たわよ～ん」

「ひつひつひ☆おい部活やらねえかあ」

「すいません……ほんとすいません……」

俺たちは週に3回ぐらいのペースで武内君とちつひを拉致していた。

うちのメンバーも含めて根本的に声が出ていなかつたり、棒読みだつたりするので色々と指導をしているのだ。

トレーニングやエチュードを使っての演技指導なんかをしたりし

て、一步づつ地力を上げていっている。

「部長……」

「ああ、すまないな武内。うちにもっと力があればあいつらにお前を差し出すような真似は……」

「そんな、僕はこれもいい経験だと思っています」

「すまない……行つてこい」

「はいっ！」

ギヤングみたいな扱われ方に若干不安を感じるが……まあ人員を勝手に使わせてもらつてるのは間違いないので、仕方がないのかかもしれない。

しかし、稼ぎ頭のはずなのに扱いがひどい。

いつか会社の人が我々のビデオに笑顔で出てくれる日は来るのだろうか……

――――――――――――

「その時、空に浮かんだ神の身体から、4本の『オールド・エツケザックス』が落ちてきました。王を決める選定の剣です」

「うおーっ!! オールド・エツケザックスッケだー!! 全部ボクのものだー!!

「きやつ！」

「ひいっ！」

「うおっ！」

「びにやこら太はその場にいた他の3人を押しのけ、すべてのオール

ド・エツケザックスをその手に收めました」

「へつへつへつ……<sup>3</sup> 凸さいだいきょうか一本ぐらいじや足しにもなんないけど、あ

るとないとじや大違いだ……」

「びにや……」

「貴様……」

「許さないぞ☆」

「他の王子、王女たちは怒りました。力を合わせてここまでやつてき

たうちの一人が、欲に溺れて裏切ったからです」

「許さなければどうだ！ボクは王になる！武器の力にばかり頼つてい

たお前達がこのボ微課金マグナマンクに！勝てるわけがないだろう！」

「ぴにやこら太の瞳は黒く淀んでいました。我欲に飲み込まれたその姿に、清き翠の王子と呼ばれた面影はどこにもありません」

「ぴにや、さようなら」

「ぴにや美は青く輝く剣を抜きました、そう、彼女は完成ヴァルナマンみぞくせいさいきょうだつたのです」

「成敗するぜ」

「ぴにや兵衛は濃紫の短剣を構えました、そう、彼は完成ハーデスマンやみぞくせいさいきょうだつたのです」

「ぶつたおす☆」

「しゆがーはあとは竜の大剣を担ぎました、そう、彼女は完成マツチヨマンつちぞくせいさいきょうだつたのです」

「かかつてこいや、アバズレ童貞びびかきんどもがあー!! オツケを持つたマグナ戦士マグナセイシが負けるかよお!!」

「今ここに、真の王を決める最終決戦が始まったのです」

――――――――――――

第3話 ぴにやンブルーファンタジーの台本の読みあわせ中に、武内君がぽつりと漏らした。

「この話……いや、このアニメ自体なんですが、ぴにやファンが怒りませんか？」

「なんで？」

「ちょっと、ぴにやのイメージとか離れすぎていると思うんですが……」

「ぴにゃのイメージって言つても……スーパーバードのぴにゃと、会社の売りたいぴにやつてほとんど別物だからねえ」

会社の売りたいぴにやは緑のタイツにもならないし、酒も飲まないらしい。

森の妖精なんだそうだ。

なんだそりや。

ちょっとムツとしたので、俺はアニメの中でぴにやをずんだ餅の妖精ということにした。

ピンクぴにやは桜餅の妖精。

ブラックぴにやはピータンの妖精だ。

「アニメーションはもの凄く凝つっていて素晴らしいんですが……毎回ぴにやが色々な形で酷い目にあうのがかわいそうなんですよ。もちろんぴにやも悪いことを沢山するんですけど……」

「ていうか、全般的にものすごく不謹慎ですよ……」

ちつひも武内君の肩を持つ。

「そうかな？まあ基本ぴにやはド畜生キャラにしてるからかな」

「自分の母親にオレオレ詐欺を仕掛ける話とかもそうですけど……」

「あれはひどいわね」

「特にこの4話予定の、契約更改で美城執行役員に『マスコットに契約金は出ない』って言われて勝手にU t u b e r デビューして小遣い稼ぎしちゃう話、これはまずいですよ……」

「でも面白くない？武内はクスリともしなかつた？」

「面白いのは面白いんですけど。こう、なんていうか……」

「まあ武内君、私達が何を言つたつてしようがないじゃない」

「そうですが……」

「時にはこういう変な人の意味不明な要求を淡々と熟す事も必要なのよ、芸能界ではね」

「そういう……ものですか」

ひでえ言われようだ。

ちつひは言いたい放題言つたあげく『安くて美味しい店を教えてあげようか?』と武内君を誘惑して連れて帰つてしまつた。  
あの二人、上手くいつてるんだろうか……

杞憂だつた。

6月にまた2週間ほど海外ロケに行つて疲労困憊で帰つてきた俺たちに、笑顔のちつひと苦笑いの武内君が交際を報告してくれた。手が早すぎる。

これからは彼女の事をスローハンドと呼ぼうと思う。

.....

スーパーバード関連の掲示板まとめ

【悲報】U t u b e rさん、自分のストーカーにストーカー対策を教わつてしまふ

- 1 名無しの視聴者  
魅力溢れるあなた  
ストーカー対策、してますか?  
今日は本物のストーカーを4人招いて徹底検証  
本当に効果のあるストーカー対策プロの技とは?  
←以下リンク先
- 2 名無しの視聴者  
真の博愛主義者

16 名無しの視聴者

ストーカー二コニコで肩組んでて草

22 名無しの視聴者

「曰「こうから私のことをストーキングしてる人がいるそなうなので、今日はそのプロの方に話を聞くことにしました」メンタル強すぎない?」

57 名無しの視聴者

またこいつか、売名だろ

134 名無しの視聴者

割と内容しつかりしててほんと草

13 名無しの視聴者  
好感度しか稼げない男

66 名無しの視聴者

「これでガラスの音を集音できます」

つて普通にレーザー盗聴器出してたけどガチの人達じやん、逃げて

156 名無しの視聴者

ストーキングしどきやよかつた……

【超絶朗報】U t u b e rさん、脱いでしまう

1 名無しの視聴者

今週は有名U t u b e rスーパーバードの寒中水泳企画に密着取

←以下リンク先  
プロデューサーまで服を脱いで海へ入り、一年の健康を願った

2 名無しの視聴者

## 16 名無しの視聴者

45 名無しの視聴者  
昼休みに会社のモニターで見てたら上司どころか隣の部屋の部長まで見に来た

48 名無しの視聴者

卷之三

想像したら草

## 55 名無しの視聴者

78 名無しの視聴者

若干腹ブニツてんのがマジでエロい

170 名無しの視聴者 動画見ながら○○○○捲るわ

## 99 名無しの視聴者

103 名無しの視聴者

△△99

死にたくなるからやめてくれ

【悲報】U t u b e rさん、インドでお尋ね者

1 名無しの視聴者

現地警察の捜査によると、厨房から出火したゴアの飲食店から日本人男性がインド人女性3人を救出したと見られています。

男性は右肩にカメラを担いだまま逆の肩に女性を担いで救出しており、現地では「スーパーマン」と呼ばれているそうです。

男性はその後連れの女性と共に現場を立ち去っており、インド政府は男性の情報を求めていません。

←以下リンク先

2 名無しの視聴者

ニュースで映像見たけど完全にメツキだつたわ。

3 3 名無しの視聴者

撮る方と撮られる方を致命的に間違えた男

1 3 4 名無しの視聴者

人を笑顔にしかできない男

3 8 2 名無しの視聴者

割とマジで凄くて草

4 名無しの視聴者

なんでカメラ降ろさないんだ？

8 名無しの視聴者

>>>4

撮れ高が欲しいからだろ

9 9 名無しの視聴者  
かつこええやん

198 名無しの視聴者  
映画みたい

153 名無しの視聴者

これも動画にならないのかな、最近インドネシア行つてたけどその  
動画も出してないし

## 第13話 ミニアニ大作戦 後編

2013年の7月。

夏の甲子園の前哨戦とも言える全国男子高校生野球大会が終わつて早々、俺たちはイスラエルに飛んだ。

びにやこら太のアニメ放送に合わせた自主制作アニメは海外からアップロードし、美城執行役員に怒られるのを避ける形となつた。

とはいえ1クール分丸々イスラエルに滞在するわけにもいかない。

1ヶ月ほどで用事を済ませた我々は、ロンドンへと飛んだ。

狙いはドラムンベースの変化球、リキッドファンクである。

とはいえロンドンは音楽の都。

我らクルーはできる限りの人物にコンタクトを取り、ここで大いにアルバムの曲数を稼ぐことになる。

そうしてTVアニメの1クール分を丸々海外で過ごした我々は、秋の訪れとともに羽田空港へと凱旋を果たしたのだつた。

120

そして帰つてきたその日、俺は荷物を解くこともなく美城執行役員に呼び出されていた。

「やつてくれたな」

「すいません、ここまで大事になるとは……処分は如何様にも受けます」

「処分? できると思つてるのか?」

俺を鋭く睨みつけていた美城執行役員は、やれやれといった様子で眉間の皺を揉んだ。

「美城執行役員が望まれるなら、辞表を出します」

「はつ……バカバカしい。君の作ったふざけたアニメの影響を本当にわかってるのか?」

「なんか人気だなあ、と……」

「美城の株は過去最高額でストップ高だ。経済誌のフェイブスは読んでいるか?」

「いえ、寡聞にして……プレイヤー誌とギターマガジンなら読んでもすけど」

「世界一有名な経済誌なのだがな……まあいい、君のアニメの話がアメリカのそれに載つてな。公式のアニメじゃないぞ、君が作ったあのふざけたアニメだ」

「はい……」

美城執行役員は机からキャビンを取り出し、震える手で火を付けた。

「今やびにやこら太は、世界のびにやこら太だ」

だいぶ疲れている様子だ、吐き出す煙にも元氣がない。

「そりなんですか？実感はありませんが」

「君に実感があろうがなかろうが、事態は動いている。私は常務に上がることになつた」

「ええ!?おめでとうございます!」

いくら執行役員が直系の美城一族とはいえ、ここまで早く出世するのは普通じやないだろう。

「ニューヨークへ行く。あちらにも我が社の窓口はあるが、あまりに規模が小さいのでな。行つて事業を拡大し、ぴにやこら太を本格的に英語圏に売り込むことになつた」

「そう……ですか」

彼女はふつ、とシニカルな笑みを見せ、赤いルージュの唇から薄く

煙を吐き出した。

「良かつたな、君はしばらくフリーだ。私が戻るまでは、何かあれば今西部長に相談したまえ」

「いや、そんな……」

「……下がつてよし」

力ない彼女の言葉に見送られ、俺は美城常務の部屋を後にした。常務と俺は都合一年ちょっとの関係だったが、なんだか少しだけ寂しい気持ちになつたよ。

1週間の完全休養の後。

ハイパー・メディアクリエイター事業部事務室に、俺とメンバー達は集まつていた。

「で、なんでこんなことになつたんだよ☆再生数爆上がりだなとは思つてたけど、ずっと海外いたからマイチわかんないんだよな。英語できないしさ」

「なんかゲーム配信者のSamuraisってやつと、女歌手のジャスティン・バービーってのがうちの自主制作アニメを『覇権アニメだ』つて言い出してバズつたらしい」

「へえー」

「そのうち10話のジュリ扇ダンスを外人がまねしだして『あの緑のブサイクはなんなんだ』って話題になつて、有名な雑誌でぴにやが特集されたそうだ」

「ラツキーですね〜」

「そんなうまい話があるのかしら?」

ぴにや大出世のあまりのトントン拍子ぶりに、川島さんもさすがに思案顔だ。

「現に上司が常務にまでなつちやつてんだから、これが現実なんだよ」

そう、これが現実。

売れるも八卦、売れぬも八卦なのだ。

「でもはあとらは出世してないじやん☆」

「あなた達はタレントじやないですか。私はハイパームディアクリエイター事業部の長ですから」

会社的にはヒラ社員だがな。

「下に四人しかいない裸の王様じやねーか☆」

「この暗くて狭くて不便な王宮にも、もう慣れちゃつたわね……」

我々ハイパームディアクリエイター事業部の部屋は美城芸能ビルB2Fの奥部屋だ。

災害備蓄用の物資や、書類の収納部屋に囲まれて埃っぽいのだが、その分何をやつても誰からも文句は言われない立地だつた。

「まあまあ、その代わりこの部屋はサンダーかけても塗装したりしても文句言われないじやないですか？」

「周りの部屋全部物置だものね……」

このあまりにプレミアムな環境に、さすがのヘレンもうんざり顔だ。これだけ美城に貢献したんだから、もつといい部屋くれてもいいのに。

いや駄目か、色んな人の面子潰しちゃつたからな。

「別に工作とかがやりたいってわけじやないんだけど……」

「まあまあまあ、今日のところは楽しい鍋パーティーなわけですから」

肉体労働が嫌いな川島さんがブルーになり始めて、ちょっとびり暗い雰囲気になってしまったが……

今日の企画は食欲の秋に嬉しい鍋料理の企画なのだ、終わる頃にはみんな笑顔になってるだろう。

「そうですよ、瑞樹さん、そんな暗い顔しないでください」

「ていうかこの部屋でやつていいのかよ、火災報知器とか鳴るんじゃないか？」

「ちゃんと届け出だしてますから」

怒られすぎて色々と手続きを覚えてしまったからな、このビルの施設に一番詳しいヒラ社員は俺だろう。

「そういうところだけは用意周到なんだよな☆」

「一応闇鍋つて企画だけど、変な物入れられたら嫌だから全員の具材チェックしますんで」

「そんな変なもの持つてくる人いないわよ」

「失礼しちゃうわ」

ほんとかなあ。

佐藤やウサミンあたりあやしいぞ。

「まあまあまあ、じゃあサクッといきましょか。1番、川島瑞樹のチョイス！」

「私はこれ、油かすね。実家から送つてもらつたの」

川島さんはダツフルバツグから、お麩だか干し椎茸だかわからぬようなもののパックを取り出した。

懐かしいな、俺は昔よく食べた。

「これなあに☆」

「見たことありませんね～」

「お麩かしら？」

「これは関西の名物で、ホルモンから油を抜いたあの物ですよ。水を吸うとくにゅくにゅカリカリの不思議な食感になるんです」

「へえ～☆」

「鍍金君詳しいわね～食べたことがあるの？」

知つてている人間がいて川島さんは嬉しそうだ。

「昔大阪の女のヒモだつたんで」

「ありやりや……」

「そういうのダメですよ～コンプラですコンプラ」

「コメントしづらいわよ」

軽く流されてしまった。

彼女達ももう多少の逆セクハラでは動じなくなつてきているのだと、確かな成長を実感した俺だつた。

「じゃあ2番、ウサミンのチョイス！」

「えへへ、ナナはウサミン星名産のイワシで作ったつみれです」

つみれの入つたタッパーをトートバッグから取り出すウサミン。

「なめろうじゃなくてつみれなのね」

「作り方はほとんど変わらないんですけどね～」

「ナナ先輩らしい渋いチョイス☆」

「そのままでも、ちよつとお醤油垂らしたらお酒に合いそうね～」

川島さんは持参したマイ黒霧島を、いそいそとダッフルバッグから

取り出した。

氷も買ってきてあつて準備万端だ。

「それでは3番、ヘレンのチョイス！」

「これ、秋田の親戚から送つてもらつたんだけど……きりたんぽ」

ヘレンが持つてきたのは秋田名物きりたんぽだ。  
パック入りのでかいうまい棒にも見える。

「これは美味しいやつ☆」

「いいわね♪」

「食べたことないんですけど、材料はご飯なんですつけ？」

「味付けしてない五平餅みたいなもんだよ」

「ああ、なるほど♪」

ここまでラインナップで安心しきっていた俺は、気分良くカメラの後ろ側で自分の飲む梅酒の準備なんかをやつていた。

「最後に4番、しゅがーはあとのチョイス！」

「はあとはこれ☆」

「ん？ なんだこれ」

自信満々の佐藤が取り出したのは、ラップにくるまれた小麦粉の塊  
みたいなものだつた。

「こつち来てイタリアンの店で修行してる同級生にパイ生地練つても  
らつたんだ」

パイ生地!?

ちゃんこ鍋に!?

「はあ!? バカかお前、鍋だぞ鍋!」

「ほら、グラタンとかの上にパイでドーム作るじゃん、あんな風にさ  
☆」

「あれはオーブンで上から焼くからああやつてパリツとなんだよ。ど  
うすんだ鍋の上に貼つて、下からの蒸氣でシナシナになるだけじや  
ねえか」

「じゃあ上からバーナーなんかで焼けばいいでしょ☆」

「よしんばバーナーで焼いてパリパリっとさせたところで、お前それ  
ちゃんこ鍋の中に突き落として食つて美味しいと思うのか?」

「美味しいかもしれないじゃん」

「じゃあお前の分にだけ切り餅みてえにパイ生地切り分けて入れてや  
るか? 中でホロホロホロ崩れてパン粥みたいになるぞ。お前そ  
れ全部食えよ」

「うるさいな! はあとは良かれと思つてパイ持つてきたんだろー!! ど  
うせ誰もオシャレな具材なんか持つてこないと思つたから、朝っぱら  
から新宿まで行つて友達叩き起こしてパイ練つて貰つてきたんじや  
んか!!」

佐藤はムキになつて怒つているが、さすがにこれはない。

「お前……鍋つて言つたろうが! 間鍋つて! せめて鍋に入れて原型が  
残るものにしろよ!!」

「ま、まあまあ鍍金君もはあとちゃんと落ち着いて」

ウサミンが柔らかく俺と佐藤の間に入つてくれて、熱くなつていた  
俺と佐藤もちよつとだけ冷静になれた。

癒やしのウサミンだ、ぴにやこら太じやなくてウサミン星のUN  
ちゃんとかにしておけばよかつたか。

いや、それはないな。

「パイはパイで作りましょ」

ヘレンはそそくさとパイ生地をどこかへ持つていった。

「そういうえばプロデューサーは何を持ってきたの？」

「俺？シャウエッセン。好きだから箱で買ってきた」

「箱で!?」

「箱で買う人初めて見た！」

「お前パイ生地バカにできねーぞ☆」

「あは、あはは……ソ、ソーセージのパイ包みも作りましょうか……」

俺の本気チヨイスはあまりメンバーにはウケなかつたようだ、シャウエッセン、俺はいくらでも食えるのにな……

もしかして、俺も佐藤と同レベルなのかな？

ウサミンの苦笑いが心に鈍く響いた。

.....

おまけ

ぴにゃこら太 THE ANIMATION 第1話 「地獄から  
来た男」

346, 114, 514回視聴

――――――――――

M i s h i r o I d o l

2013/07/11 に公開

2013年初頭、我々スーパー・バードはぴにゃこら太のTVアニメ  
企画からハブられてしまつた

企画への参加はもちろん、声優としての出演までをも無下に断られ  
た我々は、静かに復讐を誓つたのだつた

というわけで勝手に自主制作でぴにゃこら太のアニメを作りました

た  
全12話で毎週更新されるよ！  
楽しんでね！

あらすじ

新宿で当たり屋として生計をたてていたぴにゃこら太の生活は、ある日1台の黒いフェアレディZにぶつかった時から激変した。

淫魔のZと呼ばれるその車にどうしようもなく惹かれていくぴにゃこら太は、父親の形見のバブ2に跨り、夜な夜な危険な街へと繰り出していく……

企画 作画 脚本 編集 メツキ

音楽 メツキの母

OP曲 Al wi

ED曲 ??????

しゅがあはあと役 佐藤心

ウサミン星人役 安部菜々

みじゆき役 川島瑞樹

ヘレン役 ヘレン

ぴにゃこら太役 ヘレン

ぴにゃ美役 チヒーン

ぴにゃ兵衛役 ジヤック

のコメント欄

—————

はすはす 1時間前

イントロ長すぎて歌詞3文字しか入つてないFUNKOTオープニング、狂おしいほど好き。

返信 b56 q2

ぶんちや 1時間前

+はすはす EDのゴリゴリのサイケデリックトランスは歌詞す  
ら入つてないのもつとすこ。

返信 b44 q1

ーーーーーーーーーーーーーー

m e d a k a 4時間前

マジで天領鍍金って何者なんだ?

多才すぎないか?

こんな動く動画一人で描ける人いるか?

返信 b334 q

C a n a l 4時間前

+ m e d a k a これぐらい誰でもかけるし、歌はド下手だし。

返信 b q1266

ーーーーーーーーーーーーーー

665544 6時間前

ぴにや達が封鎖された高速道路を旧都心の爆心地に向けてバイク  
で走っていくとこ、アニメの歴史に残るレベルだと思うんだけど。  
うちずつとあそこばっかりリピートしてみてる。

返信 b648 q4

ーーーーーーーーーーーーーー

b e11 9時間前

C o o l

返信 b89 q1

ーーーーーーーーーーーーーー

コブラ 10時間前

結局考察班（笑）はどうなつたんだろ、ギブアップしたのかなw

返信 b5 q67

r a m d a 6時間前

+コブラ 考察も何も超絶作画のオムニバスギャグアニメ以上のものではないだろ

返信 b79 q5

J o k e r 4時間前

+r a m d a ○イ○か?明らかに全話に根底した闇の深いテーマがあると思うんだが

返信 b3 q670

ナカトミ 12時間前

BBCにスパバ映つた記念w

返信 b902 q24

M a p l e 14時間前

無事に帰国されたようで安心しました。

ロンドンでは1回目が合いましたね、もつとドンドン合わせてくれてもよかつたんですよ?

また海外に行くときはご一緒できるように、パスポートを更新しておかないと。

UK土産のジョニー・ウォーカーを飲みにゆーけー、なんちやつて、ふふ。

また日高屋で日の高いうちから飲みたいですね、私もそのとき

詳細

返信 b45 q7798

ム～ん 11時間前

+M a p l e 本人どころか視聴者ほぼ全員に顔割れてるのに普通にストーカー続けるつて、メンタル強すぎません?

返信 b3345 q2

M o c h i 20 時間前  
返信 ウサミン台詞1行で草  
b 4 4 7 6 q 3 8 5

## 第14話

2013年12月、ニューヨークのサウス・ブロンクスから帰ってきた我々を出迎えてくれたのは、雪の東京だった。

本場のヒップホップ楽曲を手に入れに行つたはずなのに、美城常務の命令で営業ばかりしていた気がする。

その営業もライブとかじやない、トークショーや現地のU tube erとのコラボ動画の撮影とかだ。

英語が喋れるのが俺と川島さんだけだから、俺はほぼ通訳というかMCみたいな事をやらされ続けて、心底疲れ切つていた……。

治安も悪かつたしな、タクシー強盗と空手で戦つたり、銃を突きつけてくるチンピラをカポエラでぶちのめしたり、強引なナンパ女を背負い投げで失神させたりした。

うちの海外口ケはだいたい大波乱が起ころるが、ニューヨークぐらい暴力的な土地はなかつたぞ。

ブロンクス自体恐ろしく治安が悪いっていうのもあるが、とにかく若い黄色人種の男つてのが彼女たちの神経を逆撫でしたらしい。

結局滞在中はずつとトラブルに巻き込まれていた気がする。

そしてもう何度目になるかもわからない海外口ケだったが、とりあえずは今回で最後の口ケとなつた。

そう、ついにアルバムが完成したのだ。

タイトルは伝統に則り『スープーバード』となつた。

もし2作目があるとしたら『スープーバードII』だな。

俺はこのアルバムを2月発売とし、レコ発ライブのスケジュールを組んだ。

個人的なホームであり、スーパーバードも幾度となく世話になつている東京のライブハウス『ワニの酒場』。

そこから出発して福岡から北海道まで回り、またワニの酒場へと帰つてくる予定である。

なんせ最終目標はマジソン・スクエア・ガーデンだ、ガンガン場数

を踏ませていかないと俺のスター育成計画に遅れが出るからな。

ハードだが、俺にとつては楽しい旅になりそうだ。

しかし、そんな楽しいスケジュールを発表した後、部屋の空気は荒れに荒れていた。

「はあ!? レコ発ツアーハードだが、俺にとつては楽しい旅になりそうだ。

「はあ!? レコ発ツアーハードだが、俺にとつては楽しい旅になりそうだ。

海外疲れで荒れたお肌を美容パックに包んだ佐藤が、怒りに任せて机に拳を叩きつけた。

机の上の俺のスマホは2センチも浮き上がり、ブロンクス土産のジグソーパズルのピースもバラバラに飛び散ってしまう。

「ワニの酒場出発のはわかりますけど、その後も各地の小さい箱でライブしまくるんですか!? 身体が持ちませんよ!」

帰国して早々部屋にも戻らず整体に行つたという安部菜々が、顔を真っ青にして俺にすがりついてきた。

「うーん……あなたが私達をどうしたいのかわからないわ」

会社にマツサージチエアを持ち込んだ川島瑞樹は、揉み玉に背中を揉まれたまま少しだけ首を傾げている。

「インディーズバンドじゃあるまいし、アイドルがこんなに数こなして全国を回る必要つてあるのかしら……?」

自分の分身とも言えるぴにやこら太の着ぐるみを丹念にブラッシングをしているヘレンも、このスケジュールには疑問なようだ。

「今のうちだけですよ、こんなのんきなツアーハードだが、俺にとつては楽しい旅になりそうだ。

「今のうちだけですよ、こんなのんきなツアーハードだが、俺にとつては楽しい旅になりそうだ。

から」

「こういう小箱でやるライブも、最終的にはいい思い出になるもんだ。

単純に大きい箱の抑えが難しくて、スケジュールが飛び飛びになつたつてのもあるんだけどな。

俺が気にせず資料をめくつていると、部屋の中が急に静かになつた。

顔を上げると、いつもは文句を言いながらもにこやかなメンバー達が訝しげな目で俺を見ている。

あれ?なんかヤバい雰囲気だぞ。

「ちょっと待て、お前最終的にはあと達をどうしたいんだ?」

ペローンとマスクを剥がして、真剣な顔で佐藤が言つた。  
あつ、やべつ。

「え?」

「ちょっとここらで意識のすり合わせをしとかないとまずいわよね……」

休日のお父さんのように、マッサージチエアから頑なに動こうとしなかつた川島さんが、すつくと立ち上がる。

今はこの話はまだ早い、なんとか逃げ出さないと。

「え?え?」

「鍍金さん!腹を割つて話しましょー!」

腰を浮かそうとした俺の腕を今にも泣き出しそうな顔のウサミンがつかみ、凄い力でがつちりと固定してしまった。

## 「連行しろ☆」

そうしてあつという間に連れて来られたのは、会社から一駅隣の超鳥貴族。

俺はテーブル席に押し込まれ、横を佐藤と川島さん、前をヘレンとウサミンで固められていた。

「この際ズバリ聞くけど、ああいうスケジュール組んで鍍金君は一体どこを目指してるの？」

「そーそー☆」

運ばれてきた酒にも手を付けず、メンバー達は真剣に俺の顔を見つめている。

「俺個人がつてこと？ スーパーバーがつて……」「スーパーバーボードですよ！」

食い気味に言うウサミンの顔が真剣すぎる。  
これは誤魔化してもいい事なさそうだ……  
俺も年貢の納め時か。

「マジソン・スクエア・ガーデンにお前らを立たせること」

これは俺の一生の、とりあえずの目的もある。

「マジソン・スクエア・ガーデン？ この間ニューヨークで行つたところね」

そう、川島さんが置き引きにあいかけた所だ。

「バスケットボールの試合をやつてたところね。ガイドブックにも歴史

が書いてあつたわよ」

「そう、キヤバは多くないけどコンサート会場としても歴史ある場所なんだ」

伝説の名ライブが数多く行われた聖地だ。

「ていうかあそこつて日本のアイドルがライブするような所じゃないでしょ？」

「その通り」

実際そんなの聞いたことがない、日本のメジャーなロックバンドだつてほとんど立つたことのない会場なんだ。

「じゃあどうするんだよ☆」

「そのために動画をやつてきた、色々やつて日本だけじゃなく世界的にも知名度を上げてきたんだ。これまで海外でスーパーバードを知ってる人は結構いたろ?」

これは非才で卑怯な俺の悪あがきと言つてもいい。

音楽のできない俺は音楽以外の力を使つて、彼女達を音楽家としてあの舞台に立たせようとしてきたのだから。

「で、そこつて、知名度だけで出られるの?」

「わからない、たぶん無理」

これは正直なところだ。

そこらの市民会館じやないんだ、いくら有名になろうとも音楽家として優れていなければ難しいだろう。

そのため、スーパー・バードを音楽家として成長させるために、俺はいい楽曲を国を問わず集めたのだ。

「で、今回のツアーハンマーが知名度以外の力を積み上げる、  
その一步目なんだけど……」

「うーん……」

ウサミンがこれまでに見たことがないぐらい困った顔になつている。

「正直そんな壮大な夢を背負わされてもねえ……」

川島さんも呆れた様子で、前髪を弄っている。

「これ以上過密スケジュールになるの？」

ヘレンでさえ青い顔だ。

「はあとからは別にそんなとこ出たくないぞ☆」

そして佐藤は、はつきりそう言った。  
言われてしまつた。

こうなると、バンドでもアイドルグループでももう駄目だ。

だから俺はなるべく彼女達に悟られないように場数を踏ませ、来たるべき大舞台がやつてくるまで本心を隠しておこうとしたのだが

……

やはり少し性急すぎたようだ。

小目標だったCD発売まではこぎつけたが、大目標の大舞台に至るまでの算段が水の泡だ。

俺はまた、間違えてしまつたのか。

頭が真っ白になつてゐる俺の前で佐藤は腕を組んだまま不機嫌そ  
うに唸り、鶏皮を食べ、ビールを飲んだ。

「じゃあさ、お前個人の目標はなんだよ☆」

「マジソン・スクエア・ガーデンにお前らを立たせること」

「これもまた、偽りなき本心だ。

「一緒にやん☆」

佐藤は困惑した顔で、またビールを飲む。

「鍍金さん、ずっと音楽やりたかったんじゃないですか？自分が立つんじゃなくていいんですか？」

泣きそうな顔をしたウサミンが、俺の瞳を覗き込んで聞く。  
とつさに上手い言葉が出てこず、俺もビールを飲む。  
天でも仰ごうかというときに、壁のポスターが目に入る。  
下町のナポレオンが、浜辺に立っていた。

「あの日のナポレオンを覚えているか？」

すっと言葉が出た。

「ん？」  
「は？」  
「え？」  
「何？」

みんな困惑顔だ。

俺はもう一言だけ足した。

「俺もスーパーバードだということだ」

しばらくの時間が沈黙のまま流れ……

突然ガツン！と俺の右脇腹に佐藤のブローが入った。

「……お前それ、秋月のりつちゃんのパクリじゃねえか！」

そうだった。

「まあまあはあとちゃん……」

佐藤が暴れたせいで溢れたビールを甲斐甲斐しく拭きながら、ウサミンは彼女を抑えてくれた。

「それ、マジソン・スクエア・ガーデンに出るってやつ、最初から考えてたの？」

俺の体を挟んで佐藤を宥めながら、珍しく真顔になつた川島さんが聞く。

「ああ、アイドルだつて武道館に出れるんだ。マジソン・スクエア・ガーデンにだつて出られるはずだ」

反対側で心底不機嫌そうな顔をした佐藤が、俺のほつぺたを強くつねつた。

「ムカつく」

「痛い」

「お前結局こうして聞かなかつたら、理由も言わずにあとらを必要以上にこき使つたんだろーが☆」

「お前らが気づかないうちにステップアップさせて、知らず知らずのうちにスターダムに立たせてる予定だつたんだよ」

「はあとらはお前のあやつり人形かい☆」

「悪かつたつて」

「他に隠してる計画はないんかい☆この際言つちやえよ」

「海外編、映画にしようと思つてる」

「「「映画!」」」

これには一同皆驚いたようだ。

映画といつても、動画が何百時間もあるから勝手に総集編を作つて  
いるだけだがな。

「他に隠してる事は？」

「今のところない」

「もうこういう騙し討ちみたいな事しないなら、はあとは付き合つて  
やつてもいいぞ☆」

「えっ!? マジ! ?」

佐藤は驚く俺の胸ぐらを掴んで言つた。

「お前もスーパーバーダなんだろ☆」

「……ああ」

「遠くまで旅してくんなら、付き合つてやらないと可哀想だからな」

「さ、佐藤〜！」

感極まつて佐藤に抱きつきそうになつた俺のさつきとは逆の左脇  
腹に、ガツンとブローが入つた。

「鍍金君、私達には何もないわけ?」

「なんですかその雰囲気?」

「なんかムカつくんだけど」

俺を見る6つの目は怒りに燃えていた。

そうしてひとしきり皆に謝った後の事だ。

もう騙し討ちのようなプロデュースはしないという事を誓つて皆から許してもらえた俺は、2杯目のお酒を飲みながら質問攻めにあつていた。

「うーん、けつきよく鍛金君の中のアイドルって何なのかしら？今更だけど、私達って曲とか活動とか、およそアイドルらしくないのよね……」

「そもそもアイドル活動自体したことないでしょ☆オーディションとか1回も受けてないしさ」「あっ……た、たしかに……」

ウサミンが川島さんと佐藤の言葉に『今気づいた！』みたいな反応をしているが、一番アイドル志望だつたお前がそれでいいのか。

「アイドルってなんか定義とかあるのか？」

正直なところプロデューサーである俺もよくわかつていいないのだ。我々スーパー・バードは、雰囲気でアイドル活動を行つていると言つてもいいだろう。

「はい？」

「えつとー……？」

「お前アイドルをなんだと思つてるの☆」

ドン引きしているメンバー達の顔を見るに、俺と彼女たちの完全な相互理解はまだまだ遠そうだ。

「ひな壇にうじやうじや座つてやいやいや言つてる、歌うコメディアンだろ」

人んちのテレビで見た、俺は詳しいんだ。

「いやいやいや☆」

「いやでも、最近はそうじやないとも言い切れないっていうか……」

ヘレンは苦々しげな顔でぼんじりを齧る。

アイドル業界にも色々あるらしいな。

「子供の頃に日高舞とか見なかつたの？」

呆れた様子の川島さんが、お手拭きで俺の腕時計の風防を拭きながら聞いてくる。

やめてくれ、インド土産のパチモンタグホイヤーなんだぞ。

「俺はあんまりテレビ見なかつたから。CDは親が持つてたから聴いたよ」

「そうか……ここまで根本的に認識にズレがあるとなあ☆」

「日高舞をほほ知らないとなると……」

765プロの秋月律子もよく日高舞のファンだと言つてたが、どうもアイドルを語る上ではよっぽど重要なアーティストらしい。

「そちらへんがよく分からなかつたから、スーパーバードは動画配信アイドルになつたの？」

「よく分からなかつたのもあるけど、動画配信には未来があると思つたからな。人と同じ事をやっていても大きな成功は見込めない」「まあでも、たしかにタレントとしては大成功してるものね……」

最近地元でも有名になつて親戚からお見合いを勧められたらしいヘレンが、湧き上がるハイボールの炭酸を見つめながら言つた。

「とにかく鍛金はさあ、はあとらを海外に売り出すつもりでいるんだろ？」

モスコミュールを飲み干した佐藤が、グラスを置きながら話を簡潔すぎるぐらい簡潔にまとめた。

「まあ、今はそういう認識でいいか……」

「それより、ナナはまだ自分の事をアイドルだと思つていてもいいのでしようか……？」

生中のグラスを空けたウサミンが、不安そうに上目遣いで聞く。悪いが気の持ちようだとしか言えそうにない。

「いいんじゃない？会社はまだアイドルとして扱つてくれてるわよ」

飲み終えたウーロンハイのグラスを弄んでいた川島さんが雑に慰めているが、うちはアイドル事業部を追い出されてるんだよなあ。

「自信を持つて、あなたはまだまだ歌つて踊れる声優アイドルよ」

ヘレンはいいやつなので、そう言いながらウサミンの肩を抱いて残り少ないハイボールをあおったのだつた。

「とにかく、最終目標も共有できただことだし、ここで再びスーパーードの固めの杯といこうか」

場所もたまたまスーパーードの名前の由来の超鳥貴族だし、ちようどいいだろう。

「そうね、今ならナポレオンだつて頼めるわよ」「おおっ！ そうしよう☆」

「店員さん」

酔っぱらいのウサミンは、呼び出しボタンを押さずに歩いていた店員さんを引き留めた。

「はい、なんでしょう？」

「ナポレオンありますか～？」

「ナポレオン？いや、うちあんまり高価なお酒は……いいちこならありますけど」

がーんだな、でもそりやそうか。

チエーンの居酒屋だもんな。

「いいちこね、私達つて、結局いいちこなんだわ」

「瓶一本持つてきて」

「ありがとうございます、いいちこボトルですね」

程なくして出てきた900mlのいいちこの蓋をひねり、5つのグラスに溢れるほど注ぐ。

それぞれが右手に持ち、5人で杯を合わせた。

「鍍金、音頭取れよ☆」

やっぱ酒で契りといえども桃園の誓いだよな。

「我ら五人、生まれた場所は違えども……」

「それ2回目！」

佐藤の張り手が、丸まつた背中にやけに染みた。

## 第15話 ライヴ・イン・ジャパン

「これ、やばくね？」

「ワニの酒場崩壊しない？この人数だと」

「その前に客が圧死しちゃうわよ」

「やばいですよ駅まで列が続いてましたよ。集まりすぎると暴動が起きるんじや？」

レコ発ツアーホームであるライブハウス『ワニの酒場』の近辺は押しかけたファンで超満員だった。

誰が相手だろうと自分流を貫く店主の婆さんは、今回も俺にチケットを100枚渡しただけ。

その100人だって入り切らないぐらいの箱なのに、それに加えてチケットの当てもない当日客も1000人近く押し寄せてる。

ていうかこうなる事を恐れて今日のライブはツアーファン情報にも乗せてないんだけど、話聞いてない婆さんがライブ予定にでかでかと『スーパーバード』って書いていたからバレたんだ。

マジで勘弁してくれよ。

漏れた音でも聴きたいって、そんな熱心な信者がつくほどCD売れてたか？

なんせ初回限定版CDの在庫がまだ残つてんだよなあ……

当たり前だけど、今求められているのはアイドルとしてのスーパー・バードじゃなくて、U t u b e r としてのスーパーバードなんだよな。

もちろん俺はうどんを頼まれてそばを出すほどひねくれてない、スーパーバードのステージは歌5割しゃべくり5割だ。

ミュージシャンとして人を感動させるステージは……のちのちの課題だな。

今はとにかく、このレコ発ツアーホームでスーパーバードに場数を踏ませまくることだけが目標だ。

「そんでそのインドネシア人が言つたわけ☆」

「『これつてジャパニーズAVよね?』ってね」

「日本の事、アニメとエッチなビデオでしか知らないって言つてしま  
たよね♪」

「ぴにゃ♪」

「もちろん今なら、日本といえばぴにゃこら太だと思うわよ」

「世界のぴにゃこら太だぞ☆」

「あの時はインドネシアの人にも『なにこの縁のモンスター?』って言  
われてましたからね♪」

「ぴにゃに歴史ありなんだよなあ☆」

ちよつと不安だつたんだが曲はともかく喋りは順調。

2時間半のうちの半分近くを喋り倒したスーパー・バードに、ほぼ身  
内ばかりとはいえ客達は熱の籠もつた拍手を送つてくれたのだつた。

このツアーは忙しい、昨日は東京、今日も東京、明々後日も東京、そ  
の次の日も東京だ。

東京だけで行き帰り合わせて10回やる。

今日の客は昨日の3倍、しかも身内抜きだ。

ついにアーティストとしての資質が真に試される時が来たんだな。

「もう全員下痢便になつちゃつて☆」

「いやいや、鍍金君だけピンピンしてたでしょ」

『体験してこそ異文化だから』とか言ってヤギ料理をほんとに骨ま  
で食べてたんですけど、現地の人に『その骨は犬も食べないよ』つて  
めちゃくちや止められてましたね♪』

「ぴにゃ♪」

「ヘレンはウイルス性胃腸炎で入院したものね」

「ウンコの話なら無限にあるから終わんねえぞ☆」

杞憂だった。

曲はまあまあ箸休めみたいな扱いだが、U t u b e rとして大合格じゃないだろうか。

満員のファン達がウンコの話で大喜びだ。

ウサミンの地元、ウサミン星こと千葉でもライブをやつた。

抑えられたのは文化会館だが、ほぼトークのライブならちようどいい。

佐藤はなぜか市が宣伝のために持ってきた落花生の着ぐるみを着せられての登場で、ややスベリ気味ながらも会場の歓声は大きかった。

「このサメ食えるから捕まえろって言うんだもん、できねえってそんなことは☆」

「あのガイドさんめちゃくちゃでしたね♪」

「でも鍍金くんは小さいサメ捕まえてたわよね」

「あーあー、やめとけって言つてんのに生きたままのサメのフカヒレに齧りついたやつね☆」

「ガイドさん引いてたわよね」

「正直あれは子供の教育に良くないからカットしてほしいわ」

「あ〜、それ言つちゃつたら絶対カットしないでしようね……鍍金さん人からカットしろって言われると意地でも使うから」

「ひねくれてんだよな☆」

だいぶリズムができてきたようと思う。

歌を一曲減らしてその分トークに振ったのが良かつたんだろうか。やはりトレーニングはしているとはいえ、ライブ一本を通して歌つて踊るにはまだまだ経験が浅いんだろうな。

名古屋に行く前に静岡に寄つた。

小箱に寿司詰めになつたファン達が、2月の寒さを吹き飛ばすような熱気の籠もつた声援を送つてくれる。

なにかに目覚めたのか佐藤が仮装をしたがつたため、急遽うなぎの着ぐるみをレンタルした。

川島さんとウサミンがうなぎとぴにやこら太に挟まれた異様なステージになつたが、観客の熱気は高まるばかりだ。

「拳銃つて初めてみたときは怖かつたわよねえ」

「瑞樹ちゃん腰抜かしてたもの☆」

「いやー、あれは拳銃ごと強盗の腕を蹴り折つた鍍金さんにびっくりしたんだと思いますよー」

「強盗に助け求められてエクソシストみたいな姿勢で逃げてたものね」

「あれほんと、カツトねカツト」

「だからそれ言うと絶対カツトされないんだつて☆」

トークが時間オーバーしてしまつて、予定よりもさらに曲を削つた。

まあいいんだけど、観客もそれでいいのか？

大満足で帰つて行つたから、とりあえず問題ないのかもしれないけど。

その次は名古屋に向かつた。

やはり日本三大都市だ、箱もそことこの大きさ。

なんだか知らんが佐藤は仮装する気満々で、蕎麦屋の格好で味噌煮込みうどんを引っさげて登場。

その雪駄で踊れんのかと聞いても、踊れると言い張るのでもう放つておくことにした。

「イギリスって国は飯がまずかつたねえ☆」

「嘘でしょって思つてたけど、ほんとに美味しくなくて逆にびっくりしたわよね」

「たしかに、文化の違いを思い知りましたよね♪」

「ぴにゃ……」

「え、なに？ ……おい鍍金！ ぴにゃがまだ怒つてんぞ！ お前イワシの頭いっぱい刺さつたパイ食わしたろ！ こいつあれから2日ぐらいビールしか飲まなかつたんだぞ☆」

「あく、あれは氣の毒でしたね、じやんけんで負けて……」

「お前それからもたびたびこいつイジつたろ？ 『おいパイ食わねえか？』つて、2度も食うわけねえだらあんな邪神みてえなパイ☆」「ヘレンは鍍金くんを訴えても勝てるわよ」

佐藤の雪駄はあんまり問題にならなかつた。

予定をぶつちぎつて長々喋りすぎて、ほんの2、3曲しか歌えなかつたからだ。

あつという間に大阪だ。

ここは正真正銘の大箱。

スーパーバードのヘッズ達が沢山集まつてきて、テレビ局の取材も来ていた。

「結局インドはどこまで行つてもカレーなわけ☆あとは中華料理な」「ほんとになんでもカレーにしちやうのよね」

「私あれ、ブーバッポンカレー好きだつた」

「ああ、かに玉カレーですね♪」

「思わずヘレンも普通に喋るぐらい美味しいブーバッポンカレーはたしか、えーっと、チリだつけインドネシアだつけ……」

「タイよ」

「そうそう、タイから逆輸入されてきたカレーなんだよな☆」

「インドつてほんと、サラダ以外は全部カレー味だつた気がするわ」  
「サラダも塩かカレー味だつたろ☆」

歌、歌つたつけ？

9割喋つてた気がする。

お客様は大ウケだつたから良かつたけど、さすがにエンディング  
テーマみたいに1曲歌つてサヨナラは問題だよな。

その後も大阪でもう3回ライブをし、ツアーの合間に一旦東京に  
帰つてきた俺たちは、またいつも部屋に集まつていた。  
美城ビル地下二階、夢と埃の詰まつた鳥の巣だ。

「いやー、大阪は盛り上がつたな♪☆」

大阪土産のお好み焼きせんべいを齧りながら、佐藤は少女のような  
笑顔でそう言つた。

こいつ、一昨日までは粉ものは食い飽きたなんて言つてたくせに。  
まあツアー中はみんな文句ばっかりだつたけど……

海外口ケと一緒に、うちに帰つてきてみれば何でもいい思い出にな  
るものなんだよな。

「そりいえば最終日、実はうちのお母さんも見に来てたのよね」

この部屋に入つてから、マッサージチェアに座つて一步も動かず背  
中を揉まれ続けている川島さんが、どこか遠い目をしながらそんな事  
を言う。

気づかなかつたな、挨拶しておきたかったんだけど。

「えつー・言つてくださいよお、樂屋にも招待したら良かつたじやない  
ですか」

こたつの中でみかんをつまみながらお茶を飲んでいたウサミンも  
びっくりだ。

「いいのよ、ほんとうるさい人なんだから！会つたら疲れちゃうわ」

「おいおい川島さん、そうお母さんを邪険にするなよお！」

「そうだぞ瑞樹ちゃん、せつかくなんだからはあとたちにも会わせ  
なさいよお☆」

だから会わせたくないのよ、と唇を尖らせる川島さんには悪いが、  
次大阪行くときは絶対チケット送りつけてやるからな。

「…………」

その会話を聞いていたヘレンが、心底嫌そうな顔をしてスマート  
フォンをいじり始めた。

誰かにメッセージを送っているようだ。

「どうしたんだよ？」

「うちの母親には、ライブ来るなって言つといたから」

「おいおいどうした宮城はまだまだ先だぞ、俺の方から招待しとくよ」

俺がそう言うと、べつと舌を出してそつぽを向いてしまった。

「ほんとにやめてよね、うちの母さんは普通の人なんだから、スーパー  
バードのカメラには絶対映したくないの。来年の正月に帰る実家が  
なくなつたりしたらどうするのよ！」

「自分の出てるチャンネルをそんな風に言わなくとも……」

まあ今やうちのチャンネルの影響力は大変なことになつてているか  
ら、ヘレンの気持ちもわからぬもないんだけど。

こないだもたまたま立ち寄った和菓子屋で「宣伝してほしい」つて言われて素直に宣伝したら、店のキヤバを遥かに超える客が押しかけて大変なことになつたらしいからな。

力には責任が伴う。

別にそれが音楽の道じやなくたつて、スターにはスターとしての振る舞いがあるつてことだ。

「そういうや、これまでのツアーはトークの比率が多すぎたと思うんだ。もう次のライブではあんなに喋らせないからな」

「えつ、じゃあ他に何やんだよ☆」

「歌だろ歌！」

「ああ……まあ、ねえ、そういうえばレコ発ツアーだつたわね」

マツサージチエアに座りっぱなしの川島さんが端正な口元を少し歪めて苦笑すると、他のみんなも顔を見合させて笑つた。

「いいですか？ 次は絶対喋りすぎは駄目ですからね。横から容赦なくカツトします、佐藤も仮装は禁止！ うちはコミックバンドじゃないんだからな」

「ええ、ぴにやばっかり目立つてズルいぞ！ はあとにもなんか仮装させろよ☆」

「お前はなんでそんなに仮装したいんだよ！」

「スーパーバードがぴにや人気だけのグループだと思われたくないんだよ☆」

「それで仮装か？ 歌と踊りで人気を取ろうつて思わないのか？」

「じゃあ逆に聞くけどさあ、鍍金ははあとたちがほんとに歌と踊りを望まれてると思つてるのかよ☆」「ん……ぐ……」

珍しく、佐藤がもつともなことを言った。  
全くその通りだ。

力には責任が伴う。

スターには、客の求めるものを見せるという責任があるのだ。

「しょうがない、仮装、許可！」

「よっしゃあ！」

佐藤はお好み焼きせんべいを高く掲げて喜んでいるが、最初にお前の望んでたスウェーティーなアイドル像は一体どこへ行つたんだ？妹のよつちやんにウケが取れればなんでもいいのか？

「別に仮装も求められてないと思うんですけど～」

「まあまあ、逆に言えばしてもいいってことでしょ？ 次は奈良だぞ～シカだシカ～☆」

もつともな事を言うウサミンの隣で楽しそうに頭の横で指を出す佐藤には悪いけど、どうせ仮装するならもつと面白い格好してもらおう。

「シカじやねえだろ、奈良だから大仏だろ」

「大仏う？ 大仏はスウェーティーじゃないっしょ」

「ぜつてえ大仏にしてやる」

「ふざけんな！ シカだろシカ☆」

「ぜつてえ大仏にしてやるからな」

「シカだろ☆」

「大仏だ」

「シカだろ☆」

「大仏だ」

「シカだろ？」

「大仏だつて言つてんでしょ」

「どつちでもいいわよ～」

「仮装しないつて考えはないのかしら？」

ぽつりと放たれた、非常にもつともなヘレンの問には、タイミング悪く鳴り響いた内線電話の音に紛れて消えていったのだつた。

おまけ

スーパーばードのtwitterエゴサーチ

( Q スーパーばード )

話題のツイート

最新

アカウント

画像

)

動画

○ めけめけ @

昨日駅から出れなかつたのワニの巣穴のせいか、スーパーばードとかいうU t u b e rがライブやつてたの?ふざけんなよ

( ) 15

→ ←

○

→

○ あやこ @

スーパーばードのチケット一般に出回らなくて最悪つて思つてたけど、チケット持つてる人達も入りきれなくて外にいたしどうなつてたんだろう?

( )

→ ←

♡ 2

→

○ ♡ M I Y U ♡ @

スーパーばードのレコ発ひとライブ目、最高でした。チケットが一般販売されないので厳しいかなと思っていましたけど、やはり最後は助け合いですね。私を客席に見つけたときの鍍金さんの笑顔、写真に撮つておけばよかつたかしら。

( ) 3 3 4

→ ← 2 2 8 5

♡ 6 6 2 7

○ かみかみレモン @

スーパーbaru一発目、たまたまチケット手に入つたから行つて  
きたんだけど、有名なプロデューサーのストーカーが隣にいてび  
つくりしたwステージ脇見える場所だつたんだけど、鍍金がこつち  
見てめちゃくちやビビつた顔してすぐ引っ込んでつたもんwww

( ) → ← 25 ♡ 42

○ひとみ @

スーパーbaruレコ発、行つてきました (\*、ω、\*)  
メンバーはともかく、舞台脇からチラチラ見える鍍金さん、めちゃ  
くちやかっこよかつた (\*、艸、\*)  
やつぱり生で見る鍍金さんは一味違いますね、私実は一度本人  
と会つてるんだけど、笑顔で握手もしてもらつたしこれはもう結婚  
しかないなと思つ (つづきます)

( ) 112 → ← 30234 ♡ 100  
66 → ← 4 ♡ 12

○あやこ @

スーパーbaruの公式垢よりプロデューサーのストーカーの方が  
フォロワー桁違いに多いのほんと草

( ) 2 → ← 4 ♡ 12

○猫ちゃん♡大好き @

スーパーbaruのライブ、客層が最悪でした。必要以上に足を  
出した女ばかりで、もしかして私の彼と何か間違いでもあるか  
と思つてるんじやないかしら?本当に浅はかな女しかいないの  
ね、言つておきますけど、彼はこのツアーガ终わつたら私と実家  
のコンビニを繼ぐんですから。そういう感情は遠慮してください  
ね。

6 ( ) 212 → ← → 61550 ♪ 6244

○ たすけるくん @  
相変わらずスープバーの鍍金四重奏はぶつとんでんな。  
全員顔も職場も割れてるのに全く気にしてないもんな。

( ) 1 → ← → ← 3 ♪ 10

○ Maple @  
スーパーbaruレコ発、ハツとするほど楽しかったです。人が多すぎておおろおろしちゃいましたけど、バーの近くにいけたのでモヒートをモヒット飲もうかななんて楽しみも……最近鍍金さんが  
買つ

たお酒ということで、今日は酒屋でマツカラーンは負からんか?なんて言つてみたり、クーポンで少しだけ負かりました

( ) 22 → ← 10234 ♪ 5066

○ にやんにやんにやん @

ウサミンステージの上でお母さんからお漬物貰つてて草

( ) 56 → ← 389 ♪ 1020

## 第16話

ライブ日程の消化は破竹の勢いで進んだ。

近畿から中国、九州、沖縄、そしてまた同じ道をたどつて今度は東北へ。

もちろんライブばっかりやつてたわけじゃない、動画も撮つて、映画の編集もやって、東京での仕事もこなしている。

忙しくて泣けてくるが、それももう少しで終わりだ。

俺たちは今、ツアーの最後のステージに立つていた。

『帰ってきたぞー！ ワニの酒場ー！』

茄子色のびにやと、鷹のコスプレをしたウサミン、そして太陽の形のフリップを掲げる川島さんに囲まれ、富士山の着ぐるみを着た佐藤がそう叫ぶと、狭い店内から鼓膜が破れんばかりの歓声が返つてくる。

この4ヶ月間ほどんど毎週ステージに立ち続けたスーパーバーデは、しつかりと場馴れしたいっぱしのライブアイドルへと成長していった。

各都道府県ごとにひとつ鉄板ネタを持ち、各地の美味しい飲み屋にも詳しくなり、もうライブの途中で息切れを起こすことなんかない。

今ならもつと大きなステージでの長時間ライブでも、問題なく四人で回しきれることだろう。

『鍍金ー！ さつさと出てこいつて☆』

『鍍金さん！ みんな呼んでますよー！』

いや……五人で、だな。

ステージ裏から満員電車みたいなライブハウスに飛び出し、俺はいきなり客席へとダイブした。

周り中から笑い声と絶叫が響き渡り、誰かに尻を触られた。

富士山になつた佐藤が呆れた顔で回し始めるのを見ながら、客をかき分けるようにしてステージへと戻る。

『なにやつてんだよ☆』  
『はしゃぎすぎよ』

はしゃぎすぎてメンバーには窘められてしまつたが、その後も客席から「こつち来い！」と言われたびに客席へと出ては顔見知りたちにもみくちゃにされ、同窓会みたいなライブを最後まで楽しんだ。最初は揉めたりもしたツアードつたが、終わりよければ全てよしだ。

動画もいっぱい撮れたしな。

そんな長い長いツアーの後のまつたりとした日々の中、以前から進めていた映画の企画に会社からダメ出しがあり、俺たちはアイドル事業部へと呼び出されていた。

採光窓も極小の我らが地下アジトとは違い、大きな窓から陽光がサンサンと差し込む地上30階のこの部屋は開放感に溢れていて広く小綺麗だ。

そんなトレンドイドラマに出てきそうなオフィスの自席で、アイドル事業部の事務員千川ちひろはふんぞり返つてマニキュアを塗りながら我々にとんでもないことを通達したのだった……。

「社長からお達しが出ました。スーパーバードの映画なんですが、ぴにやを出すならば映画館には配給しない、とのことです」

「え、なんで？」

「着ぐるみを半脱ぎにして甲類焼酎をラップ飲みしたり、ラズベガスで取材費を賭けてギャンブルをしたりするぴにやは社の打ち出すイメージにそぐわないそうです」

「ええ～」

そんなこと今更言われても、という感じだ。

初登場の時からうちのチャンネルで焼肉食つて酒飲んでたマスコットキャラだぞ。

「ていうかなんでちつひーがそれを？」

「そうですよ～」

「ま、それはだいたい察しつくけどね……」

「…………」

氣を使つた川島さんがヘレンの肩に手を置くが、彼女は暗い顔で俯いたままだ。

その態度も仕方ないだろう、せつかくの銀幕デビュー作なのに自分のパートが全ボツになるかもしれないんだからな

強心臓のちつひはそんなヘレンを氣にもとめずにピンクのマニキュアにふうつと息を吹きかけ、ちらりとこっちを見た。

部屋の主である今西部長はそっぽを向いたまま背中を丸め、我関せずという様子で島型オフィスの端っこに座っている。

おいおい、どつちが上司なんだか……

「まず私がこの話をしているのは、ライセンス事業部の子達が鍍金さん達の前に出たくないって泣きつかれたからです。ビデオに録られたくないからって」

「あたしらは悪の組織かい☆」

「まあ、しようがないんじやない？　私だって逆の立場だつたら嫌よ」

佐藤は憤慨しているようだが、事実この会社には『スーパーバードお断り』とドアに貼つてある部署があまりにも多い。

昔は無許可でバンバン社員をビデオに出してたからな。

それが縁で結婚した人とかもいるらしいが、我々は披露宴にも呼ばれなかつた。

「あの～、それでぴにやの件は～？」

「えうよ」

「はいはい、ちょっと待ってくださいね」

ちつひはそう言いながら椅子の横に置いていた紙袋を持ち上げ、ドサツと俺たちの前に置いた。

中には分厚い紙封筒がいくつも詰まっているようだ。

「それ、今後のぴにやの企画だそうです」

「企画つて……」

「都の美化促進運動とのコラボ、428<sup>し〇や</sup>区の観光大使への就任、交通系ICカードとのコラボ、クレジットカードのノベルティ化、アニメ映画の第二弾、ドラマ化、舞台化、全てライセンス事業部の取ってきた仕事です」

「それで？ それとスーパーバードの映画ってなんの関係があるのかしら？」

ちよつとだけ声色が刺々しい。

うちの仏の川島さんも会社側のあまりに一方的な言い分にピキピキ来ているようだ。

「だからですね……もうぴにやこら太は、あなたたちだけのものじやないってことですよ。会社には会社として売りたいぴにやこら太像があるんです」

「そんな一方的な……」

「ぴにやを作ったのは鍍金だろ☆」

「そうですよ～」

「はつきり言つて横暴よねえ？」

うちの面々が口々に文句を言うが、暖簾に腕押し、メッセンジャー

に苦情だ。

彼女はケロツとした顔で「しようがないでしょ、私が決めたんじゃないんですし」と、もつともな事を言つて机に肘をついた。  
そうしてスリープに入りかけたパソコンのマウスをちよんとついて、ぽつりとこぼす。

「能力のありすぎる人の悪い癖なんですよね」

その言葉に「どういうこと?」とヘレンが静かに食いつく。

彼女だって、ちつひに噛み付いたつて仕方がないことはわかっているはずだ。

ただ、それでもしないとやりきれない気持ちだつたんだろう。

「やりすぎなんですよ、あなた達。ぴにやこら太を売りすぎて美城芸能の形まで変えちゃつたんですよ」

「…………」

「芸能部門も全体が格下げ扱いで、アイドル事業部も予算減です」

「あ、そりや…………すいません……」

冷たい目線に頭も下がる。

別に俺のせいじゃないけど、実害が出てるなら悪いことしたな。

「まあでも、それでもいいことだつてありましたけどね」

ちつひがニヤツつと笑つて親指で指した先には『武内』と書かれたビジネスノートが置かれた席があつた。

そうか……武内弟、希望通りアイドル事業部に異動できたのか。  
良かつたなあ。

「じゃ、私は仕事があるんで。文句があつたら社長にどうぞ」

話は済んだとばかりにビジネス用の笑顔でそう言つた彼女にしつしつと手を振られ。

すまないね……と背中を丸める今西部長に見送られて、俺達は光溢れるアイドル事業部を後にしたのだつた。

というわけですごすごと地下の薄暗い巣穴へと戻つた俺達は、今後の方針を決める緊急ミーティングを行つていた。

「徹底抗戦だろ☆」

「うーん、まあね、今回はさすがにひどいわ」

「そうですねえ」

「会社っていうのはそういうものとはいえ、実害を被る身としてはあんまりいい気はしないわよね」

みんなはプリプリ怒つているが、俺はなんとなく、ちょっと前から薄々こうなるんじやないかつてことは予想していた。

近頃のびにやこら太人気ははつきり言つて異常だからな。ゲーム化、アニメ化、映画化、漫画化、テレビ出演にミュージカル、そんな数々のメディアミックスを経て、今や日本の一企業のマスコットキャラクターに收まらない世界的な人気を持つていて。

これはマジの話なのだが、美城常務があの豪腕でアメリカにぴにやを売り込みまくつたおかげで、最近は日本といえば寿司とぴにやの国になりつつあるのだ。

近々地球のマークの映画会社の遊園地にもぴにやのアトラクションができるそうだ。

正直、会社としても、日本のエンタメ業界としても正念場なのだ。スーパーバードの映画も時期が違えばこういう扱いはされなかつただろうとも思うが、そんなこと言つてたつて仕方がない。

俺だつて一応大人だ。

なんでもかんでも強情張ればいいわけじやないつてことは知つて

いる。

会社にはこれまでも散々好き勝手やらせてもらつたからな、今は俺が折れるべき場面なのだろう。

「一応、今日は会社の決定に従おうと思います」

「えーっ！ それでいいのかよ☆」

ドン！ とヒートアップして机を拳で叩く佐藤だが、周りのメンバー達はもうちょっと冷静だ。

「といつてもねえ……業務命令だものねえ」「社長に逆らうのはちよつと……ですねえ」

川島さんは渋い顔で首をかしげ、ウサミンは苦笑いで頭をかいている。

まあ、普通に考えて社長に逆らつたっていいことなんかなんにもないからな。

「あなたがいいならそれでいいわ、生身の私の登場場面は増やしてほしいけど」

ヘレンだつて普段よりは気落ちしているようだが、さつきよりだいぶ持ち直したようだつた。

まあ、今のところ映画版だけの話だしな。

だがまあ、映画にしたつてまだやりようはあるんだ、俺に任せておけ！

「ということで、日本での映画公開は諦めます！」

「うーん☆」

「それじゃあどうするんですか？ お蔵入り？」

「それともU tubeで公開するの？」

「うーん、まあU t u b eでもブルーレイとかになるなら……」

違うんだなあ、日本ではつて言つただろ。

「日本が駄目なら……世界に打つて出る！ 我々スーパーバードは、  
ドイツ国際映画祭にエントリーします！」

「ええ!?」

「エントリーって……そんなのできるんですか？」

「劇場公開もしてないのに」

「そうよねえ」

「どうがどつこい！ できるんです！ 誰でも！」

俺は映画の完パケを高らかに掲げ、不敵に笑つた。

「こいつで世界を取つてやる」

ディスクを取り出し、部屋のブルーレイに突っ込んだ。  
シューイイインとディスクが回り、画面が暗くなる。

画面には『S U P E R B I R D』の九文字が映し出され、安っぽい音楽と共ににはにかんだウサミンの自己紹介映像が流れはじめようとしていた。

.....

おまけ

映画『ぴにやこら太 妖精の森の大騒動』 予告編  
4, 5 4 5 回視聴

――――――――――

M i s h i r o G e i n o

2014/04/11 に公開

あのびにやこら太が今度は映画館に登場!?

愉快な森の仲間達の間に、パンドラの箱の謎が迫る!

百万人のニートからブルートフォースアタックをかけられた森の  
サーバーの大ピンチに駆けつけた黒いぴにやとは!?

4月19日全国の映画館で公開予定!

### のコメント欄

-----

もんもん 1時間前

今日見てきましたが、ぴにやがバイクを盗んだり売ブツシヤー人から売上を奪い取つたりする展開はありませんでした。がっかりです。

返信 b44 q30

ロドリゴ 1時間前

+もんもん 人に馬用の興奮剤打つたりはしてなかつた?

返信 b2 q

もんもん 1時間前

+ロドリゴ 薬の類は一切出てきませんでした

返信 b1 q1

-----

ミリシャ 3時間前

見てきたけど、やっぱ普通の3Dアニメだったね。ポジティブな内容で子供は喜んでた

返信 b12 q3

-----

wakasa 6時間前

子供にせがまれて見てきたけど、やっぱり完全にサーバーのぴにやとは別物なんだね、悲しい。

返信 b4 q3

-----

996 9時間前

こんなところにいるわきやないんだけど、一瞬Mapleさんがいかどうか探してしまつた

返信 b99 q60

なんでん 7時間前

+966 仲間がいた

返信 b2 q

—————

おまけ2

スーパーバードのマ○ンクラフト ↗黄金のピラミッドへの道 ↘

Part15

80, 777, 193回視聴

—————

Mishiro Ido1

2014／02／22 に公開

ついに黄金ピラミッド完成!?

ハツカ一が勝手に作った鍍金像の恐るべきクオリティに一同騒然

!

迷子になつたウサミンは無事に帰つてこれるのか!?

のコメント欄

—————

665544 1時間前

マジで鍍金四重士つて何者なの?

普通マイクラのサーバーつてそんな簡単にハッキングできるもの

?

返信 b355 q30

|-|-|-|-|-|-

Kuncha 2時間前

いよいよ四重士鍍金の身内説が出てきたな

返信 b691 q6

まさ 1時間前

+kuncha 少なくとも1人は美城芸能所属つて確定してる

返信 b332 q45

kuncha 1時間前

+まさ マジ!?

返信 b2 q1

|-|-|-|-|-|-

かかち 2時間前

スペバレベルになると凄いスペックでマイ〇ラやってんだろうな

返信 b45 q

|-|-|-|-|-|-

♡M I Y U ♡ 3時間前

骸骨さんとの戦い、素敵でした。

? でもちょっと女のタレントさんとの距離が近いんじゃないかしら

今はスペバも大事な時期ですから、鍍金さんが無自覚に誘惑しては  
かわいそう。

相談ならいつでも乘りますから、電話していくださいね。

あなたに少しでも付き合えるように、私もお酒、飲めるようになり  
詳細

返信 b599 q1023

ゆま 2時間前

+♡M I Y U ♡ なんで鍍金さんはあなたの電話番号知ってるん  
ですか?

返信 b345 q

|-|-|-|-|-|-

猫ちゃん♡大好き 3時間前

ゲームなんて生まれて始めてだけれど、あなたと一緒に遊んでいると思うと楽しいものね。

あなたのパソコンと合わせて買ってみたのだけれど……ゲームのできるパソコンって意外と高いのね。

あなたのパソコンとへ

でもあなたと同じものを使ってると思うと、繋がりを感じる。

なにが困つたことがあつたら、ケーラムでも電話でも、いつでも言つ

文言  
卷之三

返信  
小雪  
b2399  
3時間前  
q1609

十猫ちゃん♡大好き なんで動画で紹介もされてない鍍金のバソ  
コンを知つてるんですかねえ……

通鑑

# ひとみ

## 3 時間前

一緒にケーブル楽しんでですね（＊～～＊）

۲۷۰

でもいつか素材に困るかと思つて私が勝手に作つちやいました↑  
抛点周りに作つたチエストに素材モリモリ入れときますんで使つ  
てください ( ^ \_ ^ )

ところでカーテン変えたんですね、春らしくていい色使いだと

詳細

返信 b1691 q6986

M a p l e 3 時間前

お酒を飲みながらクラフトしていたらクラつときませんか？  
行きつけだつたあのタイ料理屋、なくなつちゃうんですつて。  
いい店だつたからこれはいタイ、お店屋さんもタイ変な時代です。  
最近行つたパブのフイツシユアンドチップス、イマイチでしたね。  
油が回つたフイツシユで思わずギョツとして

詳細

返信 b11599 q289

k o j i 3時間前

+Maple 写真集買いました！ファンです！

返信 b39 q3349

ようこ 2時間前

+k o j i お前それはさすがに無粋つてもんだろ

返信 b895 q2

|||||

貴子 4時間前

ウサミン1本の動画で8回死んでて草

返信 b59 q

## 第17話 劇場版SUPER BIRD

はじめに映つたのは空の上の雲だつた。

徐々に下へとカメラがパンしていくと、チンチン電車が走り抜ける古風な町並みが見え、その手前からぬうつと現れる名古屋城の周りに花火が飛ぶ。

そのままカメラは後ろへと引き、名古屋城の全体が映ると同時に『M i s h i r o』というロゴが浮き上がつた。

『S U P E R B I R D』というシンプルなタイトルロゴのすぐ後に、ウサミンの自己紹介が始まる。

「え、えっと、安部菜々です。子供の頃からずっとアイドルになりましたかってんで、嬉しいです」

ちょうど二年前、今十七歳のウサミンがまだ十七歳の頃だ。

今や彼女のトレードマークとなつたエプロンドレスではなく、ややフォーマルなジャケットとスカートを着ている。

U t u b e のコメントでは「参観日のお母さん」とか「AVのインタビュー」とか書かれていたけど、今となつては懐かしい姿だな。

「スウイーティーにアイドルやります♪ しゅがーはあとだよ☆」

今とほとんど変わらない顔の佐藤が楽しそうにカメラへとピースマークを向けている。

初日だからかツインテールですらなく服も普通のスカジャンで、これからスーパーバードを引っ張つていく女とは思えないほど気の抜けた姿だ。

今でもこの動画がテレビ等で流れるたびに「撮り直しさせてくれよ」と電話してくるが、俺はナチュラルでいいと思うけどな。

【元【コンプライアンス】テレビの川島瑞樹です、他分野への挑戦も人

生経験ということで頑張ります。アナウンサーのお仕事も募集中です」

元からの知名度のおかげか、川島さんは最初期はスーパーバードの一番人気だった。

この頃はジャージになるのも嫌がつてたんだが、最近はビジネスルックの方が珍しいぐらいだ。

ある意味この二年で世間からの評価も本人の暮らしあり、一番大きくなってしまった人だろう。

なお、アナウンサーとしての仕事は二年間で三件しか来なかつたらしい。

「ヘレンよ」

ぴにやこら太を半脱ぎの汗だくヘレンがウインクを飛ばす。

これはこの間の全国ツアーハーの間に撮った素材だ。

ぴにやこら太の中身を公式に公開することは正直したくなかったが、佐藤の「ヘレンだつてスパバだろうが☆」という声に押されてこういう形になつた。

『スーパーバードにはこの女達の他に、一人の男がいる。天領鍍金、彼は今回の世界中にアルバム収録曲を求める旅の企画立案者である』

そして俺のナレーションと共に映し出される写真付きのパスポート。

『そして信じられないことだが……最初の旅の出発前、この男以外のメンバーは何のために、どこへ行くのか聞かされていなかつた』

俺のパスポートの上に四人のパスポートが重ねられる。

『彼女達が聞かされていることはただ一つ、外国に行く。彼女達の胸中を思うと胸が痛む。しかし、現実は非情である。彼女達は、自らの意志とは無関係に、これから広い地球のどこかへ飛ばされることになるのだ』

緊迫感のある音楽が鳴り響き、荒廃した裏路地で一人の女の後ろ姿を追いかけるメンバー達の背中が映る。

浮かび上がったキャプションは『盜人、襲来』だ。

「あれっ！ パスポート入ってるんです！ 取り返さなきゃ！」

涙目でカコツ！ カコツ！ とヒールを鳴らしながら走るウサミンを佐藤と川島さんが追い越して走つていく。

二人ともアイドルにしては健脚だが、地の利のある引つたくり女になかなか追いつけずにいた。

「パスポートは鞄に入れるなって言つたでしょ☆スリだらけなんだから！」

「警察ぐらい呼んだらどうなの!?」

「警察は役に立ちません、大使館に行けって言われて終わりですよ。走つて走つて！」

日本だつてそうだが、警察は呼ばれてすぐ来るものではないし、犯罪全てを調査してくれるわけでもない。

人間いざという時は常に自分の体で解決するしかないのだ。

「あー！ ヒールがあ……」

疾走しているうちにパコツといい音がしてウサミンのローファーのヒールが折れてしまい、彼女はひび割れたアスファルトの上にベ

しゃつと倒れ込んだ。

踏んだり蹴つたりだな……

「ナナ先輩はなんで海外にヒールで来るのーっ!!」

「だつて行き先なんて教えてくれなかつたからあ……」

俺たちはウサミンを置いて裏路地を走り抜け、置いていかれたウサミンはカメラに向かつて弱々しく手を伸ばしただけなのだつた。

画面は切り替わり、アパートの立ち並ぶ夜の街を、道を塞ぐようにな歩いてくる女達が映る。

キヤップショーンは『拳銃を持つた女達』だ。

「やばいってあいつら☆銃持つてるつて！」

佐藤が本気でビビつた顔をして俺の腕を掴んで揺すり、カメラがぐわんぐわん揺れた。

「ニユーヨークは銃規制が厳しいんじやなかつたの!?」

川島さんも珍しく取り乱している、明るいところなら蒼白になつた顔面が写せたのかもしれないな。

「ニユーヨークつつてもここはチンピラの聖地サウスブロンクスですよ。気合入つた連中なら拳銃ぐらい持つてますよ

「そんなどこ連れてこないでくださいよ～!!」

ガシツと腰にしがみついてくるウサミンを振りほどき、ぴにやに力メラを手渡す。

「はいはい道戻つてください、大通りまで行きましょう

「おいおいあいつらついてきてるって～！」

「はい目を合わさないで～」

「銃持ってるのよ！」

「ぴにや……」

先頭を行くウサミンの足取りが次第に早くなり、次第に全員が走り出す。

カメラの後ろから『待て！』と声がかかつたところで画面は暗転した。

次に映った場面は車の通らないだだつ広い車道で、ビニール袋を持つた怪しいヒジヤブの女が話しかけてきていた。

キヤプショーンは『売人による歓迎』だ。

「なになに、何言つてんのこの人？」

「怖いんですけど……」

怯えるメンバーを抑え、俺がきちんと返事をする。

「ノーペーパーノーペーパー」「ペーパーってなんのことかしら？」

「LSDだよ」

「LSDつてなんだろ☆」

「さあ……なんでしょうか？」

有名な幻覚剤だが、佐藤とウサミンは名前も知らないようだ。

川島さんはげえつという感じの顔をしている。

さすがに元アナウンサーだからな、そういう知識もあるんだろう。

ヒジヤブの女は切手シートのようなLSDをどこかに片付け、次にチャック付きの小さいパケ袋に入った青のりのようなものを取り出した

「あー、ノーウィードノーウィード」

「ウイードつてなんだよ？」

「大麻でしょ……」

「なんでイスラエルって国は空港出た途端に売人に声かけられんだよ！」

佐藤の怒りが夜の道路に木霊する。

ウサミンは未だにイマイチわかつていなかつていいのか、ポカンとした顔で口を半開きに開けていた。

次に画面が変わつた先は、霧の街ロンドンだ。

キヤップショーンは『マズい飯』だ。

「これは食えないって☆」

テーブルに座つた佐藤が、他のメンバー全員に囲まれて詰められている。

机の上にはでんと置かれたイギリス名物鰻のゼリー寄せ。

一口だけ食べられたそれは、雑を極めた作りのサンドイッチや焦げかけなのにふにやふにやのポテトに囲まれてなお異彩を放つていた。

「お前が頼んだんだろ、食え！」

「味がやばいんだつてこの鰻のゼリー☆素材そのまんまだぞ！」

「そんなこと頼む前からわかってるじゃないの！ なんで頼んだの！」

「そうですよ、サンドイッチ以外頼まなくていいつてみんなで決めたじゃないですか」

四方八方から責められる佐藤だが、全く悪びれずスプーンを机の上に放り出した。

「もうポテトとサンドイッチには飽きたんだよ！　とにかくはあとはこれ以上食べないからな☆」

「イワシの頭のパイ完食したびにやがキレてんぞ」

「ぴにや……」

怒気を隠しきれないぴにやが佐藤の肩をがつちりと掴み、それに合わせて川島さんもバカの頭をホールドする。

そして珍しくムツとした顔のウサミンが、机からスプーンを拾い上げて佐藤の口元に無理やり饅頭を突っ込んだ。

「モガーッ！」

「お前全部食え！」

「なんでだよー！」

佐藤の叫ぶ顔と共に画面はフェードアウトし、次に映つたのはなんだか白っぽいインドの街角で、さつきの画面と一緒に佐藤が大口を開けたカットだつた。

キャプションは『辛い飯』だ。

〔結局インドってのはマサラ味しかないんかい☆〕

飯に文句ばっかり言つている佐藤はデカいスプーンでチャーハンを口に運び、ペットボトルの水で流し込むように飲み込んだ。

基本的に海外で飲むのはペットボトルや缶・瓶飲料ばかりだ。

煮沸してあるお茶なんからしいが、冷たいものなんか飲もうものなら水が生水で腹をやられたりするからな。

「変なものを食べて入院するよりマシでしょ……ヘレンはまだ長引きそう？」

「一応全治二週間とのことなので、もう五日ぐらいです」

そう、ヘレンみたいにな。

「何が悪かつたんですかねえ……」

「何がつていうか、インドが悪いんだって！ 料理人全員手洗わないんだから☆」

佐藤はプリプリ怒るが、世界レベルで考えれば日本の清潔レベルが上すぎるだけだ。

インドだって生水と腐ったものに気をつければそうそう入院まではいかないからな。

それに今いるのは観光客が多い地域だから、余計に気を使っているはずだ。

「これでもゴアは観光地なんで、まだ気使ってる方ですよ」

「今は地域の話をしてるんじやなくてインドの話をしてるの☆」

ま、インドは合う合わないあるからね。

「はあ……お味噌汁飲みたい……」

心底疲れ果てた様子の川島さんの顔がフェードアウトし……次に切り替わった先は、真っ青な海。

そしてサメの背びれだ。

キヤプショーンは『迫りくる大自然』。

「やめろやめろ！ やばいって！」

「ヘレンも撮つてないで止めて！」

船の上でヘレンが取り回すカメラはグラグラと揺れながらも、海パンで首を回す俺の姿をしつかりと捉えていた。

「あのサイズなら素手でも多分いけるでしょ」

そう、俺が狙っていたのは海を泳ぐサメだ。

サメといつても成体じやない、五十センチほどの子供だ。

『無理ですよ！ やめて！ 錆使わないと！』

「ほら漁師さんも多分ダメって言つてる！」

「いけるって言つてますよ」

『海の中でサメに勝てるわけないでしょ』

「この顔でいけるって言つてるわけねえだろ！」

「子供のサメなんかに負けるわけねえだろ」

そう言つて、画面の中の俺は海へと飛び込んでいった。  
我ながら滅茶苦茶だ。

「あーっ！ ……いつちやつた」

「鍛金が死んだらどうやつて日本に帰るんだよーっ!!」

佐藤の叫び声と共に画面は切り替わり、次に映つたのは、目に痛い  
ほどの大天球。

キヤブショーンはない。

言葉がつけられないぐらいの自然の美しさが、スクリーンいっぱい  
に広がっていた。

「星だあーっ!!」

そしてさつきとは打つて変わつて喜色満面の佐藤の叫び声と共に  
BGMはフェードアウトし……

シンと静まり返つた黒い画面に真っ白なタイトルが浮かぶ。  
『全てはここから始まつた』

そんなタイトルと俺のナレーシヨンと共に映し出されたのは、  
松戸の超鳥貴族。

そのカウンター席に座り、焼酎のお湯割りを飲む人物の目元にはモザイクがかかっている。

『スーパーバードの結成その時に、たまたま隣の席に座つていらつしゃつたということですが?』

「そうですね、お腹がグウグウで食事に入つたらグウ然居合わせました」

『まさかその四人が映画にまでなるとは思いませんでしたか?』

「いえ、横に座つたその時から凄い存在感でしたから……スターの風格をホシいままにしていましたね」

しょーもないダジャレを言いながら時々組み替える足がセクシーなこの人、実は美城芸能所属のタレントなのだが……

彼女の出演許可を取り付けるのがこの映画を作る中で一番大変な仕事だつたかもしれない。

『今回は四人が世界に打つて出るということですが、どう思われますか?』

「当然、と言いますか。日本でのほほんとやっているのはもつたいないぐらいの人達ですから」

『それでは最後に、あなたにとつてのスーパーバードとは?』

『愉しみ、ですかね……古いナポレオンのように、時を経るごとにトキめきが増していくようです』

心底楽しそうな口ぶりでそう言つた彼女は空になつたコップを力メラに向かつて掲げ、そのまま場面はフェードアウト。

次に映つた画面には、インドネシアはジャカルタの大渋滞をバックに立つスーパーバードの姿が映し出されていた……

.....

二時間弱の上映が終わり、万雷の拍手が会場中に響く。

スーパーバード総出でドイツまでやつてきた甲斐はあつたらしい。スペクタクルな部分では歓声が起こつていたし、喋り部分ではしつかりと笑いが取れていたように思う。

上映前は誰も寄り付かなかつたびにやこら太も、今では周りの人達に写真撮影を頼まれている。

狙いはうちのスター四人の誰かが主演女優賞を取ることだが、こればっかりは結果が出てみなければわからないな。

とにかく、確かな手応えを感じた我々五人は、ドイツのめちやうまソーセージとビールで盛大に前祝いを行つたのだつた。

.....

おまけ

映画『SUPER BIRD』予告編

145, 144, 545回視聴

|||||

M i s h i r o G e i n o

2014／06／15に公開

ドイツ国際映画祭に出展予定

国内での公開は未定です

のコメント欄

|||||

ちゅりお 2時間前

日本で公開できないってどういうこと?

返信 b758 q25

ペツシ 1時間前

マジそれ

返信 b58 q2

まみ 1時間前

スパバは日本の芸人だろ? なんで日本を飛ばすんだよ

返信 b334 q1

koles 3時間前

署名今どうなつてんのかな?

絶対原因事務所だよな

返信 b2245 q250

りま兄 2時間前

5万人突破したつてニュース出てたで

返信 b8989 q20

IORA 3時間前

頼むからスパバ独立してくれ

返信 b5584 q635

蒼き衣 3時間前

クラウドファウンディングやつてくれって思う

返信 b457 q66

Nightmarekonan 1時間前

スパバみたいな雑魚が独立してやつていけるわけないだろ

返信 b3 q6587

律子LOVE 4時間前

スパバの動画にこんなに低評価ついてるの初めてみた

返信 b81 q3668

|||||

♡ M I Y U ♡ 5 時間前

こんなこともあろうかと、パスポートを用意していて良かったです。

ドイツって行つたことがないけれど、ビールがおいしいそうです。  
ね。

Mapleさんも張り切つていました、私も飲みすぎないように注意をしないと。

もしあちらでも会えたら嬉しいです、電話してくださいね。  
あと、海でのシーン……ドキつきました、裸を晒すのはあなたの身に

詳細

返信 b7785 q9954

のび太 4 時間前

やべーw

返信 b472 q115

hole1 1 時間前

動画興味ないけどこれだけ見に来てるわ (笑)

返信 b89 q5

――――――――――

ひとみ 5 時間前

ドイツ旅行楽しみです (\*^\_^\*)

凄いですね～日本より先にドイツの銀幕デビュ－ (\*^-^\*)  
予告編でもちらりと見えるあなたの顔と体にドキドキ (\*^-^\*)  
最近職場の子もスパバのファンになったので、もし日本公開があれば  
その子と行きます (\*^\_^\*)

それとカーテン換えたんですね、色が  
詳細

返信 b3457 q11904

ワイキキ 4 時間前

ヒエーツwww

返信 b91 q15

媚丸 4時間前

やっぱこいつがいちばんやばい

返信 b8889 q5

Clone 6時間前

あの炎の中走り回るシーンどこの国だろ

返信 b285 q33

でずね 3時間前

インド。ニュースになつてたやつ

返信 b2115 q

猫ちゃん♡大好き 6時間前

海外旅行ははじめてなんだけれど、ドイツは前から行つてみたかったの。

今は一緒に行く友達三人と色々と旅行プランを練つているわ。

ビールは苦手なんだけれど、付き合い程度には飲めるからそれも楽しみ。

ホテルは会場の近くに取つたから、あちらで会えるのを願つてゐるわ。

いつでも電話してね、いつでもあなたの

詳細

返信 b3711 q3934

Maple 7時間前

ドイツでビールを飲むのはどいつだ?

ふふ、私ですね。

ソーセージで飲みますよ、セージンですので。

ほこほこのジャガイモ料理で心もほこほこ。

もちろんお酒ばかりじゃありませんよ、あな

詳細

返信 b23555 q4455  
H o k s 4 時間前  
予告編チラツと出てましたね！  
返信 b87 q655  
D o l l s 3 時間前  
ファンです！  
返信 b q88  
| | | | | | | |  
G r e e d m a n 9 時間前  
ウサミン馬に噛まれてて草  
返信 b552 q1

「天領さん！ ドイツ国際映画祭で監督賞を受賞ということですが今のお気持ちは！」

「天領さん！ 『S U P E R B I R D』の日本公開は本当にないんですか！ 天領さん！」

「美城芸能に対しても何か思うところは!?」

なんとなく涼しいドイツからドヤクソ暑い日本へと凱旋してきたこの日、成田空港はなかなか見ない量のマスコミでごつた返していった。

そう、俺たちの作った映画『S U P E R B I R D』は見事にドイツ映画祭で入賞を果たしたのだ。

残念ながら主演女優賞ではなく監督賞ということになつたが、受賞は受賞だ。

佐藤には「ずつこいぞ☆」と肩パンをされたが、まあ目的がきちんと果たせたんだからいいだろ。

「あーあ、主演女優として帰つてくるつもりだつたのにな☆」「監督賞が取れたことだつて凄いことなのよ」

「そうですよ！」

「キャラクター賞があればびにやが取つてたかもね」

そんなことをくつちやべりながらタクシーで会社へと戻り、アイドル事業部にお土産だけ渡してこの日は解散となつた。

ドイツの芋料理とホテルも良かつたけど、やつぱり日本の超鳥貴族と自分の部屋が一番だ。

一杯ひつかけてちよつとだけ仕事して、泥のように眠つた。

時差ボケつてわけでもないが、いつでも海外から帰つたその日は疲労困憊だ。

明日は社長に直談判だしな、よく寝ておくに越したことはないだろ

う。

「……で、社長の説得駄目だつたつて？ マジかよ？」

「まさか映画祭で賞を取つてもひにやの使用を拒否されるなんてね  
……」

「朝から社長室を叩き出されるまで四時間粘つたけど駄目だつた」  
「粘りすぎですよ～」

ドイツから帰つた翌日、ドイツ映画祭監督賞作品という巨大な交渉材料を手に意気揚々と社長への直談判に向かつた俺は、結局NOを突きつけられて帰つてくることとなつた。

思つた以上に社長の態度は頑なで、交渉の余地なしといつた感じだ。

これは社長がはつきりと言つたことだが……

今や超巨大ビジネスに成長したびにやこら太事業は、たとえどんな賞を受賞していようがたかが映画一本とは比べ物にもならないのだそうだ。

美城芸能はこれからぴにやこら太をハロー・キティのような巨大IPに育てていく計画を立てているらしい。

ぴにやこら太のイメージを固めるためにも、ヘレンのびにやは今後テレビと銀幕に出させるつもりはない……ときっぱりそう言われてしまつたからにはもうどうしようもない。

俺だつてサラリーマンだ、上の命令には真っ向からは逆らえない。デカいシノギだ、社員の生活がかかつっているというのも、まあわかつてているつもりだ。

しかし、しかしだ。

会社のやり方にムカついているのも確かだ。

俺たち5人と同じように、ぴにやこら太もまたスーパーバードなのだ。

その晴れ姿を皆に見てほしいと思うのは、俺のわがままなのだろう

か？

「で、どうするの？」

ぴにやの着ぐるみをブラッsingしていたヘレンが聞く。

「どうしよつかな」

「と言つても、今回ばかりはもう無理じやない？　せつかく賞まで貰つたけど、お蔵入りかしらね」

マツサージ機にかかりながらレモンのシャーベットを食べている川島さんがそう言うと、床のゴザに寝そべつてホームランバーを頬張る佐藤が話を混ぜ返す。

「でもさあ瑞希ちゃん、予告編が1・5億再生もされてるのにもつたいないって☆」

そりなんだよな。

映画の予告編がいつの間にか凄い再生数になつてて、ファンたちが署名活動までしてくれていたらしい。

まあ、その批判を受けてでも配給しないっていうんだから、社長も大概腹が据わってるよな。

「ミニシアターなら伝手がありますけど……また人が詰めかけて大変なことになっちゃいますよね」

アイスまんじゅうを頬張るウサミンが言うとおり、小規模劇場でさつさと上映するって手もないではない。

でもまあ、今のスーパーバードの人気だと公共交通機関が麻痺するレベルで人が集まるからな、劇場側から拒否されるかもしね。

「もうU tubeで流しちゃう?」

「いや、うーん……」

ヘレンの言うそれが一番現実的な線だ。

実際社長にもそうしろって言われたんだよな。  
でもなあ……

「それも手なんだけど……どうせならでつかいとこで上映したい」

せつかく音響も映像も色々作り込んだんだ、最終的にはネットに上げるかディスクで売るとしても、最初の一回ぐらいは大きい画面でみんなで見たい。

俺たちがどんな旅をしてあのCDを作ったのかを、きちんと発表したいのだ。

「でつかいところつてどこよ?」

「TOHOシネマですか?」

TOHOシネマに配給できないから困ってるんだよ、とウサミンにツッコミを入れようとしたその時、俺の頭にひとつアイデアがよぎった。

そう、前世で行つた、TOHOシネマで行われたロックアーティストのライブビューイングだ。

あれの逆で、ライブで人を集めて、そこで映画を上映したらいいんじゃないのか?

「…………武道館」

完全に思いつきだつたが、口に出した瞬間「これしかない」という気持ちになつた。

「武道館でライブをして、そこでゲリラ公開だ！」

「はあ？ 武道館？」

佐藤は驚いた拍子にゴザの上にホームランバーを落としてしまつたようだ、後でちゃんと掃除しておけよ。

「武道館つてあの千代田区のどこですか？？」

「そうです、東京ドームに近いあそこです」

「そんなでつかいところ、そもそも私達が出れるわけ？」

「なんとかします」

川島さんは怪訝な顔だが、俺はやると言つたらなんでもやつてきた男だ。

まあ準備に多少時間はかかるだろうが、今回も必ずやり遂げて見せるぞ。

「ていうかそれって、社長に怒られないの？」

「配給しない、と宣言されただけなんで、こつちが勝手にやるのは大丈夫じゃないですかね」

心配そうな顔のヘレンには悪いが、多分怒られる。

まあ、どうせ面と向かつて怒られるのは俺だけだしな。

よし、やるぞ！

次の目標は武道館デビューだ！

「まあ、鍍金くんがやるつて言うならいいけど……」

「私は楽しみですよ！」

「武道館かあ☆ほんとなら夢みたいだよなあ」

「そういう目標があるなら、私ももつとダンスを磨いておかないとね」

「今でもキレキレのびにやのダンスがもつとキレンのかよ☆」

とにかく一つ大きな目標のできた我々は、この日からまた精力的な活動を再開したのだつた。

美城芸能前の駐車場に、我々はまた集結していた。

みんなリュックの旅装束だが、美容にこだわる川島さんだけはでつかいスースケースを引いている。

佐藤とウサミンに至つてはもう最初からジャージとスニーカーだ。いつの間にか我々もすっかり旅慣れてしまつたな。

「さて皆さん！　ドイツ旅行は楽しかつたでしようか？」

「おー！」

「涼しくていいとこでしたね♪」

「ああいう海外ならいいわよねえ」

「インドとかイスラエルとかはもう勘弁してほしいわ……入院したくないし」

ヘレンはどうも旅運がないんだよな、ドイツにも忘れ物をしてきたし。

「今回皆さんには旅をするということはお伝えしていましたが、行き先は言つていませんでしたね」

「そうだよ、どこ行くかわかんないからジャージになつちやつただろ  
☆」

「それで、どこ行くんですか～？」

「逆に聞きましよう！　皆さんどこに行きたいですか？」

「えつ？」

「どこでもいいですよ、今回は皆さんに行きたいところに行きましょ  
う！」

皆にそう言うと、最初はポカンとした顔をしていたのだが……

次第に状況が飲み込めてきたのか、すぐに全員が嬉しそうな表情になつた。

「やつた～！」

ウサミンは両手を上げて喜びを表し、隣の川島さんと手を合わせて喜んでいる。

俺はフリップとマジックを取り出し、皆の意見を待つた。

「どこでもいいのかよ☆」

「いいですよ。たーだーし、日本国内限定です」

「もう海外はしばらくいいわよ……」

「なるほどね、どこにいくかわからないから今回は簡易ぴにやだけ用意したのね」

「下呂温泉☆」

「京都～！」

「暑いから札幌、前みたいにバイクで帰つてくるのは勘弁よ」

「私厳島神社、一度見てみたかったの」

「はいはいはい、あと二つどうぞ」

「鎌倉～！」

「普段あんまり行かないから横浜中華街☆」

「はいそこまで！　ちよつと待つてくださいね～」

俺は皆の言つた目的地をフリップに書き込み、佐藤に持たせた。  
そしてウサミンにはサイコロを持たせる。

「なんだよこのフリップ☆」

「サイコロ～？」

「皆さんには、このサイコロで行き先を決めてもらいます」「なるほどね、たしかにこれなら恨みっこなしね」

そうでしようそうでしよう。

勘の鋭いヘレンがなんだか嫌そうな顔をしているが、無視して先に進めよう。

「振りますよー」

「おつ！ 三番！ 札幌かあ☆」

「やつたわ、またあの美味しい回転寿司行きましうね」

浮かれる三人には悪いが、この企画、それだけじゃない。

「じゃあ、どうやつて行くか決めましょーか」

「えつ？」

「はあく？」

「まさか歩いて行けとか言わないでしょーね」

「大丈夫、体を使う企画じやございません」

俺は予めリストアップしておいた経路と行き先をフリップに書き込んで、また佐藤に渡した。

- 1 飛行機で札幌
- 2 フェリーで札幌
- 3 飛行機で福岡
- 4 新幹線で福島
- 5 新幹線で大阪
- 6 フエリーデ徳島

六つの選択肢のうち、二つが札幌行き。

その他はてんで別の場所への道行きとなつてている。

「おいなんだよこれ☆全然関係ない場所も書いてあるじやんか」

「今回の企画はそういう企画です、サイコロを振って、出た目に向かって頂きます」

「はあく!? なんでだよ!」

「普通に旅行させてくださいよ」

「こんなことじやないかと思つた……」

「悪い予感がしたから着替えを多めに持つてきただけど、よかつたわ……」

騒ぐメンバー達を落ち着け、再びウサミンにダイスを渡す。

このメンツ全員一週間はこの他に仕事を入れてないからな、ハズレまくれば最悪六泊七日だぞ。

「さあ！ 運命の第一投目を……どうぞ！」

「あの、これつて札幌についていたら終わりですよね？ 帰り道もなんて言わないですよね？」

「どうぞ！」

こうして、メンバー全員が憔悴し切るまで続くことになる悪魔の企画「サイコロの旅」の最初の賽は、ウサミンによつて投げられたのであつた。

## 第19話

「……で、新幹線にいる間どうすんだよ☆」

「なにかしたいことがあるなら、どうぞ！」

「どうぞ！ ジヤねーだろ☆考え方とけよ少しは！」

「もしかしてノープランなの？ 何の中身もない企画になるんじやない？」

「たしかに、電車で移動中にできる事つてないですもんね……」

「ぴにゃ……」

冷房のしつかり効いた新幹線のグリーン車に乗り込んだ我々は、レモン缶チューハイを片手にくだを巻いていた。

半時間前、美城芸能前でウサミンの投げたダイスは4の『新幹線で福島』。

今はそのダイスに従い、新幹線で福島へと移動中なのだつた。

三列シートを回転させて作つたボックスの中で一息ついたのはいいが、やることは何もない。

とりあえずカメラは回しているが、多分このシーンで動画に使われるるのは十秒ほどだろう。

あまり納得のいっていなさそうな顔をした佐藤はピーナツツを齧つてチューハイを煽り、簡易型ぴにゃを被つたヘレンは何やらスマホを操作している。

マツタリとした空気が流れ、くあつとアクビをした瞬間、車両真ん中の通路を歩いていた女と目が合つた。

大学生ぐらいの年頃のその女の子は驚きに目を丸くして小さく「あつ！」と声を上げ、俺が口の前に立てた人差し指を見て、嬉しそうな顔でコクコクと頷いた。

「あの、応援します」

横を通り小声でそう言つてくれた彼女に、俺は小さく手を振つた。

逃げ場のない新幹線の中だ、騒ぎになつたら恥ずかしいからな。

理性的なファンで良かったよ。

胸をほつと撫て下ろしたのもつかの間、また別の人間とバチツと目が合つた。

## 制服を着た高校生た

平日は制服で新幹線に乗っているといふことは、修学旅行が何かだらうか？

ら絶叫が飛び出した。

「どうしたつて？」  
何が！」

「こつちグリーン車だつて！」

「えっ!!  
ベツキバン!!!」

後から後からぞろぞろとこちらへと歩いて集まつてくる女子高生たちの青い叫びを聞きつけて、他の客たちもこちらへと視線を向ける。

「おい☆」

渋い顔の佐藤がスニーカーのつま先で俺のスネをちよんと突き、川島さんは我関せずという感じで窓の外へ視線を向けた。

備のせいしゃれーだぞ！

「あ、あはは……これはレモンジュースですよ」

高校生の無遠慮なスマホを向けられ、困った顔のウサミンは背中と

座席の間にお酒を隠して頭をかいた。

「あのっ！ 撮影中ですか!?」

「サイン欲しいです！ お願ひします！」

「ウサミン顔ちつちゃい!!」

女子高生は次々に車両へ入ってきて、俺達の席の周りを取り囲むようになだかりを作りはじめた。

「大きな声がしたそうですが、何かございましたか!?」

「いや、あのお……スーパーばーどが……」

車両の入り口からは騒ぎを聞きつけてやつてきたらしい乗務員と女子高生がそんな話をしているのが聞こえてくる。

もう、大迷惑だ。

そうか、新幹線だとこういうこともあるのか。

あんまり他の客の迷惑になるんじやあまざいよなあ……

俺は何の抵抗もできずに女子高生に写真を撮られながら、心の中で今後の旅の中の鉄道移動の選択肢に横線を入れたのだつた。

福島駅に滑り込んだ新幹線の周りは、スマホを構えた人々でごつた返していた。

恐らく誰かがSNSで拡散したんだろう。

福島中のファンが集合したんじゃないかというぐらいに、ホームにはむつとする熱気とざわめきが立ち込めている。

「おいおいおい☆ すげーことになっちゃつてるつて！」

「これ、ヤバいんじやないかしら？」

「パニックになっちゃつてますよ！」

「着ぐるみのびにやじやなくて良かつたわ」

開いた新幹線のドアから我々が顔を覗かせると、集まつた人々から  
どよめきが起ころ。

おかしな、まるで国際線を降りた外タレのような扱いじゃない  
か。

「これ……なんで？ 前まではここまでじゃなかつたよな？」

「バカお前、映画の賞取つてから延々ニュースに出てんだから前と比  
べもんになるわけないだろ☆」

「今はU t u b e のお気に入り登録者も1500万人超てるのよ。  
海外の人も多いけど、七割ぐらいは日本人なんだから」

「そうですよ、凄い人気なんですから」

「全国7000万の日本人の二割に見られてるってことか……」

登録者数なんて気にしてなかつたけど、そんな状況でこの企画はた  
しかに無茶だつたのかもしれない。

「佐藤ーつ！」

「びにゃーつ！」

「降りられるお客様がいらっしゃいますのでお下がりください!!」

「ドアの前に立たないでーつ！」

ファンたちの歓声と駅員の制止の声が響き、俺たちはロツクスター  
というよりは動物園のパンダのような気分で新幹線を降りた。

四方八方から向けられたスマホのカメラからはマシンガンのよう  
なシャツター音が響き続け、駅から出てワゴンタイプのタクシーに乗  
り込むまでその音が鳴り止むことはなかつたのだつた……

それから十日後。

旅から戻つてゆつくり休息を取つた俺達は、暑い地上を逃れて地下  
の涼しい鳥の巣で次の企画の打ち合わせを行つていた。

「もう旅系の企画は禁止！ 決定な☆」

三人掛けのソファを一人で占領してあぐらをかいた佐藤が、食べ終わった後のアイスの棒で俺を差しながらそう言つた。

「やむなしね」

「サイコロの旅はほんとにひどかつたですからね……」

コーヒーハイ片手にマツサージ機に座りっぱなしの川島さんと、床に敷かれたござの上にちよこんと座つたウサミンも佐藤の意見に同意のようだ。

「ウサミン腰痛湯治の旅とか駄目？」

「ナナ先輩には申し訳ないけど……しばらくはほんとにやだ！ お前がサイコロの目全部深夜バスにしたせいでマジでしんどかつたんだぞ☆」

「深夜バスならみんな寝てるし人数も少ないから混乱は起きない、なんて自信満々で言つてた割にきちんと大混乱だつたしね……」

「まさか深夜バスの乗客の人が行き先をネットに流しちやつて、ファンの人たちがバス停で出待ちしてるとは思いませんでしたね」

たしかに現場は大混乱だつた。

今回の旅の件で何通か美城芸能に苦情のメールが届いたらしく、このまま何度も騒ぎを起させば佐藤どころか会社から国内の旅の禁止令を出される可能性だつてある。

やつぱり、もう国内で好き放題撮影するつてのは厳しいか。

「そもそも武道館でライブするのが当面の目標だつたんでしょう？ なんで旅なんか出たのかしら」

「実は夜寝る前に急に思いつきまして。これはと思う企画でしたので」

「思いつきであんなえらい目にあわしたんかい！　いい加減にしろよな☆」

「前のレコ初ツアーも大変だと思いましたけど、今思えば深夜バスよりは全然良かつたですね……」

そう言いながら遠い目をしたウサミンは、辛そうに腰をさすつた。今回は俺の見様見真似のカイロ・プラクティックでなんとかごまかしたが、ウサミンの腰痛はどこかで改善が必要だな。だいたい体が細すぎる、筋肉量が足りてないんだろう。

「そういうやレコ初やつたはいいけどさ、ファーストアルバムがまだまだ全然売れ残つてるんだよな☆」

そう言いながら佐藤がアイスの棒で差した先には、CD入りの段ボール箱の山があつた。

英語歌詞の曲ばかりだからちよつとセールスに苦戦するかなとは思つたが、まさかここまで売れ残るとは俺も予想していなかつた。まあ、このアルバムを作る過程を撮影した映画が公開できれば作った分は売れるとは思うけどな。

「正直3万枚は作りすぎたわね」

「でもさあ、U t u b e の登録者1500万人もいるのに3万枚捌けないなんて思わないって普通☆」

「ですよねえ」

知名度と物販の売り上げが比例しないのはU t u b e の不思議なところだ。

まあ知名度だけで何でも売れるならテレビの情報番組も苦労しないんだろうが……

「そういうえばライセンス事業部の方のびにやこら太のCDは、もう1

0万枚も売れてるらしいわね」

「まあまあヘレンさん、あれはコラボじゃないですか……」

爪をヤスリで磨きながら苦々しげな顔をするヘレンをウサミンが宥めた。

そうなのだ。

実は我がスーパーバーナードじやない方のびにやこら太は最近本気で絶好調で、朝の子供向け帯番組レギュラーを獲得し、バラエティのタイアップで某有名演歌歌手とコラボしてCDも出してと乗りに乗つていた。

風の噂では、もうぴにやに年末の赤白歌合戦出場の打診が来てるとか来てないとか。

……ん？ 赤白？

そうか、そういう手もあるのか。

知名度はあるがアーティストとしてCDが売れてない今の俺達じゃあ、逆立ちしたつて会社は武道館ライブの資金を出さないだろう。

だが、その知名度に武道館とはまた別の大舞台の裏付けがあればどうだろうか？

「赤白って、出たら武道館ライブできますかね？」

「突然何だよ☆」

「……鍍金君、それって順序が逆じゃないかしら？ 普通は武道館ライブをやってから赤白でしょ」

「そうですよ～」

「逆に言えば、赤白出るぐらいなら武道館に出れる格があるって事ですよね」

「まあ、そう言われればそうなのかな☆」

「今年はぴにやこら太も、赤白歌合戦に出るのかしらね……」

なんだかつまらなさそうな顔でそう言つたヘレンに、俺は指を差し

て言つた。

「それいいですね。出ましょーか！」

ヘレンはギョッとした顔で俺の方を見て、ぽとりと爪ヤスリを取り落とした。

「赤白歌合戦に出れば、余ったアルバムは売れる、武道館への足がかりもできる、いい事ずくめです」

「鍍金お前そんな事言つたつてさあ☆ 出ようと思つて出れるもんでもないでしょ」

「私達、歌手としてはどうしても実績がないものねえ」「でも出れたら凄いですよねえ、故郷に錦ですよ、錦」

俺はスマホを取り出して、昔主催していた暗黒歌謡祭というイベントの参加者達の連絡先を開いた。

俺はスーパーバードを世界に羽ばたける、マジソン・スクエア・ガーデンに立てるアーティストにするために、世界中から本物の楽曲を集めてファーストアルバムを作つた。

だが、もう急ぐ必要はないんだ。

マジソン・スクエア・ガーデンには、ゆっくりと遠回りをして行くことにしよう。

「全て日本の楽曲でセカンドアルバムを作る。そいつで赤白に殴り込みだ」

手の中のスマホからは、軽快な呼び出し音が流れ始めていた。

.....

おまけ

日本全国サイコロの旅 三日目

51, 514, 810回視聴

|||||

M i s h i r o G e i n o

2014/07/10 に公開

札幌の目を出すまで絶対に帰れない地獄のサイコロ旅!  
全く眠れない深夜バスにやられにやられたスーパーバードの顔は必見です!

### のコメント欄

|||||

たいこ 2時間前

マジでどんな番組出しても視聴率取れるスパバがこんなバス乗つて降りて辛そうな顔するだけの虚無企画やつてるのヤバすぎでしょ

返信 b105 q88

りんちよ 1時間前

バス乗つて降りて辛そうな顔してぼやくだけなのに死ぬほど面白いんだが

返信 b88 q1

|||||

H o p e 5時間前

これ☒つぶやきサービス☒でお祭りになつてたやつじやん。いくら企画だからつて他の乗客に迷惑かけるの駄目でしょ。

返信 b652 q353

鋼系 3時間前

芸能人が乗つてきたからつて☒つぶやきサービス☒に本人画像付きでバスの名前まで上げる側にも問題があると思う

返信 b225 q34

チヨピ 6 時間前

鍍金のストーカーが普通の顔して隣の席に座ってるのマジでホ  
ラーだろ

返信 b724 q6

PTA 5 時間前

しかもバス降りて二時間後には普通の顔して生放送出てた

返信 b132 q83

わたべ 5 時間前

バスの中でも飲んでたし絶対酒抜けてへんやろなあ……

返信 b63 q84

黄実 7 時間前

ずっとちゃんとした服装だった川島さんも三日目にしてついに  
ジャージになつたな

返信 b593 q52

猫ちゃん♡大好き 8 時間前

夜通しのハードなバス旅でも、あなたと一緒になら楽しめそう。

あなたも私も温泉が好きだし、いつか落ち着いたら熱海なんてどう  
かしら。

ゆつくりしつとりお風呂に入つて、時間が余つたら卓球なんかし  
ちゃう?

どうしても外せない仕事があつて今回は友達に席を譲つたけど。  
あなたとのバス旅行、次があればきっと

詳細

返信 b4111 q5402

ボリン 7 時間前

バチクソやベーウWWWWWW

返信 b633 q84

NEET 7 時間前

こんなやばい人でもちゃんと働いてるんだなあ

返信 b551 q324

—————

♡ M I Y U ♡ 8 時間前

出演者の腰痛を気遣つてマッサージしてあげるなんて優しいですね。

でも女達はそんなあなたの優しさにつけこんでいるのですから気をつけて。

マッサージのためとはいえ手を握るのはやりすぎかもしません。あなたには魅力がありすぎるのだから、勘違いさせてはかわいそ

う。

いつでも相談に乗りますから、電話

詳細

返信 b2485 q5551

O H P 7 時間前

納涼ホラーありがてえ

返信 b972 q5

—————

いらぐさ 9 時間前

ウサミン寝言でうなされてて草

返信 b811 q

## 第20話

「赤白歌合戦は厳しいかもわからんな」

夏真っ盛りの、うだるようすに暑い夜。

楽曲制作を頼みに行つた関西の飲み屋で、昔なじみのヴィジュアル  
バンドの女がそう言つた。

緑に染めた髪を片側に流し、その反対は刈り上げにしている彼女  
は、暗黒歌謡祭出身の赤白出演アーティストだ。

「なんでだよ」

「自分とこの歌手な、三人おるやろ?」

「四人だよ」

「ほなこの緑の着ぐるみも数に入れよか」

彼女はレモンサワーをぐびつとやりながら、スマホで表示したスレ  
パーべードの画像を、一人ずつ指さした。

「下手、下手、下手、一人飛ばしてド下手や」

ちなみに、飛ばされたのは俺だ。

「うーん……『言られてみれば』

「言われんでもわかつとかんかい! あんたこの子らのプロデュー  
サーやろ!」

たしかにうちのメンバーは、歌の訓練をあまり行えていなかつた。

ライブを重ねてこなれて來たとはいえ、その実力はあくまでもアイ  
ドルとして及第点といつたところ。

これまでそれで困らなかつたのは、ほとんど……いや全く歌の仕事  
がなかつたからだ。

「でも赤白つて、あんまり上手くないアイドルとかも出るだろ?」

「それでも最低限は歌える子らや。少なくとも、素人が上手いと思える音源が作れるぐらいにはな」

「スーパーばーばーどはそこに達してないと?」

「言い方は厳しいけど、才能の問題もある。なんぼようやつても来年の赤白には間に合わんのちやうか。……あつ! 何すんねん!」

俺はヴィジュアル女の刈り上げを指でザリッと擦った。  
特に意味はない。

赤白出演の最低の歌唱力もないという事は、武道館、ひいてはマジソン・スクエア・ガーデンに立つ歌唱力もないという事だ。  
わかつてはいた事だが、スーパーばーばーどはまだまだ前途多難だな。  
まあ、とりあえずは赤白だ。

ロードマップはできている、後は障害物を蹴散らすだけだ。

「来年の赤白、なんかうまい方法ないか?」

「話題の映画とかアニメとか、そういうのから出てくるのもおるけど  
……あんたら会社で嫌われとるんやろ? そんな話も回つてこんか  
……」

ん? アニメ?

「アニメが売れれば赤白出れるのか?」

「まあ、話題になればやけど。あ! 言うとくけどネットのアニメは  
あかんで? あくまで赤白はテレビの祭典なんや、テレビの人気者が  
出る番組や」

「なるほど、テレビアニメね……」

どうせどの道、歌唱力もパフォーマンスも鍛えなければいけないので。  
だ。

そういう仕事がないならば、作つてしまえばいい。

全国をドサ回りするわけでもないから、メンバーからの不満も少ないはずだ。

その上で俺の目標までのロードマップに組み込めるのであれば、最早考えるまでもないだろう。

「まあ赤白はあかんけど……あんたらならお笑いステージがあるフエスに……」

「やるか、アニメ。企画書できたら送るから、曲作ってくれよ」

「……は？ ちょい待て！」

俺はヴィジュアル女に礼を言い、すぐに新幹線に飛び乗つて東京へと帰つた。  
こんな事もあるうかと、ノートパソコンを持ち歩いていて良かつた。

東京駅に降り立つ頃には、俺は上司である美城執行役員に企画書のメールを送信し終わつていた。

「ど、いう事で……我々は再びアニメーション制作に入ります！」

「鍍金くん、百歩譲つてそれはいいとしても……」

「なんでりつちゃんがいんだよ☆」

「人が来るなら言つといてくださいよ～！ 片付けたのに～！」

「……」

美城芸能の地下の鳥の巣。

川島さんのマツサージチエアを筆頭に、佐藤のミシン、ウサミンの布団、ヘレンの筋トレ器具などで雑然としたこの部屋に、今日は元トップアイドルの秋月律子がやつて来ていた。

彼女はアイドルアカデミーというアイドル界の一等賞を決める賞

レースでトップを取り、そこからアイドルプロデューサーに転向し  
……

なんだかんだと独立して、今や自分の事務所を構えている叩き上げのスーパーワーマンだ。

そんな律子はヘレンの回すビデオカメラをちらりと見てから、なんだか不安そうな瞳でこちらを見た。

「あのう……鍍金さん、アニメつて……ほんとにやるんですか？」

「やります。お先真っ暗なぐらいコミュ障な陰キャ女子高生がひょんなことからアイドルになり、爆発力とハツタリと運だけでスターダムを駆け上がる話です」

「うつ……」

なぜかウサミンが胸を押さえて座り込んだ。

朝だからな、低血圧が出たんだろうか。

布団で寝ていてもいいぞ。

「その、内容は別にいいんですけど、どこの局とか、スポンサーとか……」

「局は未定、これから売り込みます。そしてスポンサーは……あなた達です！」

俺はヘレンの回すビデオカメラに向けて、ビツと指を指した。

「これを見ている会社の偉い方！　あなたが出資して頂ければ、スープーバードと私でCMなどもビツと作らせて頂きます！　物にもよりますが、商品などのアニメへの登場も可！」

「つーことは……アニメの主人公は美城芸能所属になるわけだな☆」

「美城芸能には、スポンサーを断られました！　我々には基本給以外一円も出ません！」

佐藤はそんな俺の言葉を聞いて、あんぐりと口を開けて固まつた。

「ですの……アニメに声優としてタレントを出したい芸能事務所の方！ 企業名を使ってほしい芸能事務所の方！ 大チヤンスです！」  
「大チヤンスじやねーよ！ 孤立無援つて事じやねーか！」  
「いつもの事だけど、もうちょっと考えてから動かない……？」  
「そんなアニメにスポンサーになつてくれる人なんかいませんよ！」

スーパーバードの面々が騒ぎまくる中、律子はおずおずと手を上げた。

「はいどうぞ秋月さん！」

俺はそれにビツと人差し指をさした。

「あの、それで……私はなぜ呼ばれたのでしょうか……？」

「我々には企画の立案力と実行力はありますが……テレビ業界へのコネクションが薄いのが弱点です」

真剣な顔で俺がそう言うと、ガヤからヤジが飛ぶ。

「我々つづーかお前だろ！ お前！」

「なまじ実行力があるから余計にタチが悪いのよ……」

「会社の中ですらハブられてんのに、よそに紹介して貰えるわけないんだよな☆」

「うちの部、会社の組織図でも提携企業の隣にポツンと置かれてますもんね……」

俺は文句を聞き流し、律子の肩をポンと叩いた。

「今日秋月さんをお呼びした理由を、あえて言うならば……あなたこそが私の持つてる一番のコネクションだからです！　なのでお願ひします！　テレビ関係の人、誰か紹介してください！」

俺は深々と頭を下げた。

後で動画で確認をしたところ、この瞬間の律子はこれまでテレビで一度も見せた事のないような苦い表情で顔をしかめていたのだった。

…………

おまけ

ネットニュースの記事

主要一国内一国際一 << エンタメ >> 一スポーツ一 IT  
美城芸能のお家騒動！ 秋月芸能に移籍確定!? 人気お笑い芸人『スーパーバード』プロデューサーの語るTVアニメ企画「会社からはポンサードを断られました」の真意とは?!

8／18（日） 19：06 配信 （コメント） 992 （・ｖ・）

（・）（F）

のコメント欄

（・ｖ・） bba\*\*\*\*\*

動画を見たが、動画の中では移籍等と一言も言つて居ない。面白可笑しく書き立てて責任を取らない記者が居るから、報道の信頼性が失われて居る。彼らの事は寡聞にして知らなかつたが、元氣のある若者

だと想う。これまでにも報道のこう言う姿勢でイメージを下げられ、引退に追い込まれた者も居るはず。職業倫理にも取る物が他車を叩きめういを喰うのは許されない話、必ず

⋮ もつと見る

▽返信 0件

b5 q39

(・v・) a h o \* \* \* \* \*

残念ながら当然。本来こんな好き勝手してゐる会社員は給料を貰う資格すらないはず。

美城芸能さんもよく我慢してゐる方でしょ。

△返信 3件

b20 q390

(・v・) k k k \* \* \* \* \*

一 結果出してるスパバに対して美城芸能は報いなさすぎだと思う。  
一 こいつらがどんだけ美城の株価を上げてきたか。

一 今回下がたけど。

(・v・) m a r \* \* \* \* \*

一 て いうかアニメ制作でバツチリ実績あるんだから普通の会社なら予算付けるだろ。

一 この記事は飛ばし記事だけど、ほんとに移籍と言わず独立してもおかしくない。

(・v・) p a p \* \* \* \* \*

一 独立は無理だとおもう。。

一 動画見たけどつまんないし。。

一 プロデューサー? の男はかつこいいから、ドラマとか出たら見るけど。。

(・v・) p p k \* \* \* \* \*

今回の镀金の失言で美城の株価下がったの、上層部はどう思つてん

だろ。

さすがの鍛金もそろそろクビなんかな。

▽返信 2件

b67 q552

—  
— (・ v ・) t h u \* \* \* \* \*  
— 映画の事件では今回の比じやないぐらい乱高下してたから大丈  
夫でしょ

—  
— (・ v ・) f r i \* \* \* \* \*

— 正直株主としてはマジで胃に悪いからこういうのやめてほしい  
— ぴにやこら太ブームではめちゃくちゃ儲けさせてもらつたけど  
⋮

(・ v ・) u f o \* \* \* \* \*

自分でスponサー見つけて自分でアニメ作るつてめちゃくちゃ夢  
ある話だけど、ぶっちゃけスponサーになつてくれる会社いるのかな  
?

ぴにやこら太を作つた名物プロデューサーで映画の賞も取つてる  
人らしいから当たればデカいんだろうけど、なんか全部思いつきで  
やつてそうな感じがして……

▽返信 2件

b266 q34

—  
— (・ v ・) l l k \* \* \* \* \*

— この人常に思いつきで勝ち続けるので……

—  
— (・ v ・) m i k \* \* \* \* \*

— インドで燃える店に突入して中の人に助け出した件とかもそउ  
けど、即断即決の人なんだろうね

(・ v ・) o p k \* \* \* \* \*

久しぶりに見たりつちゃん、アイドル引退してた上に凄い顔してて

ショックだった。  
▽返信 0件

b  
9  
1  
8

q  
4  
2  
1